様式第３号（第６条第関係）

会議結果報告書

令和４年４月11日

１　会議日時	令和４年４月４日
２　場　　所	議員全員協議会室
３　件　　名	西予市ツル・コウノトリと共生するまちづくり計画（ビジョン）
４　出 席 者	市長、副市長、教育長、各部長級職員、総務課長、財政課長、政策推進課長、政策推進課関係職員、環境衛生課長
５　会議結果	□　案のとおり決定する □　一部修正の上、決定する □　継続して検討する □　案を否決する ■　報告を了承する
６　会議内容	●今後の予定は →関係各所と連携し、令和４年度中に実行計画を策定する予定だ。 ●計画に応じた予算の確保は →計画の内容に応じて、補助金、交付金等有効な財源の確保を行うようにする。 ●計画の方向性は →農業の後継者、移住定住、情報発信を含めた経済活動など幅広い計画となっている。地域の方の意見を最優先に推進していく。

備考：会議内容を簡潔に記載すること

様式第２号(第４条関係)

重要計画付議(報告)書

令和４年３月23日

部課名(生活福祉部　環境衛生課)

1　件名	西予市ツル・コウノトリと共生するまちづくり計画（ビジョン）
2　計画の概要	ツルやコウノトリが飛来する宇和町石城地区を中心として、人とツル・ コウノトリとの関わり方、そして自然環境、地域社会などの将来について真剣に考え、自分たちの地域をどうしていくか、その基本方針を整理し、長期的なビジョンを持ってまちづくりを進めていくことを目的に作成しました。 住民アンケート、農家アンケート、座談会などを経て、愛媛大学や西条自然学校などの有識者、地域住民等による策定委員会によって決定に至りました。 本計画（ビジョン）には三つの基本方針を掲げております。 １．ツル・コウノトリと共に 暮らし続けられる持続可能な環境の保全整備 ２．ツル・コウノトリと共に暮らせる豊かさの享受 ３．未来の地域を創造する 地域力の育成 本計画（ビジョン）を実現していくために、令和４年度中に実行計画を策定予定です。
3　関係法令等	
4　関係課	環境衛生課、農業水産課、経済振興課、まちづくり推進課、スポーツ・文化課等
5　その他	

備考：計画書を付議又は報告する場合に使用

西予市ツル・コウノトリと共生する
まちづくり計画（ビジョン）

令和４年４月

西予市

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
Ⅰ．まちづくり計画（ビジョン）策定の背景・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ．まちづくり計画（ビジョン）の目的・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅲ．まちづくり計画（ビジョン）の位置づけと期間・・・・・・・・・・2
　１．位置づけ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　２．期間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅳ．基本方針・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
（個別詳細）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　１．ツル・コウノトリと共に暮らし続けられる持続可能な・・・・・5
　　環境の保全整備
　２．ツル・コウノトリと共に暮らせる豊かさの享受・・・・・・・・・5
　３．未来の地域を創造する地域力の育成・・・・・・・・・・・・・・6

Ⅴ．計画（ビジョン）推進に向けて・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

Ⅵ．資料編・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　資料１．ツル・コウノトリについて　・・・・・・・・・・・・・・・・9
　資料２．これまでのツル・コウノトリ保全・保護に関わる活動　・・13
　資料３．本計画（ビジョン）策定までの流れについて　・・・・・・19
　資料４．ふれあいアンケートの実施　・・・・・・・・・・・・・・・27
　資料５．座談会の実施　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
　資料６．農家アンケートの実施　・・・・・・・・・・・・・・・・・85

はじめに

今でも豊かな田園風景が残っている西予市。すぐ近くの田んぼでは、ツルが落穂を食べています。葦が茂った川では、コウノトリが魚を取っています。そんな姿を西予市ではまだ見ることができるのです。

本計画（ビジョン）策定の基礎資料としてアンケートを取りました。大人のアンケートでは、セミやカエルの鳴き声、自然を大切にしたい、子どもたちの元気な姿をこれからも見たいという声が、子どもたちのアンケートでは、自然をこれからも残して欲しいし、にぎわいのある地域であって欲しいという声がありました。また、農家のアンケートでは、後継者不足が一番の悩みで、ツル・コウノトリの飛来が農作業の妨げとなっては困るという意見などがありました。

このまま何もしなければ、私たちが望んでいるような風景は維持できません。少しずつ消滅していくでしょう。しかし、これから先、誰もが気持ちよくツル・コウノトリと関わっていきたいと感じているはずです。

私たちは、未来にどんな風景を残したいのでしょうか。そのために何ができるのでしょうか。その構想をここにまとめます。

Ⅰ．まちづくり計画（ビジョン）策定の背景

西予市では平成 18 年から国の特別天然記念物であるコウノトリが飛来するようになり、環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類、種の保存法の国際希少野生動植物種に指定されているナベヅルやマナヅルの飛来も見られるようになってきました。そのような中、いずれも希少種であることから、地域住民から保全・保護の声が高まり、市の諮問で平成 21 年度に有識者や地元住民らによる「ツルと人の共生創造委員会」が設立され、その保全・保護の方針に関わる答申書を、市長が受領しています。現在、その答申を基にツル・コウノトリに関する保全・保護活動を地域住民、行政で連携しながら行っています。

しかしながら、その答申から 10 年以上経過しています。地域レベルでは、日本ジオパークの認定や平成 30 年 7 月豪雨での大きな被害、国内では生物多様性国家戦略や農林水産省生物多様性戦略の改訂検討、地球レベルでは、気候変動の深刻化や SDGs の決定、ポスト 2020 生物多様性目標の検討など、社会環境も大きく変化してきています。

そのため、今後、ツル・コウノトリをシンボルとして、自然と共生した持続可能なまちづくりをどのように進めていくか、改めて検討し、本計画（ビジョン）を策定することになりました。

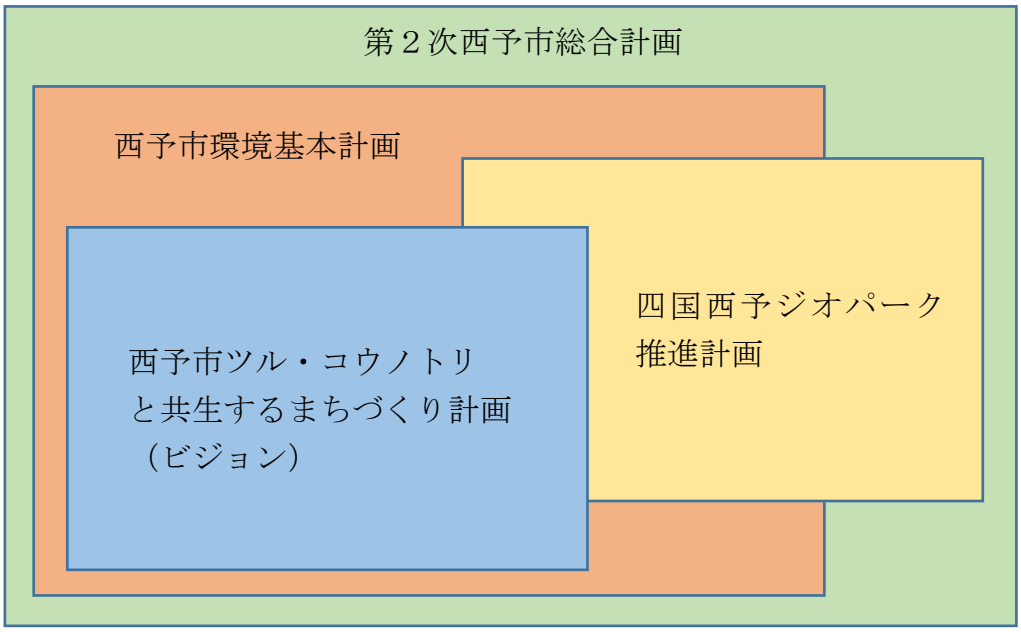
Ⅱ．まちづくり計画（ビジョン）の目的

人とツル・コウノトリとの関わり方、そして自然環境、地域社会などの将来について真剣に考え、自分たちの地域をどうしていくか、その基本方針を整理し、長期的なビジョンを持ってまちづくりを進めていくことを目的としています。

Ⅲ．まちづくり計画（ビジョン）の位置づけと期間

１．位置づけ

この計画は、「第２次西予市総合計画」、「西予市環境基本計画」などの各種計画の効果をより高めようとするもので、行政だけでなく、地域住民との協働によって取り組んでいくことを基本としています。また、日本ジオパークである四国西予ジオパークにおいて、令和３年度に新たに「ツル・コウノトリ飛来地」がジオサイト（未来に向けて保全し、活用していく場所）に設定されております。そのため、四国西予ジオパーク推進計画と共に、遂行していくこととなります。

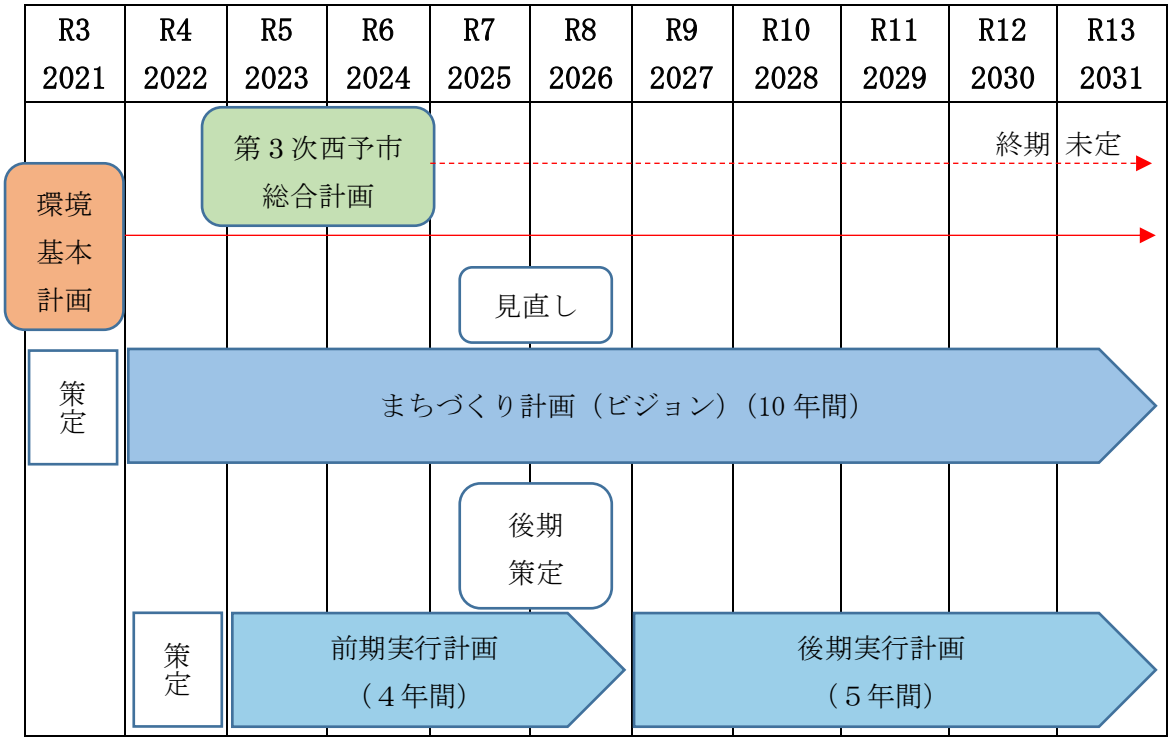


※環境基本計画の政策３（まちづくり）施策８（自然環境・生活環境の保全）基本事業５（生物多様性の保全・推進）や基本事業４（生活環境の改善）を始めとし、他の政策１（しごとづくり）、政策２（ひとづくり）、政策４（行財政）にも関係してきます。

２．期間

令和４年度（2022 年度）から 10 年間とし、５年後の令和９年度（2027 年度）に見直します。

また、本計画（ビジョン）を具体化し着実に実行するため、令和４年度に実行計画を策定します。



Ⅳ．基本方針

１．ツル・コウノトリと共に暮らし続けられる持続可能な環境の保全整備

２．ツル・コウノトリと共に暮らせる豊かさの享受

３．未来の地域を創造する地域力の育成

【概要】

ツル・コウノトリは、生態系において上位に位置し、それらが生息するには巣を作ったり餌を探したりする里山、多様な生き物がくらすことができる豊かな自然環境が残されている必要があります。西予市に希少なツル・コウノトリなどが飛来することは、豊かな自然が今も残っている証拠であり、ツル・コウノトリは西予市の豊かな自然環境を象徴する存在です。

そこで、今後、この地域をどうしていくべきか、基本方針をここに掲げます。

なお、この基本方針は、地域の方々の意見を計画に反映させるため、先に実施しております「ふれあいアンケート」「座談会」「農家アンケート」（資料４、５、６参照）の分析結果をもとに作成しております。

例えばアンケートの結果、住民は川、山、田んぼ（里山）に対しての意識が高いことが分かりました。ツル・コウノトリは里山を生活の場とするので、これらを保全していくことが大切です。

また、ツルを見守る人とのトラブルやツル・コウノトリの飛来による農作業のしづらさを心配する声が上がっており、地域の人々が安心して生活できるよう、人とツル・コウノトリとが共生するためのルール作り、仕組みづくりも重要だと考えます。

さらに、農家の方は後継者不足に対する不安が大きく、農地を維持する担い手の減少は里山環境の荒廃にもつながる重大な問題です。こうした認識から、人材の育成についても検討しました。

その他、こうした取り組みを継続的に実行していくために、地域経済の振興や地域内外の人材の交流といった様々な手段を通じて、地域に住む私たちの生活の豊かさが向上することを目指しています。

（個別詳細）

１．ツル・コウノトリと共に暮らし続けられる持続可能な環境の保全整備

西予市に飛来するツル・コウノトリをシンボルとして、豊かな自然をこれからも守っていきます。

また、以前と比べ、人々の生活は大きく変化し、便利になった反面、自然との共生が難しくなっています。今一度、日頃の生活や地域での様々な風土、習わし、環境などについて考え、人とツル・コウノトリとが共生できる仕組みづくりを行います。

（１）ツル・コウノトリをはじめ多様な生き物が暮らせるよう周辺の里山などを、生き物に配慮した方法で適切に管理、整備、保全または再生、創造していきます。

（２）人とツル・コウノトリとが共生できる仕組み、暮らし方について考え、ルールを作成し共有します。

（３）地域の子どもから大人まで、ツル・コウノトリをはじめとする生き物や自然環境に関する知識や愛着を高めます。

２．ツル・コウノトリと共に暮らせる豊かさの享受

人口減少社会の中、高齢化が進んでおり、地域の生活はますます厳しいものとなっています。ツル・コウノトリとの共生を通じて、魅力ある地域づくりを行い、人々の暮らしを経済的な豊かさだけでなく、心の豊かさも含めて、様々な視点から豊かになることを目指します。

（１）ツル・コウノトリとの共生に取り組む地域であることを積極的に情報発信し、ツル・コウノトリに興味がある人々だけではなく、ツル・コウノトリを通じて西予市に深く関わろうとする人々との交流を通じて、地域を豊かにする関係人口の創出を目指します。

（２）ツル・コウノトリとの共生が、環境保全だけではなく、農業や観光

などの産業振興とも結びつき、社会と環境と経済とが恵みを共有できる持続的で循環的な地域を目指します。

（３）ツル・コウノトリを重要な地域資源と位置づけ、多くの人々が様々な形で関わることを通じて、多様な「楽しみ」を享受できる豊かな地域を目指します。

３．未来の地域を創造する地域力の育成

魅力ある地域を守っていくためには、人々が安心して暮らしていける社会環境、自然環境を守っていく必要があり、とても大変なことです。単に、ツル・コウノトリが飛来する地域というだけでは、十分ではありません。ツル・コウノトリが飛来してくれる地域を大切に思えること、その心と活動によって、地域の魅力は溢れてきます。

そして、ツル・コウノトリの生息に欠かせないのは、田んぼ、畑、山、川などから構成される里山環境です。その中でも田んぼはツル・コウノトリの餌場として重要ですが、担い手不足や農法の合理化、利潤の追求が進む社会では維持できなくなります。

そのため、ツル・コウノトリが飛来してくれる地域でできるだけあり続けたいと願い、そのために必要な地域や農業をデザインし、地域で共有する。そのような地域の力を育成します。

（１）農業者と共にツル・コウノトリと共生するための知恵を出し合い、その理解をひろげるとともに、地域に愛着を持ってくれた方や交流してくれた方たちの中から、稲作を中心とする農地の多面的な機能を理解した、農業の後継者を育成、発掘します。

（２）地域の魅力を感じて、地域づくりに参画してくれるあらゆる仲間（地域内外を問わず)、そして新たに地域の仲間となる移住者を増やします。

（３）この計画を推進するのに欠かせない地域のリーダーとなる人材、また重要なツル・コウノトリ関連施設や場所を保全する人、見守る人の後継者を育成、発掘します。

Ⅴ．計画（ビジョン）推進に向けて

本計画（ビジョン）を実現していくために、令和４年度中に実行計画を策定し、具体的な行動につなげていきます。

Ⅵ．資料編

資料１．ツル・コウノトリについて

（１）　個体情報について

・ナベヅル

【分類】: ツル目ツル科ツル属

【学名】: *Grus monacha*（グルス・モナカ）、意味は「修道女のツル」

【繁殖地】: ロシア・中国

【越冬地 】: 日本・韓国・中国

【レッドリストカテゴリー 】: ＩＵＣＮ（国際自然保護連合）危急（VU）
環境省 絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【文化財保護法】: 天然記念物（※「鹿児島県のツルおよびその渡来地」
「八代のツルおよびその渡来地」）

【越冬地での主な食べ物】: 落穂、昆虫、小型の水生物

【生態】: 主に稲刈り後の水田に渡来。家族（２～４羽）ごと、もしくは
小規模な群れで行動。夜は浅い水辺立って寝る。

【全長】: 約 100 ｃｍ

【世界の推定個体数】約 14,000～16,000 羽

【越冬期間】: 10 月 ～３月

・マナヅル

【分類】: ツル目ツル科ツル属

【学名】: *Grus vipio*（グルス・ビピオ)、意味は「大変信心深いツル」

【繁殖地】: ロシア・中国・モンゴル

【越冬地】: 日本・韓国・中国

【レッドリストカテゴリー】: ＩＵＣＮ（国際自然保護連合）危急（VU)

: 環境省 絶滅危惧Ⅱ類（VU)

【文化財保護法】: 天然記念物（※「鹿児島県のツルおよびその渡来地」)

【越冬地での主な食べ物 】: 落穂、昆虫、小型の水生生物

【生態】: 主に稲刈り後の水田に渡来。家族（２～４羽）ごと、もしくは小規模な群れで行動。夜は浅い水辺で立って寝る。

【全長】: 約 130 ｃｍ

【世界の推定個体数】約 6,000～7,000 羽

【越冬期間】: 10 月 ～２月

・コウノトリ

【分類】: コウノトリ目 コウノトリ科 コウノトリ属

【学名】: *Ciconia boyciana*（キコニア・ボイキアナ)、意味は「ボイスのコウノトリ」

【生息地】 ロシア・中国・台湾・韓国・日本

【レッドリストカテゴリー】: ＩＵＣＮ（国際自然保護連合）危機（EN）
環境省 絶滅危惧 IA 類（CR）

【文化財保護法】: 特別天然記念物（天然記念物の中でも得に重要なもの）

【種の保存法】: 国内希少野生動植物種

【主な食べ物】: 小魚、カエル、ミミズ、ネズミなど

【生態】: 声を出す代わりに、くちばしでカタカタと音を出す。樹上に巣を作り、雌雄で子育てをする。

【全長】: 約 110ｃｍ

【国内推定個体数】200 羽

（2）ツル・コウノトリの飛来記録

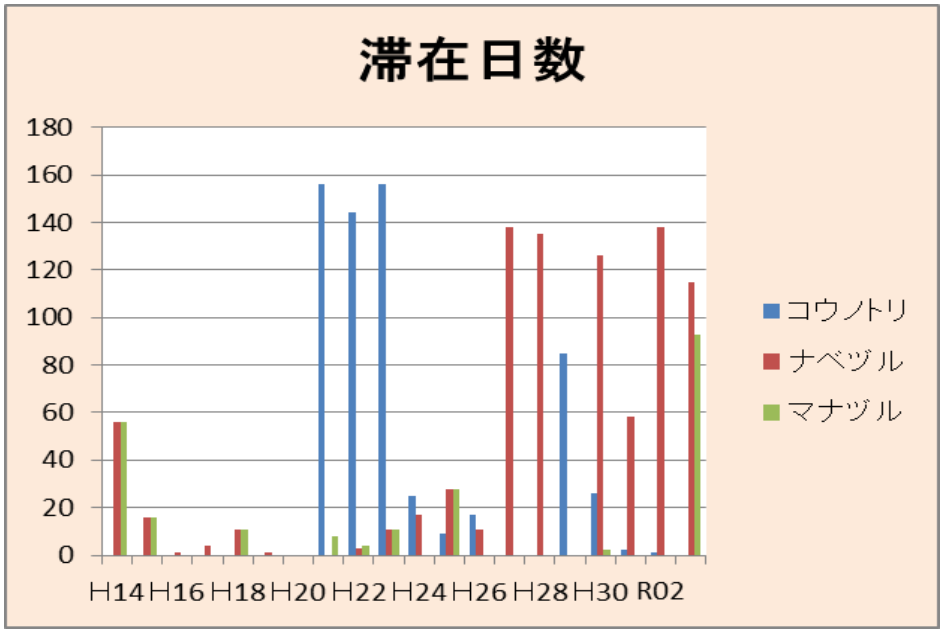
滞在日数

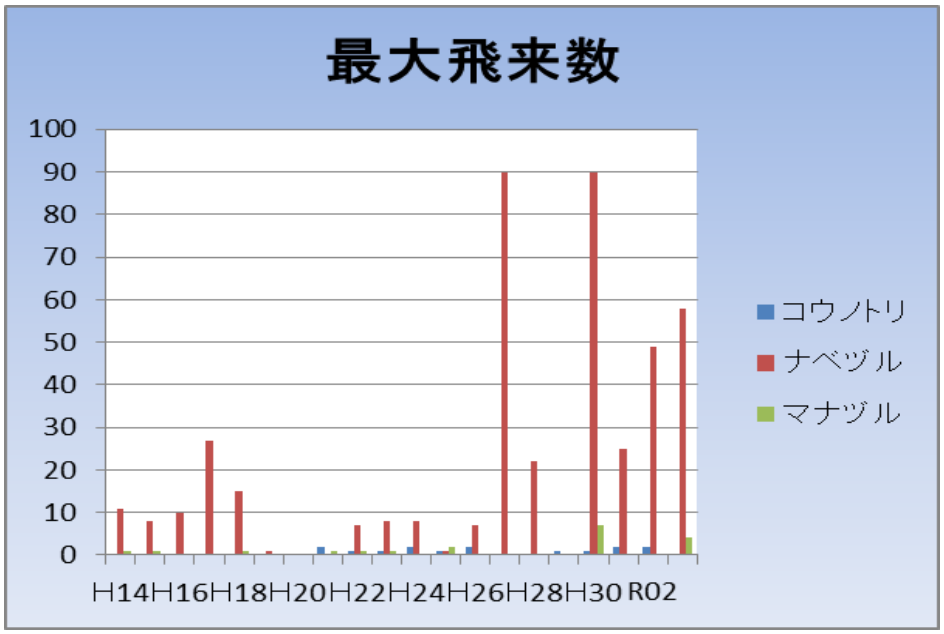
種類	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	R02	R03
コウノトリ								156	144	156	25	9	17	0	0	85	26	2	1	0
ナベヅル	56	16	1	4	11	1	0	0	3	11	17	28	11	138	135	0	126	58	138	118
マナヅル	56	16	0	0	11	0	0	8	4	11	0	28	0	0	0	0	2	0	0	93

最大飛来数

種類	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	R02	R03
コウノトリ								2	1	1	2	1	2	0	0	1	1	2	2	0
ナベヅル	11	8	10	27	15	1	0	0	7	8	8	1	7	90	22	0	90	25	49	58
マナヅル	1	1	0	0	1	0	0	1	1	1	0	2	0	0	0	0	7	0	0	4

※コウノトリのデータについては、平成21年より前のものについては集計できていない。





資料２．これまでのツル・コウノトリの保全・保護に関わる活動

平成 21 年度　「ツルと人の共生創造委員会」答申書受領
平成 22 年度　田園ロマンの里づくり推進委員会設置要綱の制定
　　田園ロマンの里づくりプロジェクトチーム設置の制定
平成 27 年度　ツル渡来重点エリアの設定

平成 28 年度　ツル・コウノトリ見守り隊設置要綱の制定

有害鳥獣用防護柵設置

平成 29 年度　寒冷紗用防護柵設置（宇和町内のため池①）

平成 29 年度　寒冷紗用防護柵設置（宇和町内のため池①）

平成 29 年度　寒冷紗用防護柵設置（宇和町内のため池②）

平成 29 年度　寒冷紗用防護柵設置（宇和町内のため池②）

平成 30 年度　ツル観察小屋設置（山田）

平成 31 年度　ツル観察会（石城小児童）

平成 30 年度　石城小学校児童山口県周南市八代小学校訪問

平成 31 年度　山口県周南市八代小学校児童石城小学校訪問

資料３．本計画（ビジョン）策定までの流れについて

田園ロマンの里づくりプロジェクトチームや西予市ツル・コウノトリと共生するまちづくり計画策定委員会事務局で議論を重ね、策定委員会の意見聴取を経て取りまとめました。

・会議等の開催状況

月日	会議等	概要
平成 31 年 ４月 22 日	田園ロマンの里づくりＰＴ	・今年度の目標、進め方 ・策定委員の構成 【出席者】 愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科　教授　佐藤哲、准教授渡邉敬逸、（公財）日本野鳥の会自然保護室伊藤加奈、日本野鳥の会愛媛代表松田久司、まちづくり推進課ジオパーク推進室、経済振興課、農業水産課、石城公民館主事、スポーツ・文化課、環境衛生課課長補佐兵頭章夫、環境衛生係係長源琢哉、主事兵頭龍紀
令和元年 ６月 14 日	第１回 事務局会議	・今年度の目標、進め方 ・計画の範囲について ・策定委員の構成 ・座談会、ワークショップについて 【出席者】 環境衛生課課長佐々木邦仁、課長補佐兵頭章夫、環境衛生係長源琢哉、主事兵頭龍紀
令和元年 ７月５日	第２回 事務局会議	・計画の範囲（関係地域）について ・座談会のやり方、開催場所、回数 ・アンケートについて 【出席者】 愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科准教授渡邉敬逸、（公財）日本野

		鳥の会自然保護室伊藤加奈、日本野鳥の会愛媛代表松田久司、環境衛生課課長補佐兵頭章夫、環境衛生係長源琢哉、主事兵頭龍紀
令和元年 11 月 26 日	第３回 事務局会議	・座談会のやり方、開催場所、回数 ・アンケートの集計方法など 【出席者】 愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科准教授渡邉敬逸、日本野鳥の会愛媛代表松田久司、環境衛生課課長補佐兵頭章夫、環境衛生係長源琢哉
令和２年 ３月 18 日	第４回 事務局会議	・アンケート集計結果 ・策定委員会、座談会、今後の流れ 【出席者】 （公財）日本自然保護協会福田真由子（ＷＥＢ）、（公財）日本自然保護協会藤田卓（ＷＥＢ）、（公財）日本野鳥の会自然保護室伊藤加奈（ＷＥＢ）、愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科准教授渡邉敬逸、日本野鳥の会愛媛代表松田久司、（一社）ノヤマカンパニー加藤雄也、環境衛生課環境衛生係長源琢哉、主事兵頭龍紀
令和２年 ６月 19 日	第５回 事務局会議	・座談会の詳細 ・事務局員の確認 【出席者】 愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科准教授渡邉敬逸、日本野鳥の会愛媛代表松田久司、(一社) ノヤマカンパニー加藤雄也、環境衛生課環境衛生係長源琢哉、主事兵頭龍紀
令和２年 ８月 18 日	第６回 事務局会議	・座談会の詳細（役割、タイムスケジュール） 【出席者】 （公財）日本野鳥の会自然保護室伊藤加奈（ＷＥＢ）、愛媛大学社会共創学部

		環境デザイン学科准教授渡邉敬逸、日本野鳥の会愛媛代表松田久司、(一社)ノヤマカンパニー加藤雄也、環境衛生課環境衛生係長源琢哉、主事兵頭龍紀
令和２年 ９月 24 日	西予市ツル・コウノトリと共生するまちづくり計画座談会	石城公民館　ホール 【参加者】 市民（石城地区及び永長住民）14 人
令和２年 ９月 30 日	西予市ツル・コウノトリと共生するまちづくり計画座談会	西予市役所５階　大ホール 【参加者】 市民（石城地区を除く宇和町在住） 17 人
令和２年 10 月 21 日	第７回 事務局会議	・実施した座談会のまとめ 【出席者】 （公財）日本野鳥の会自然保護室伊藤加奈（ＷＥＢ）、愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科准教授渡邉敬逸、日本野鳥の会愛媛代表松田久司、(一社)ノヤマカンパニー加藤雄也、環境衛生課環境衛生係長源琢哉、主事兵頭龍紀
令和３年 ３月 15 日	第１回ツル・コウノトリと共生するまちづくり計画策定委員会	・計画策定の経緯、目的等について ・今後の進め方についての確認 【出席者】 ※下記西予市ツル・コウノトリと共生するまちづくり計画策定委員会委員、事務局名簿のとおり（佐藤氏、金井氏、中野氏、伊藤氏はＷＥＢ参加、伊賀上ロマンの里づくり会会長、西予市農業支援センター長は欠席）

西予市ツル・コウノトリと共生するまちづくり計画策定委員会　委員、事務局員名簿

【委員】　令和3年3月15日　現在

No.	団体名等	氏　名	備　考
1	有識者 （地域づくり）	佐　藤　哲	愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科教授
2	〃 （ツル・コウノトリ）	金　井　裕	日本ツル・コウノトリネットワーク　会長
3	〃 （自然とのふれあい）	山　本　貴　仁	西条自然学校　理事長
4	〃 （有機農業）	中　野　聡	（株）田力本願　代表取締役
5	田園ロマンの里づくり推進委員	宇　都　宮　政　人	
6	〃	楠　健　明	宇和コウノトリ保存会　会長
7	〃	三　好　幹　二	コウノトリ・ツルと共生する山田の会 会長
8	〃	田　中　和　浩	伊賀上ロマンの里づくり会　会長
9	〃	木　下　和　也	小原区長
10	〃	菊　池　直	岩木区長
11	〃	宇　都　宮　弘　吉	郷内区長
12	〃	土　居　福　重	西山田区長
13	永長地区	浅　野　信　也	永長区長
14	小野田地区	宇　都　宮　敏　幸	小野田区長代理
15	田園ロマンの里づくり推進委員（農協）	大　塚　英　浩	西予市農業支援センター長
16	田園ロマンの里づくり推進委員（学校）	薬　師　神　康　雄	西予市立石城小学校 校長
17	田園ロマンの里づくり推進委員（行政）	藤　井　兼　人	生活福祉部長
18	市議会議員	信　宮　徹　也	西予市議会議員
19	公募	井　関　晃　平	営農者
20	公募	松　本　美　紀	

【事務局員】

21	事務局員	渡　邉　敬　逸	愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科准教授
22	〃	伊　藤　加　奈	（公財）日本野鳥の会　自然保護室
23	〃	松　田　久　司	日本野鳥の会愛媛代表
24	〃	加　藤　雄　也	（一社）ノヤマカンパニー代表

月日	会議等	概要
令和３年 ４月 26 日	第８回 事務局会議	・策定委員会での指摘事項について 【出席者】 （公財）日本野鳥の会自然保護室室長田尻浩伸、伊藤加奈（ＷＥＢ）、愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科准教授渡邉敬逸、日本野鳥の会愛媛代表松田久司、（一社）ノヤマカンパニー加藤雄也、環境衛生課環境衛生係長源琢哉
令和３年 ５月 17 日	第９回 事務局会議	・農家アンケート、生徒アンケートの内容について 【出席者】 （公財）日本野鳥の会自然保護室室伊藤加奈（ＷＥＢ）、愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科准教授渡邉敬逸、日本野鳥の会愛媛代表松田久司、（一社）ノヤマカンパニー加藤雄也、環境衛生課環境衛生係長源琢哉
令和３年 ７月 19 日	第 10 回 事務局会議	・農家アンケート、生徒アンケートの内容について 【出席者】 愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科准教授渡邉敬逸、日本野鳥の会愛媛代表松田久司、（一社）ノヤマカンパニー加藤雄也、環境衛生課環境衛生係長源琢哉、主任稲垣将人

令和４年 ２月１日	第 11 回 事務局会議	・西予市ツル・コウノトリと共生するまちづくり計画（案）について 【出席者】 愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科准教授渡邉敬逸、（公財）日本野鳥の会自然保護室室長田尻浩伸（ＷＥＢ）、日本野鳥の会愛媛代表松田久司、（一社）ノヤマカンパニー加藤雄也、環境衛生課課長補佐源琢哉、環境衛生係主事清水茂十博
令和４年 ２月８日	第２回ツル・コウノトリと共生するまちづくり計画策定委員会 （書面開催）	・西予市ツル・コウノトリと共生するまちづくり計画（案）に対する意見、修正すべきところの指摘 ※コロナ禍のため、２月 28 日を期限に策定委員へ意見照会することで第２回の策定委員会としました。
令和４年 ３月 14 日	第３回ツル・コウノトリと共生するまちづくり計画策定委員会	・西予市ツル・コウノトリと共生するまちづくり計画（ビジョン）案について ・西予市ツル・コウノトリと共生するまちづくり計画（実行計画）の進め方 【出席者】 ※下記西予市ツル・コウノトリと共生するまちづくり計画策定委員会委員、事務局名簿のとおり（佐藤氏、金井氏、山本氏、中野氏はＷＥＢ参加、伊賀上ロマンの里づくり会会長、郷内区長、西予市農業支援センター長は欠席）

西予市ツル・コウノトリと共生するまちづくり計画策定委員会　委員、事務局員名簿

【委員】　令和4年3月14日　現在

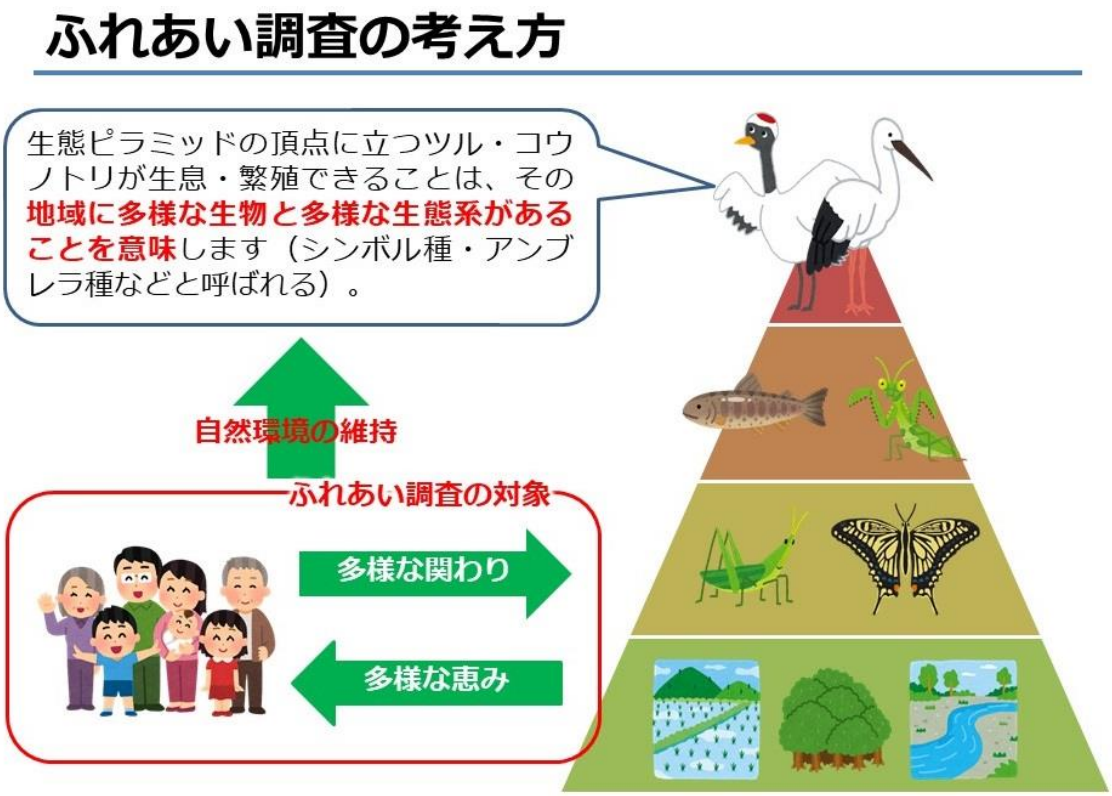
No.	団体名等	氏　名	備　考
1	有識者 （地域づくり）	佐藤　哲	愛媛大学SDGs推進室　教授（副室長）
2	〃 （ツル・コウノトリ）	金井　裕	日本ツル・コウノトリネットワーク　会長
3	〃 （自然とのふれあい）	山本　貴仁	西条自然学校　理事長
4	〃 （有機農業）	中野　聡	（株）田力本願　代表取締役
5	田園ロマンの里づくり推進委員	宇都宮　政人	
6	〃	楠　健明	宇和コウノトリ保存会　会長
7	〃	三好　幹二	コウノトリ・ツルと共生する山田の会 会長
8	〃	田中　和浩	伊賀上ロマンの里づくり会　会長
9	〃	西岡　秀記	小原区長
10	〃	菊池　直	岩木区長
11	〃	宇都宮　利明	郷内区長
12	〃	片山　雅彦	西山田区長
13	永長地区	河野　静一郎	永長区長
14	小野田地区	宇都宮　敏幸	小野田区長代理
15	田園ロマンの里づくり推進委員（農協）	大塚　英浩	西予市農業支援センター長
16	田園ロマンの里づくり推進委員（学校）	薬師神　康雄	西予市立石城小学校 校長
17	田園ロマンの里づくり推進委員（行政）	藤井　兼人	生活福祉部長
18	市議会議員	信宮　徹也	西予市議会議員
19	公募	井関　晃平	営農者
20	公募	松本　美紀	

【事務局員】

21	事務局員	渡邉　敬逸	愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科准教授
22	〃	田尻　浩伸	（公財）日本野鳥の会自然保護室室長 （兼　施設運営支援室　室長代理）
23	〃	松田　久司	日本野鳥の会愛媛代表
24	〃	加藤　雄也	（一社）ノヤマカンパニー代表

資料４．ふれあいアンケートの実施

本計画（ビジョン）の基礎資料とするため、2020～2021 年度にアンケート（自然とのふれあい調査）を実施しました。その結果のキーとなる言語、関連などを図式化しました。



ふれあい調査の概要（2020～2021年度）

- **回収率：17.7%**
  - **330／1859**
- **有効回答率：82.2%**
  - **1628／1980**
- **回答者属性（性別）**

性別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	不明	総計
男性	74	2	3	3	7	24	1	0	1	115
女性	72	2	3	5	9	40	3	1	0	135
不明	8	2	14	10	14	28	3	0	1	80
総計	154	6	20	18	30	92	7	1	2	330

- **回答者属性（地区別）**

地区別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	不明	総計
宇和	61	5	11	5	16	28	3	1	0	130
下宇和	25	0	1	3	2	6	0	0	0	37
石城	12	0	2	0	5	37	2	0	0	58
多田	13	1	2	2	2	9	2	0	1	32
中川	24	0	2	2	3	8	0	0	0	39
田之筋	9	0	1	5	1	3	0	0	0	19
明間	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3
不明	7	0	1	1	0	0	0	0	1	10
その他	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2
総計	154	6	20	18	30	92	7	1	2	330

自然とのふれあい調査聞取票

1．基本事項　　記入日　2019年　　月　　日

地区名	小原・吉木・郷内・西山田・山田・その他（　　）
性別	年齢
男　・　女	～19才　20代　30代　40代　50代　60代～
お聞きしたいこと	お住まいの地域での自然とのふれあいの思い出、体験

2．ふれあい思い起こし

区分	内容	場所	年代
①目に浮かぶ風景			
②耳に残る音			
③鼻に思い出す匂い			
④肌によみがえる感触			
⑤舌になつかしい味			
⑥これからも大切にしたいふれあい（上記のどれか、大切にしたいと思う理由をお書きください。）			

頻出単語上位100

順位	抽出語	出現回数
1	川	174
2	セミ	144
3	田んぼ	133
4	山	132
5	自然	116
6	鳴き声	114
7	家	100
8	声	92
9	作る	90
10	子供	83
11	風景	79
12	行く	76
13	水	74
14	カエル	72
15	遊ぶ	71
16	魚	66
17	きれい	62
18	木	57
19	ホタル	54
20	ウシ	48
	花	48
22	捕る	46
23	泳ぐ	45
24	レンゲ	44
	虫	44

順位	抽出語	出現回数
	母	44
27	多い	41
	鳴く	41
29	捕まえる	40
	良い	40
31	懐かしい	36
32	稲	34
33	雪	33
	味噌	33
35	田植え	32
	畑	32
37	カブトムシ	30
	人	30
39	祖母	29
	登る	29
41	風	28
	流れる	28
43	生き物	27
44	手作り	26
	池	26
	入る	26
	友達	26
48	わらぐろ	25
	稲刈	25
	焼く	25

順位	抽出語	出現回数
51	帰る	24
	季節	24
	残る	24
	臭い	24
	少ない	24
	飛ぶ	24
57	採る	23
	川遊び	23
	草	23
	冷たい	23
61	海	22
	出る	22
	鳥	22
64	近所	21
	咲く	21
66	芋	20
	学校	20
	環境	20
	芝餅	20
	緑	20
71	ニワトリ	19
	家族	19
	飼う	19
	自分	19
	手	19

順位	抽出語	出現回数
	聞く	19
	変わる	19
	目	19
79	ウナギ	18
	夏休み	18
	小学校	18
	地域	18
	歩く	18
84	キンモクセイ	17
	思い出	17
	葉	17
87	一面	16
	楽しい	16
	減る	16
	時代	16
	美しい	16
92	ご飯	15
	街	15
	降る	15
	植える	15
	足	15
	肌	15
	忘れる	15
	野菜	15
	遊び	15

地区別・世代別の特徴語上位10

地区別特徴語

順位	宇和		下宇和		石城		多田		中川		田之筋		明間	
1	セミ	.087	セミ	.066	レンゲ	.067	川	.086	山	.071	スイカ	.050	キジ	.111
2	田んぼ	.076	川	.059	作る	.058	家	.079	田んぼ	.057	夏休み	.048	花見	.100
3	鳴き声	.066	子供	.054	ウシ	.052	田んぼ	.060	作る	.052	川	.045	家族	.057
4	自然	.060	風景	.054	わらぐろ	.052	遊ぶ	.051	カエル	.051	カブトムシ	.043	フクロウ	.056
5	カエル	.049	山	.052	風景	.039	魚	.047	鳴き声	.050	セミ	.041	ミニ	.056
6	声	.045	きれい	.052	稲	.034	子供	.045	行く	.047	小学生	.040	澄む	.056
7	行く	.044	自然	.046	味噌	.034	鳴き声	.044	水	.043	遊ぶ	.039	クワガタムシ	.053
8	遊ぶ	.043	声	.045	平野	.033	水	.041	自然	.043	葉	.039	果物	.050
9	水	.043	木	.037	残る	.032	行く	.040	家	.042	小学校	.038	手料理	.050
10	風景	.043	入る	.037	懐かしい	.031	捕る	.036	母	.039	飛ぶ	.036	周り	.048

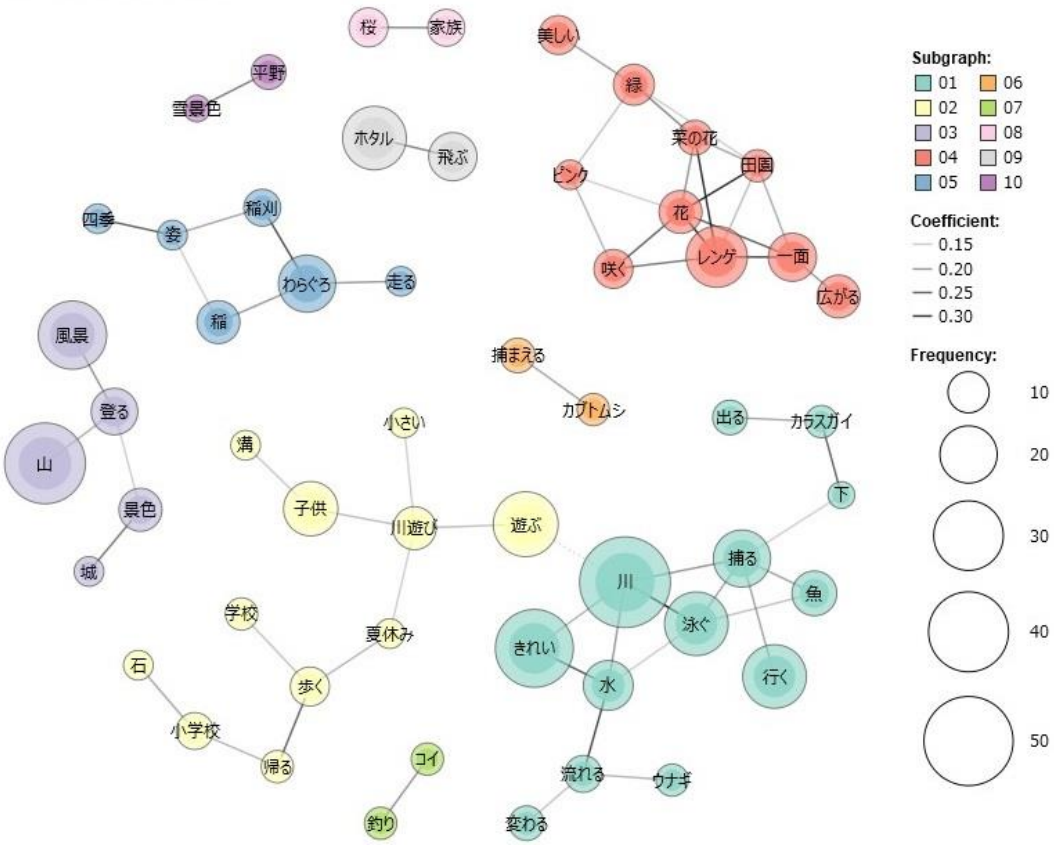
世代別特徴語

順位	10－20代		20－30代		40－50代		60代以上	
1	セミ	.112	子供	.068	田んぼ	.082	川	.128
2	山	.080	田んぼ	.062	川	.059	作る	.103
3	鳴き声	.064	捕る	.060	子供	.059	家	.093
4	風景	.060	自然	.059	ホタル	.056	子供	.074
5	カエル	.047	水	.057	作る	.056	ウシ	.073
6	木	.044	鳴き声	.053	遊ぶ	.048	山	.069
7	捕まえる	.044	雪	.050	自然	.047	自然	.061
8	きれい	.037	カエル	.050	声	.047	母	.056
9	鳴く	.034	川	.048	稲刈	.044	泳ぐ	.054
10	花	.033	良い	.047	魚	.042	水	.053

設問別特徴語上位10

順位	目		音		感触		匂い		味		大切	
1	田んぼ	.145	セミ	.421	捕まえる	.083	味噌	.099	作る	.176	自然	.314
2	川	.134	鳴き声	.317	冷たい	.079	臭い	.090	母	.124	風景	.146
3	きれい	.119	声	.247	遊ぶ	.075	花	.076	祖母	.065	川	.117
4	山	.109	カエル	.162	家	.062	家	.070	芝餅	.059	子供	.107
5	風景	.086	鳴く	.131	田植え	.061	キンモクセイ	.064	手作り	.058	生き物	.080
6	泳ぐ	.080	虫	.077	水	.057	田んぼ	.060	イチゴ	.052	山	.070
7	ホタル	.078	ウシ	.069	魚	.056	カメムシ	.053	家	.048	きれい	.070
8	遊ぶ	.077	家	.059	行く	.047	木	.050	料理	.048	ホタル	.063
9	レンゲ	.074	ニワトリ	.050	雪	.047	畑	.050	魚	.048	環境	.061
10	行く	.073	水	.049	木	.047	作る	.048	芋	.047	良い	.061

目に浮かぶ風景



これは、他の質問でも共通しますが、図右側の表記にて図の見方を説明しています。質問におけるキーとなる言語の数によって丸の大きさを変えています。

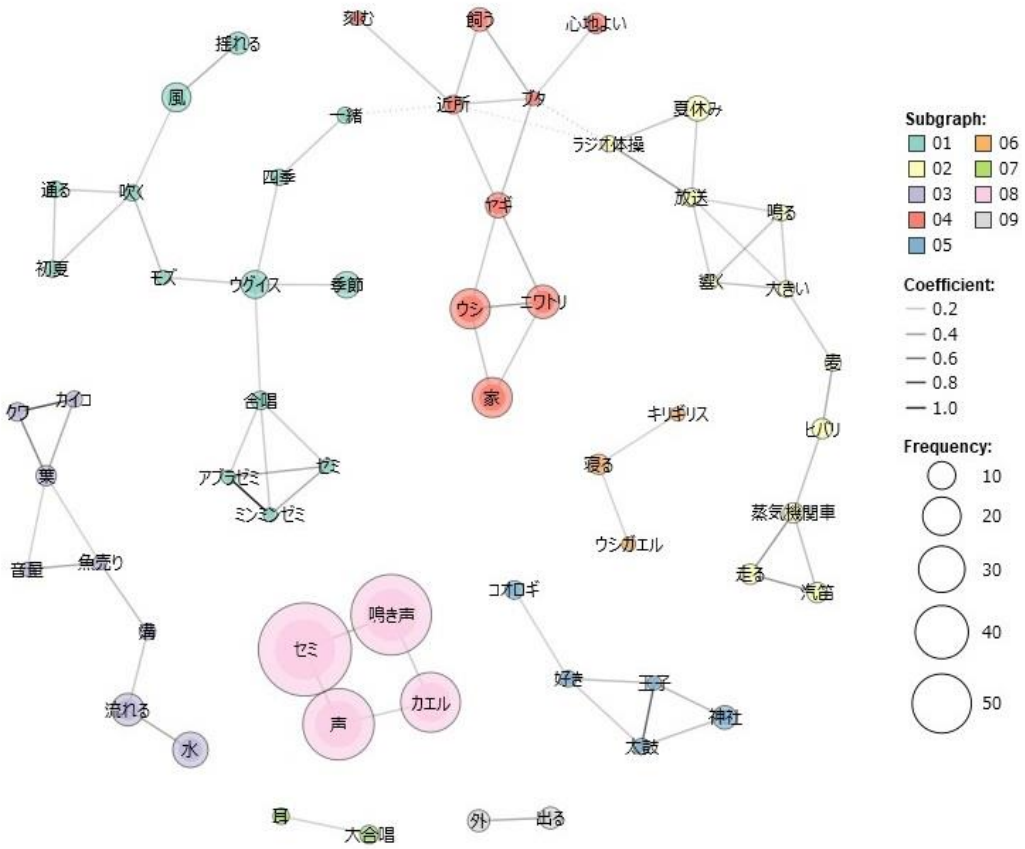
また、関連するもので分類し、色を変えています。

そして、関連するものの繋がりが集中する場合は、線が太くなります。

今回の質問を解説しますと、大きな分類として、山、川、ホタル、レンゲ、わらぐろなどが挙げられます。

山、川、田んぼなどの四季折々の風景、それぞれの場所で遊んだ幼い時の風景などが今でも色濃く心に残っているようです。

耳に残る音



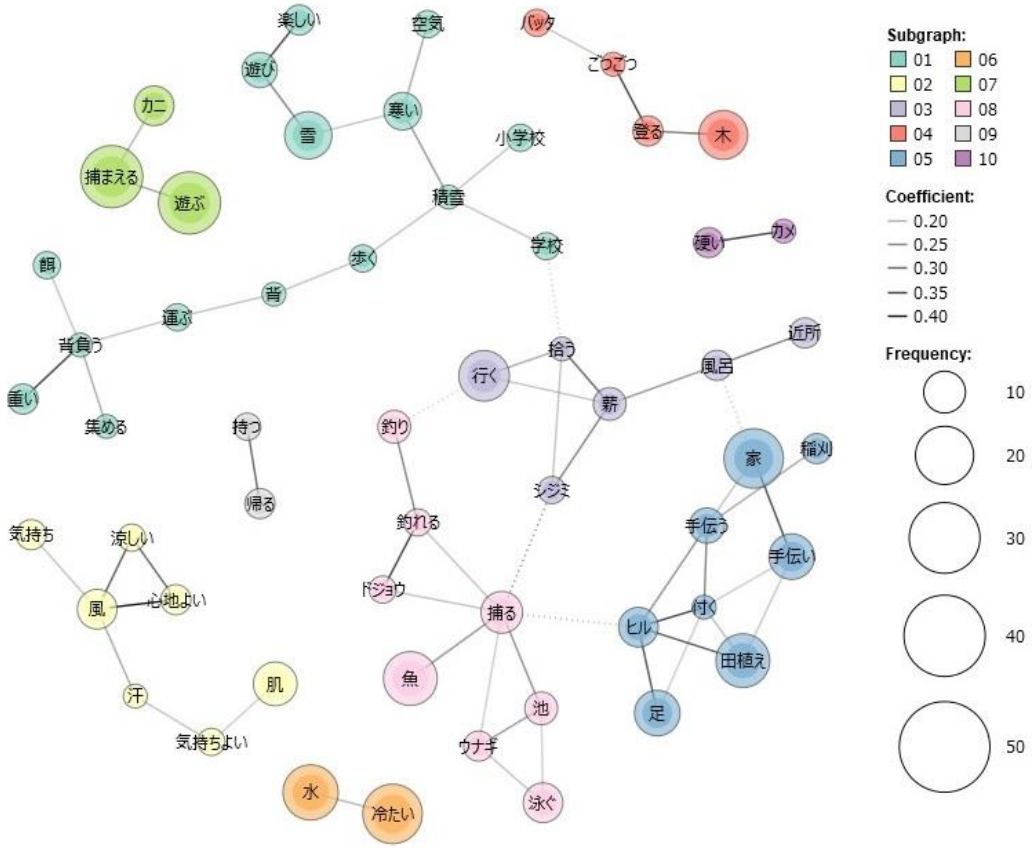
大きなものとして、セミやカエルの声が多く答えられています。このうちセミは前に載せております世代別特徴語では 10 代から 20 代までの 1 位です。

全年代では、その他にも、ウシ、ニワトリ、ヒバリ、モズ、ウグイスなど様々な生き物の鳴き声が挙げられています。そこから考えられるのは、10 代から 20 代はセミ取りなどをした時に聞いた音ではなく、普段の生活の中で自然と入ってきた音が唯一セミの声だったのではないでしょうか。

その他の年代は、外で思いっきり遊んでいたため、色々な生き物の鳴き声を心に残った音と回答したのだと考えられます。

その他、蒸気機関車の走る音、汽笛などについては今でも懐かしい音のようです。

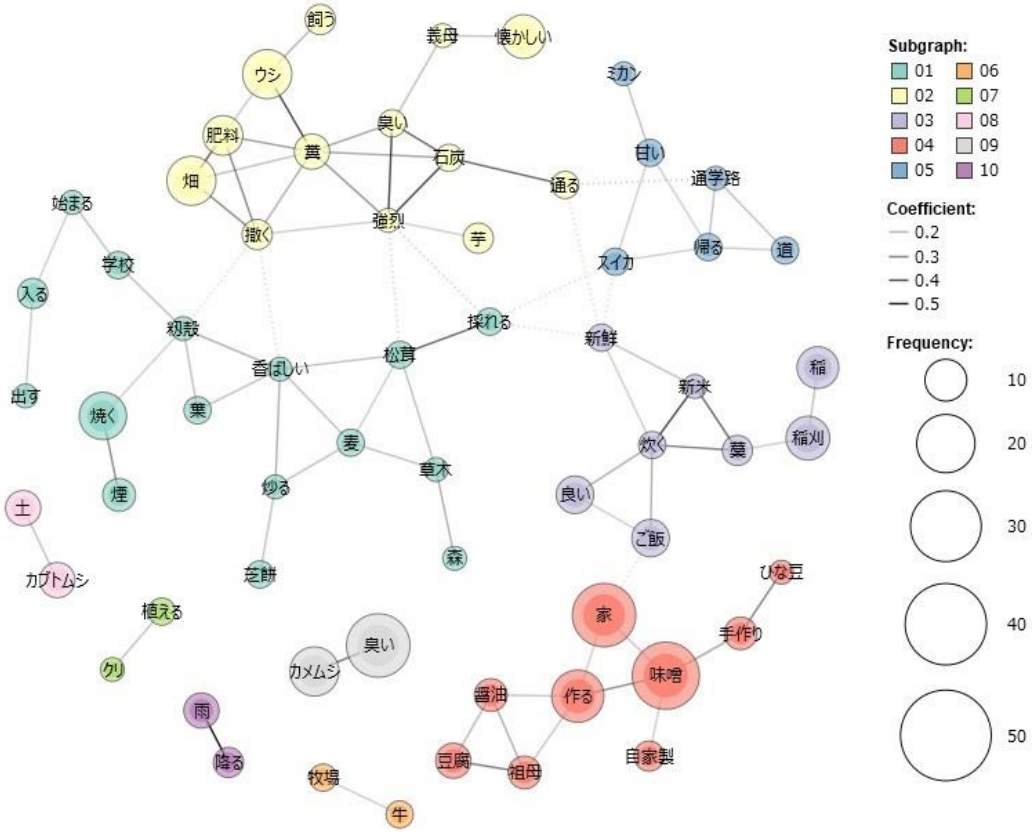
肌に蘇る感触



大きなものとして、捕る・捕まえるが挙げられます。魚、ウナギ、ドジョウ、カニなど生き物を捕まえたときの感触が心に残っているようです。昔は遊びの一環として生き物を捕まえることが多かったようです。

その他、風や雪、田植えの手伝いでの足の感触なども心に残っているようです。

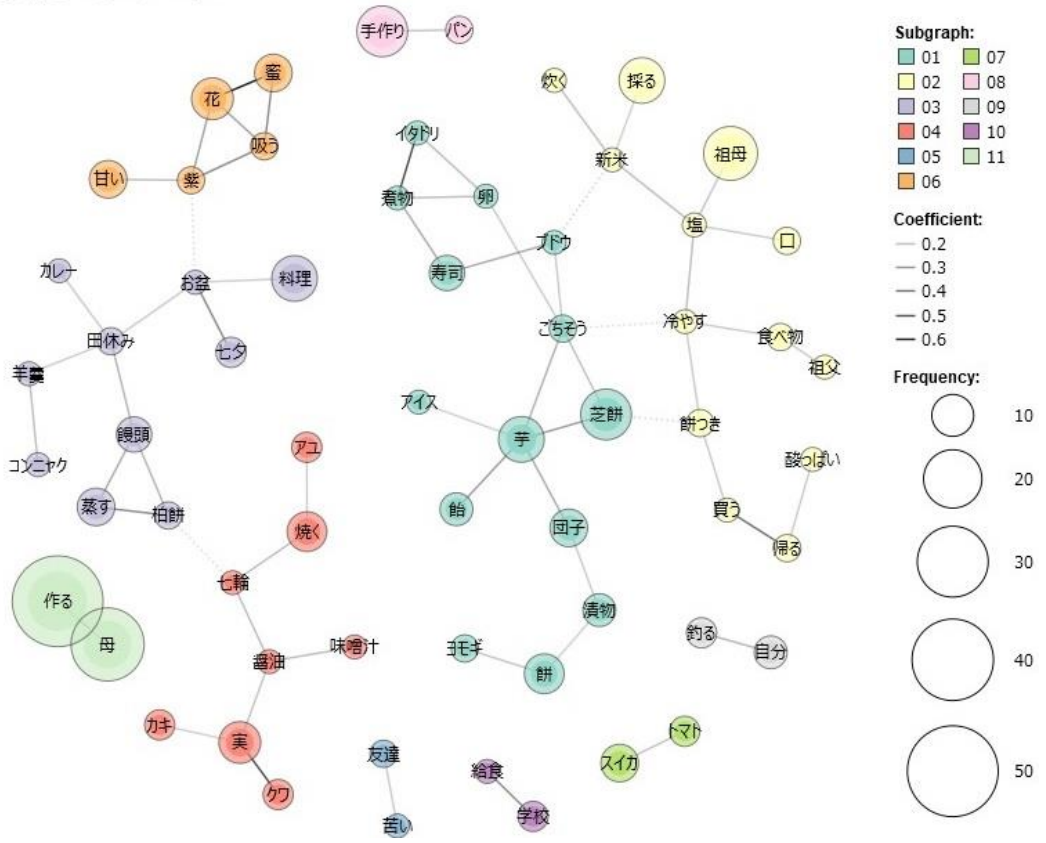
鼻に思い出す匂い



大きなものとして、家で作る自家製味噌、醤油、豆腐などの匂いがかなりの方が心に残っていると回答しています。味の質問では、母が出てきますが、味噌、醤油、豆腐などは祖母が担当していた家庭が多いのか、祖母がワードとして出てきます。

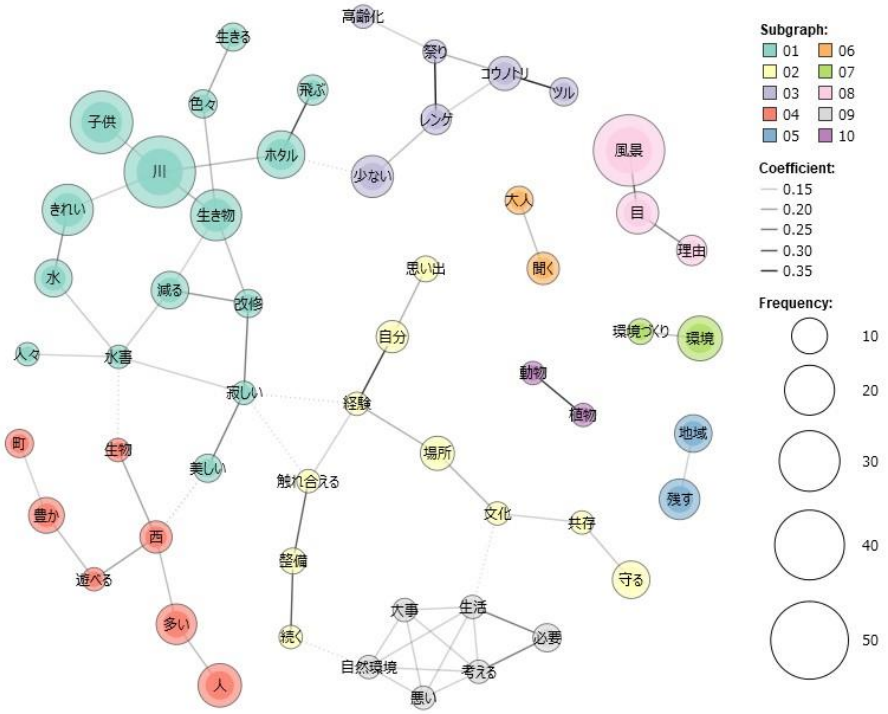
その他、牛の強烈な糞の匂いや、稲刈後のわらの匂い、籾を焼く匂いなど田んぼや農業に関する匂いも多く答えられています。

舌に懐かしい味



味で飛びぬけている言語は、母です。母が作った料理が何よりも心に残っているようです。昔は市販のお菓子などが少なかったため、手作りが多く、あの時味わった幸福感は今でも忘れられないのでしょう。芝餅、団子、様々な料理の味が今も心に残っています。その他、花の蜜を吸ったり、柿やクワの実、そして、アユを焼いて食べたりと、今の子どもたちが体験したことの無いような味がそこら中に溢れていたのだと思います。

大切にしたいふれあい



これからも大切にしたいふれあいは、川や風景、子どもなどが大事なキーワードとなっています。

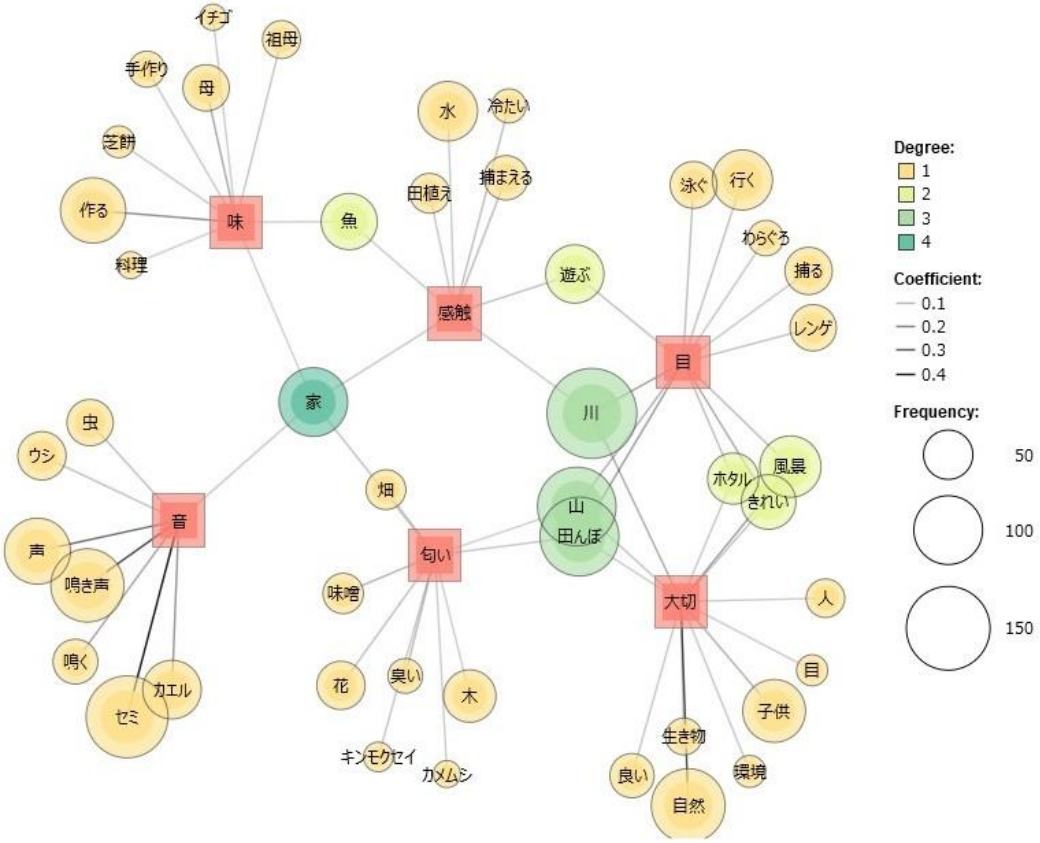
きれいで美しい川、ホタルが飛び交うような水辺、そこで遊ぶ子どもたちの姿、そういう懐かしい昔の風景が少しでも残っていくことを望む声が多くありました。そのような環境を作るためには、高齢化し、少なくなった地域の人々が互いに支え合い、美しい川、山、田んぼなどの自然、それらを包む風景、そして文化などをこれからも守っていきたいと考えられているようです。

その他、レンゲの花も昔と比べると少なくなってきているようです。

そして、そこに飛来するツルやコウノトリも大切にしたいと考えています。

また、祭をこれからも開催していけるか不安であり、地域の子どもが少なくなって寂しいという意見もありました。これからも地域を維持していけるよう、多くの人がこの地に住み続けていくことを望んでいるようです。

全項目の総合



家は味、音、匂い、感触の４つのカテゴリーに繋がるもので、様々な場面を生み出す場所であったことを表しています。

家の外であれば、山、川、田んぼが体感する場所であったことが分かります。

多くの事象の根源となっている山、川、田んぼ、自然や生き物などが生息していけるよう大切にすることで自ずと守られていくものと考えられます。これらを守っていくことで、それらが育むもの、もたらすものの恩恵を受けることができるのではないでしょうか。

家については、子ども、人によって構成されるものですので、地域に人が残る、集まるようにしていくことが必要だと考えられます。

資料５．座談会の実施

ふれあいアンケートで座談会参加の意思がある方に案内したり、石城・永長地区については区長に、宇和町在住者については各地域づくり組織に参加者を推薦してもらったりして実施しました。その内容を以下に記載します。

西予市ツル・コウノトリと共生するまちづくり計画座談会記録（石城公民館）

１　日　　時　　令和２年９月 24 日（木）13：30～16：00

２　場　　所　　石城公民館ホール

３　参 加 者　　市民（石城地区及び永長住民）14 人

スタッフ（進行）	愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科	准教授	渡邉	敬逸
グループリーダー	日本野鳥の会愛媛	代表	松田	久司（1 班）
	（一社）ノヤマカンパニー	代表	加藤	雄也（2 班）
	西予市生活福祉部環境衛生課		源	琢哉（3 班）
	西予市生活福祉部環境衛生課		兵頭	龍紀（4 班）

４　目　　的　　ふれあい調査の結果の共有、結果のまとめ

５　進め方(概要)

（１）概要の説明

（２）ワークショップ

１）ふれあい調査の結果から、共感する意見を各自で選ぶ(20 分)

【班分けと担当したテーマ)】

１班　　「目に浮かぶ風景」

２班　　「耳に残る音」

３班　　「鼻に思い出す匂い」

４班　　「舌になつかしい味」

1，3 班　　「これからも大切にしたいふれあい」A

2，4 班　　「これからも大切にしたいふれあい」B

２）選んだ意見をグルーピングし、意見交換（20 分）

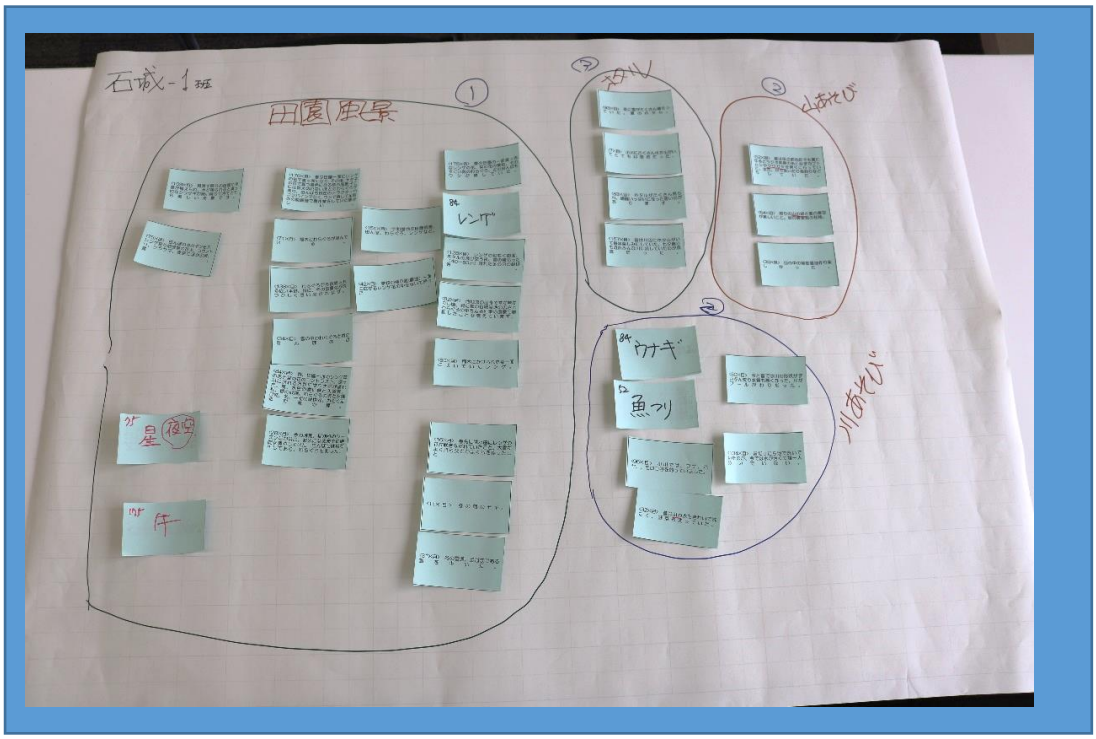
３）発表（10 分）

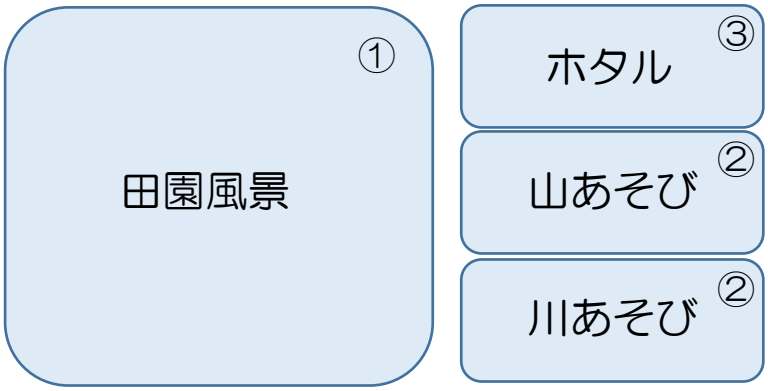
（３）総括（10 分）

６　ワークショップの結果

１班　目に浮かぶ風景

（１）選んだ意見とグループ（カテゴリー）





丸文字は優先順位・議論の内容

田園風景

109：早苗としらさぎ

75：わらのマンモス、レンゲ祭り前日の花火、コウノトリ、しらさぎ、月、星

176：レンゲ、菜の花、わらぐろ、うし、足踏み脱穀機

71：稲木とわらぐろ

138：わらぐろ、冬景色
34：わらくろ、稲の苗
84：レンゲ、菜の花、稲の緑と入道雲、稲刈り、わらぐろと夕日、銀世界、機関車
28：稲木、わらぐろ
151：田んぼ、わらぐろ、レンゲ
42：レンゲ畑
175：レンゲ、菜の花、わらぐろ、ウシ
128：レンゲ、ホタル、銀世界
82：広い盆地、わらぐろの中を走る機関車
80：レンゲ
16：レンゲ、かまくら
11：朝もや
31：雪

山あそび

52：ラジオ体操の後のカブトムシやクワガタ捕り
54：山の緑と青空、黄金色の稲穂
36：山の中の秘密基地作り

川あそび

84：ウナギ
52：川で泳いだり魚釣りなど
96：フナ、ハヤ、モロコ等を釣った
32：川で洗濯、野菜洗い
30：川の形状の変化、川がプールがわり
134：ため池で泳ぐ

ホタル

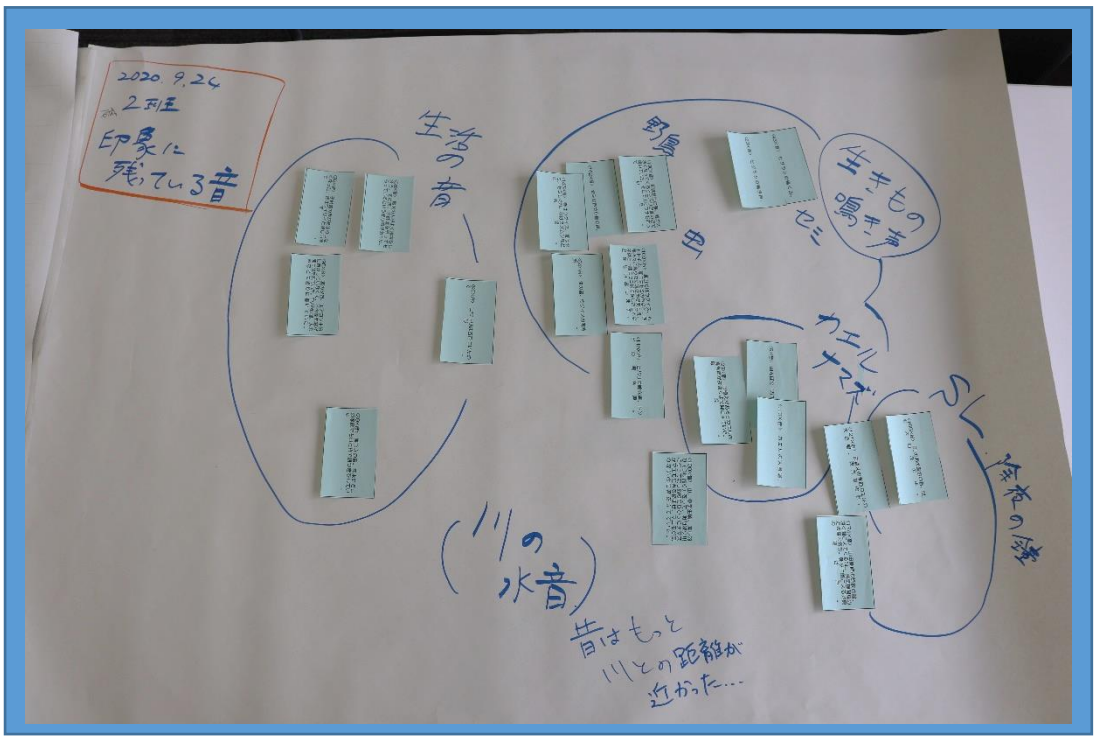
93：雪、ホタル
7：ホタル
83：ホタル
157：ホタル

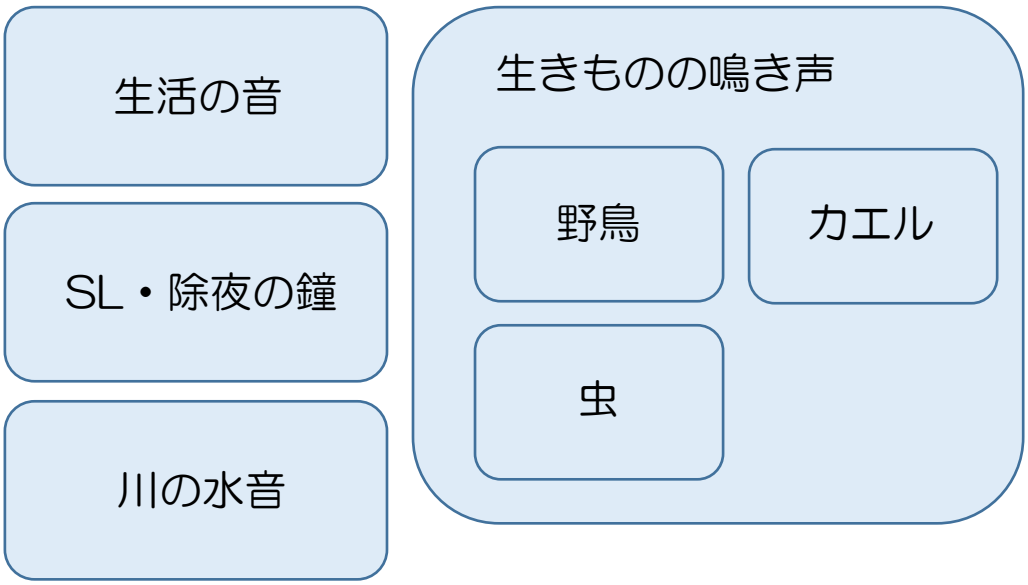
（2）まとめ

目の前に広がる田園風景であるものが多くあがっていたが、その中で、「わらぐろ」と「レンゲ」と「菜の花」が多かった。それに次いで、「雪」と「機関車」が多かった。また、山や川で遊んだことがあげられていた。ここまでの中に生きもののことも出ていたが、生きものの中でホタルのことに触れているものが多かった。

２班　耳に残る音

（１）　選んだ意見とグループわけ（カテゴリー）





生活の音

日常生活の中で聞こえていた音。家禽の鳴き声、家から漏れ聞こえる音、近所の人とのあいさつなど。昔は子供の声が聞こえていたが、今は子供の数が少なくなって寂しいという声もあった。

・ニワトリは各戸にいたのでは。
・地区の人が良く挨拶をし合う。その声、子どもたちを守ってもらっているという安心感があった。
・子どもたちの声があまりしなくなった。昔はワイワイと。寂しい今です。
・夏の夕方、エアコンが十分に普及していなくて、どの家も窓が開け放たれていた。TV や料理、人の声などは通りに響いていた。

SL、除夜の鐘

遠くから聞こえてくる音。SL を懐かしむ声は多かった。

・SL のあの警笛の音。SL も大切なのよ。
・夜汽車の音
・山田薬師の除夜の鐘、遠くから聞こえてくる SL、蒸気機関車の走る音と汽笛

生きものの鳴き声

野鳥や虫（特にセミ）、カエルの鳴き声を挙げる人が多かった。こうした生き物の声は、田んぼや山での遊びの記憶と結びついていることが多く、遊びの話などに発展した。

・ヒグラシの鳴く山。ヒグラシの鳴く声
・石城盆地の春、麦が大きくなってくるとヒバリが高い空で鳴いていた。その川でフナを釣っていた。
・セミの声や小鳥の声
・春はウグイス、夏はセミ、蝉時雨、秋はスズムシなどの合唱
・裏山ではウグイス、ホトトギス、夏にはセミの声など、四季折々に鳥や虫の鳴き声が聞こえ、子どもと一緒にセミ捕りをしたことなどを思い出します。
・虫の音、ウグイスの鳴き声
・ヒバリの鳴き声、トンビの鳴き声
・田んぼのカエル、カエルの大合唱
・田植えがあるとカエルの鳴き声が夜遅くまで聞こえていた。毎晩。
・山、中学生頃、流し釣り（つけ釣り）をして、明朝深ヶ川に行って流し釣りにかかったナマズがマエモに糸を絡ませ、マエモが風のないのに音を立てていた。

川の水音

話をする中で、昔はもっと川との距離が近く、川で遊んだ時の水音などが懐かしい、という意見があった。

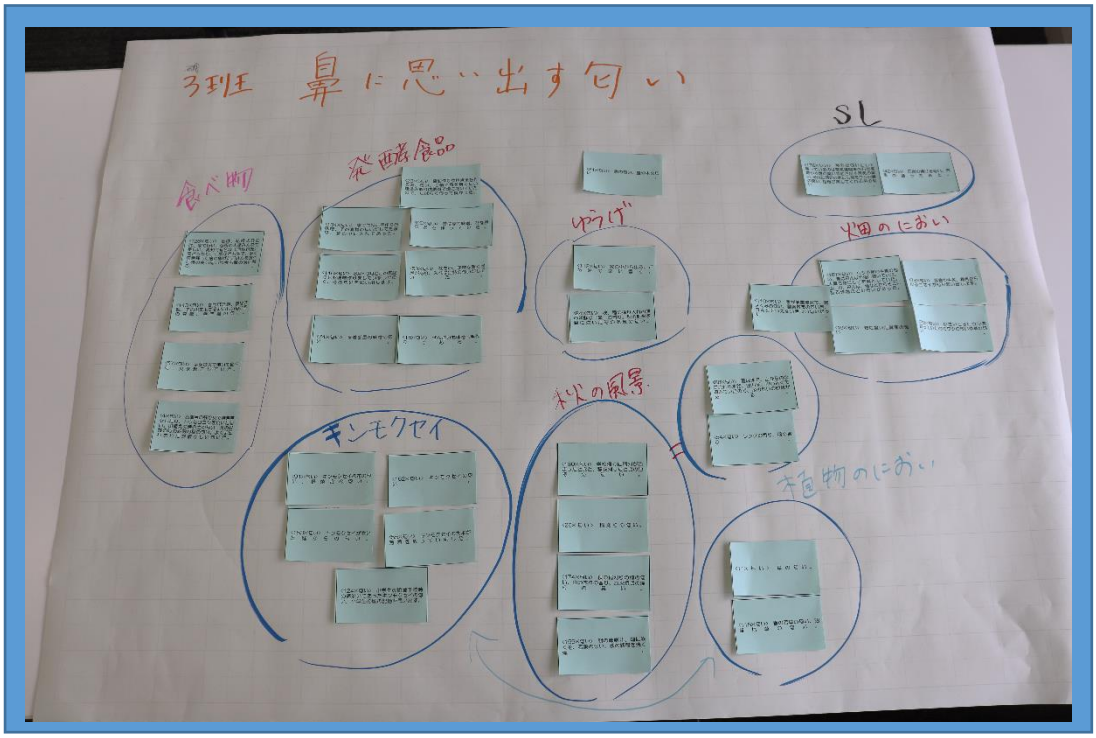
（2）まとめ

印象に残っている音は大きく分けて、自然の音と人の暮らしに関わる音に分けられた。自然の音は、野鳥の声や虫の声、カエルの合唱といった生きものの鳴き声のほか、川の水音があった。人の暮らしに関わる音は、生活音や近所の人とのあいさつ、子どもの声、SL の汽笛や除夜の鐘の音などが挙がった。

これらの記憶に残っている音の多くが今、失われつつある。その背景には生活様式の変化がある。人と自然の距離が遠くなった、という言い方もできるかもしれない。今回のツル・コウノトリと共生するまちづくり計画の検討にあたっては、人と自然の距離感を見直すということが、１つキーワードかもしれない。

３班　鼻に思い出す匂い

（１）　選んだ意見とグループわけ(カテゴリー



ＳＬ	ゆうげ	植物のにおい
畑のにおい	食べ物	キンモクセイ
秋の風景	発酵食品	

SL

幼少期におけるＳＬは石炭の焼ける独特な匂いとその存在感から心に深く残っている。

・強烈な匂いとして残っているのは蒸気機関車の石炭を燃やす煙の臭いや吐き出す蒸気の臭い。それに何処の家にも居たウシの糞の臭い。祖母が蒸してくれる芋の匂い。

・石炭の焼ける匂い。汽車の通ったあと。

畑のにおい

良くも悪くも、畑に撒いている肥えの匂いは強烈で、豚、牛、ニワトリなどの匂いなども良き思い出となっている。

・家が兼業農家で肥えくみの匂い、農薬散布の匂い等、なんともいえないきつい匂いだった。

・ウシ小屋の牛糞の匂い。糞は田んぼや畑に撒いていた。人糞も畑に撒いて肥料としていた。山、川、田んぼ、畑などからそこにある作物などの匂いがあった。

・畑に撒いた糞尿の臭い

・豚舎や牛舎、鶏舎から出るニオイが時々思い出します。

・小さいころにウシを飼っていたのでウシの匂いや草の匂い

植物のにおい

レンゲや若草、枯草など植物からくるにおい（香り）も感じられる時代であった。

・夏は外で、山からの水が流れる水路、田んぼ、川の近くで遊んでいたので、水の匂いの印象がある。

・レンゲの香り、稲の香り

・草の匂い

・春の若草の匂い、しょうゆ、枯草の匂い

ゆうげ

かまどで炊いた時の匂い、庭木の匂いなど、家での匂いも現在より多くの匂い（香り）があった。

・家の匂い、畳や木の匂い

・家の中から出る、ご飯時の良い香り

・秋、稲の採り入れの時の新鮮な「藁」の香り、秋の新米を釜で炊いた時の湯気の匂い

秋の風景

やはり稲刈りをしたときの独特な匂い、籾殻を焼く匂いは毎年ながら懐かしく感じる。

・学校帰りに稲刈りが始まったときと、稲を刈ったときの独特の匂い

・稲刈りの匂い

・秋の稲刈りの穂の匂い、山の木々の香り、炭焼きの煙の匂い

・朝の味噌汁、畑に咲く花、若葉の匂い、秋の籾殻を焼く煙

発酵食品

昔は味噌、醤油など各家庭で作っていた。

・醤油作りや焼き米を作る際、匂い。七輪で魚を焼く匂い煙。汲み取りは肥料で畑に撒いていたので、しばらく匂って臭かった。
・昔は家で味噌、ひな豆などを作っていた。
・つけもの、みそを置く部屋があり、入れば独特の匂いがしていた。
・ぜんざいも味噌も手作りである。
・家では特に手作りの味噌、その漬物の匂いがしてた。昔は倉の中に入れてあった。
・８月～９月どこの家庭でもお味噌作りをしていましたので、その匂いを思い出します。
・味噌部屋の味噌の匂い

キンモクセイ

キンモクセイだけ特にその匂いに対する思い出が強かった。

・キンモクセイの花の匂いや野焼きの匂い
・キンモクセイの匂い
・キンモクセイが咲いた庭からの匂い
・キンモクセイの大木が芳香を放っていました。
・小学生の頃登下校時の道沿いにあったキンモクセイの匂い。小学生の頃の記憶を思い出す。

食べ物

手作りの豆腐、羊羹、焼き芋など、食べ物の匂いは忘れられない。

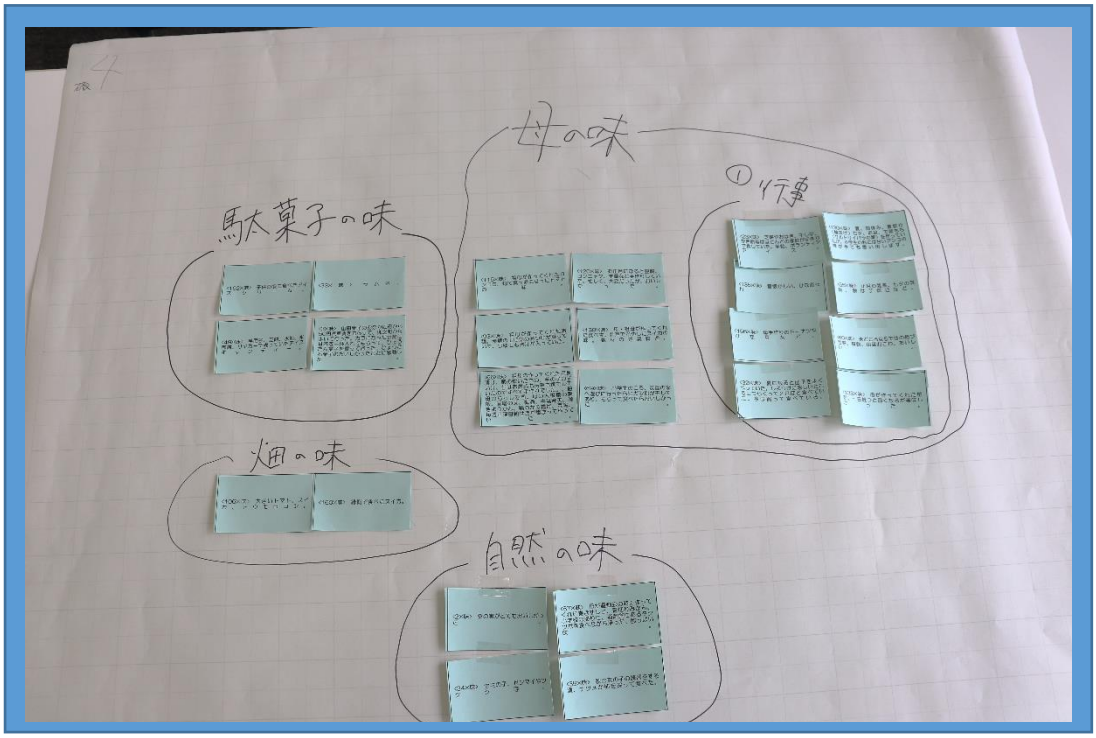
・昔は、結婚式などは、家で行い、近所の人達みんなで手伝い、高知で有名な（皿鉢料理）などを作り、ご飯なども外で、多く炊き残った底の焦げたごはんを食べた時の良い匂いは今も頭の隅に残る。
・春はぼた餅、夏は芝餅、その出来上がるおいしい匂い冬の豆腐、巻羊羹の匂い。
・芋を焚火で焼いて食べた。火を起こしていた。
・お風呂の残り火で焼き芋をしたり、トウモロコシを焼いた匂い。田植えの時の土の匂い。米の収穫の時の脱穀の稲の匂い。良く手伝わされたが懐かしい匂いだ。

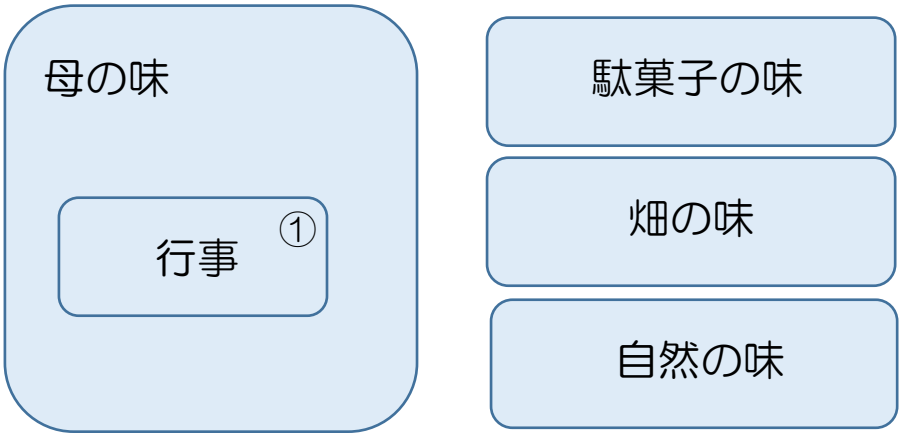
（２）まとめ

ＳＬや手作りの味噌、醤油の匂い、肥えを撒く臭いなど、現在では失われつつあるにおいが昔はどこにでもあった。稲刈りをした後の風が運ぶあの匂い、キンモクセイやレンゲの香りなど、今なお続いているにおいである。昔は今以上に多様なにおいが存在していた。

４班　舌になつかしい味

（１）　選んだ意見とグループわけ（カテゴリー）





丸数字は優先順位。

母の味

母、祖母の手作り料理の味について。特にひな祭りや七夕などの行事での手作り料理の味が懐かしく、また食べたいという意見も多かった。昔は全部が手作りだった。

・祖母が作ってくれたカンコロ。畑で真っ赤になったトマトの味。

・お正月になると豆腐、コンニャク、羊羹など手作りしていた。忙しく、大変だったが、おいしかった。
・祖母が作ってくれた素麺。素麺の上に魚の煮つけが乗っていて、つゆにも煮汁が入っていた。
・母、祖母が作ってくれた食べ物。井戸で冷やしたスイカの味。数々の野菜料理。
・祖母の作ってくれた奈良漬け、栗の炊いたもの、芋の粉の甘い汁、昔はお葬式や法事も家でしていたのですべて手作りでした。伯母のちらし寿司。母の大根葉の葉飯、味噌の味、梅酒、牛乳寒天、巻きようかん、鶏のから揚げ、豆腐、毎週金曜日親せきが集まって作っていた。
・小学生のころ、友達の家に遊びに行ったらヒガシ餅が干してあり、もらって食べたらおいしかった。
・芝餅やおはぎ、干し芋、かき餅等はほとんどの家庭が手作りで食べていた。芋飴、ボランティアアイス
・夏、田休み、夏祭り（輪抜け）、七夕、お盆に芝もち（サルトリイバラの葉）を作っていたが、小学生の私には甘いアンコの味が今でも思い出します。
・昔懐かしい、ひなあられ
・正月の雑煮、七夕の芝餅、秋は芋炊きなど
・母手作りのドーナツやひな豆など
・米どころならではの朝づき餅、桜餅、山菜おこわ、おいしい。
・夏になると団子をよく作っていた。しようけに涼しいところにつらくって２日ほど食べていた。今は買って食べている。
・母が作ってくれた柏餅。一日経つと固くなるが美味しかった。

駄菓子の味

お小遣いをもらっては駄菓子屋に行っていた。特にラムネをよく買っていたとの声が多かった。駄菓子を見ると懐かしく思う。

・子供の頃に食べたアイスクリーム
・ラムネ
・芋団子、芝餅、水飴、米煎餅、リヤカーで売っていたアイスキャンディー
・山田薬師のお祭りに母から 50 円汽車賃をもらって、卯之町から歩いて行った。空になった水筒に甘茶を一杯いれてもらって、ひょうたん菓子を買って帰った。ひょうたん菓子のおいしかったことに感動した。

畑の味

どの家庭でも畑で野菜を育てていた。季節により育てる野菜が違い、どの野菜もおいしかった。夏にはスイカを収穫し川で冷やして食べていた。

・大きいトマト、スイカ、トウモロコシ
・縁側で食べたスイカ

自然の味

下校中にお腹の足しに山菜を採って食べながら帰っていた。山には柿や栗がなっており、採って食べていた。道端や山にはたくさんの山菜等がなっていた。

・桑の実がとてもおいしかった。

・母が運動会の時に作ってくれた巻きずしと、青切りみかん。小学校の帰りに道路畑にあるタシツボを食べながら帰った。酸っぱい味。

・セミの子、ゼンマイやツクシ等

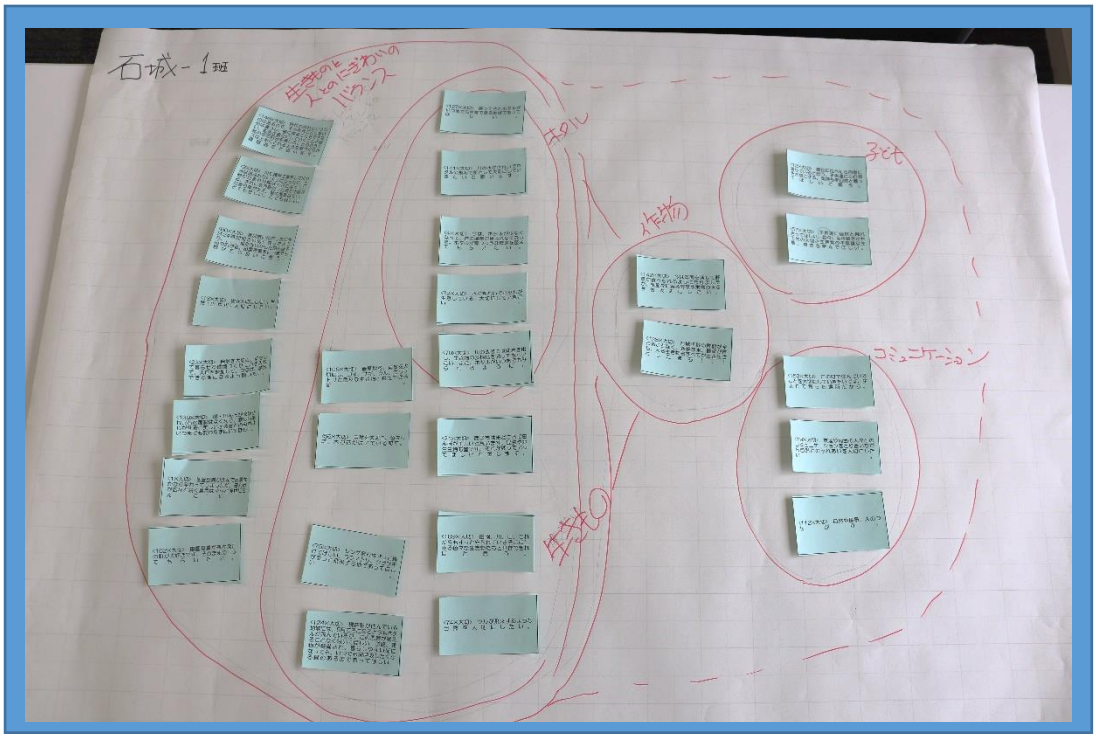
・秋の亥の子の練習をする頃、ナツメか柿を採って食べた。

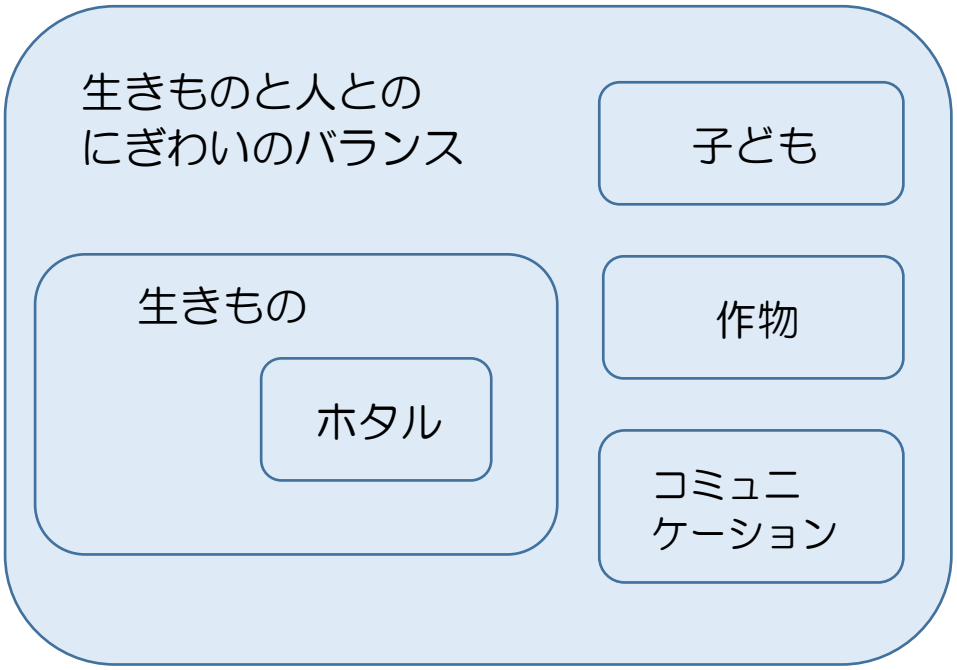
（２）まとめ

一番思い出に残っていて、懐かしく感じるのは母や祖母の手作りの料理。昔は全部が手作りで母や祖母の手作り料理を食べていた。お祭りや行事の際にも母や祖母が団子や餅などを手作りしていた。今では、行事の際には買うことが多くなっており、また母の手作り料理を食べたいという意見も多かった。駄菓子、特にラムネが懐かしいという意見も多く、今ではスーパーができ、昔ながらの駄菓子屋がなくなっている。その他にも畑で育てていた野菜や果物、山で採れる山菜なども育てたり採ったりするものではなく買うものになっている。昔懐かしい味がなくなりつつある。

１班　これからも大切にしたいふれあい　A

（１）選んだ意見とグループわけ（カテゴリー）





生きもの

21：米どころで美しい田んぼ、昆虫や水生生物も豊か

109：田園、川、山、生きものと共存

74：ツルが飛来するような自然

105：色々な生きものと共生できる街

56：いろいろな草、木が花が咲いている町

75：レンゲ祭り、コウノトリ・しらさぎの飛来

124：ホタル、深呼吸したくなるような緑のある街

特に ホタル

127：ホタル

141：川がきれいでホタル

4：ホタルの育つ環境

72：水がきれいでホタルが生息

70：川の改修に知恵を出し、生きものの多様化をホタルも

作物

142：季節季節に実る野菜や果物

138：石城平野の景観が変わることなく、新鮮な米や野菜、人も自然もいきいき

子ども

12：子供達に自然を大切にする気持ちを養う

57：子供達に自然に触れあってほしい

コミュニケーション

153：この町で住んでいることを大切に、生まれ育った場所だから

19：コミュニケーションを取り合い自然のふれあいを大切に

112：自然や風景、人のつながり

生きものと人とのにぎわいのバランス　以上の項目を含むように

146：生活を豊かにしていくことと自然の中の自分を感じられるようなバランスのとれた街づくり

3：川が護岸工事され溢れないようになったが、狭くなった。きれいな河原に

60：夜は暗い街だったが、今は明るい街に、地形を生かした田んぼや山の広がる田園風景を残したい

13：自然(山や川)を大切に

23：安心して暮らせる環境

139：川・田んぼが改修され、昔の面影なく、さびしい。美しいふるさとの自然は変わらずにいてほしい

1：広い田んぼを後世に伝える

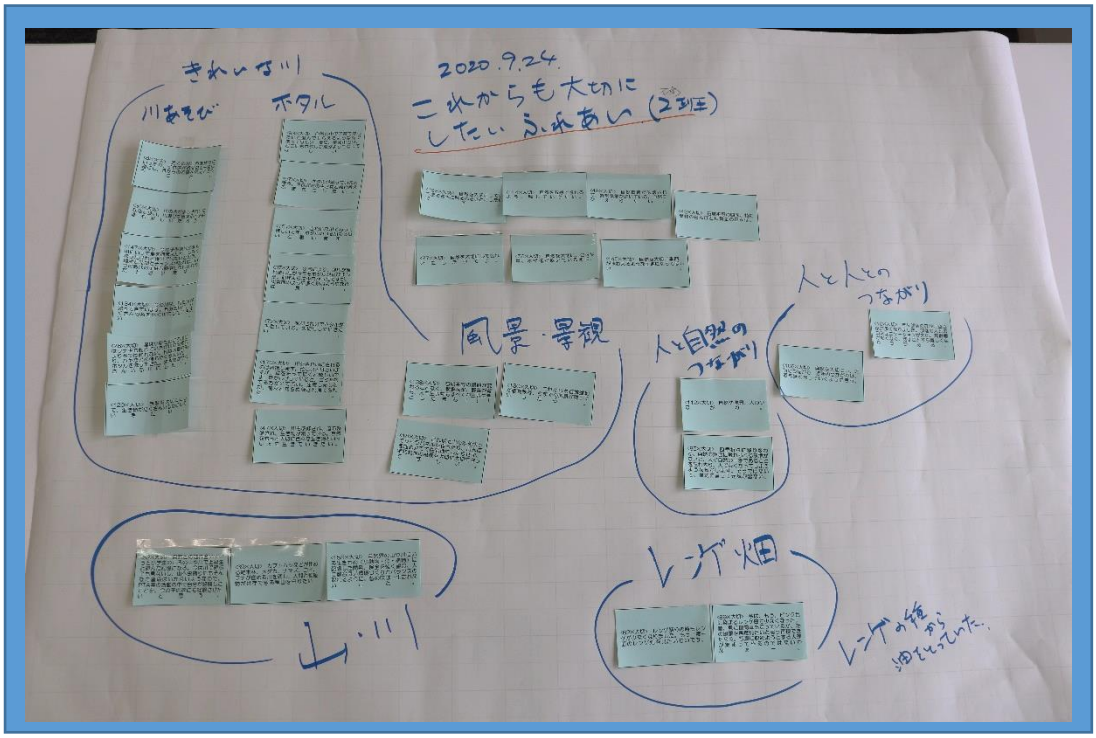
162：田園風景が豊かな町がそのまま残ってほしい

（2）まとめ

生きものの中でも、ホタルに関するものが多く、それをまとめた。他にも色々な動植物があがっていた。そして、農作物を作ることで、生きものたちもいっしょに地域で暮らしていることも触れられていた。また、子どもたちに、自然を大切にする気持ちや、生きものたちの生態や尊さを学んでほしいという願いもあがっていた。さらに。地域にコミュニケーションや自然と人のつながりの大切さもあがっていた。このようにあがっている項目をまとめるように、生きものと人の暮らしが、どちらかに偏ることなく、バランスのよい地域になってほしいという項目が多かった。

２班　これからも大切にしたいふれあい　B

（１）　選んだ意見とグループわけ（カテゴリー）



願い

れんげ畑

山・川

風景・景観

きれいな川

川あそび

ホタル

人と自然のつながり

人と人のつながり

願い

自然を大切にしていきたい、という願い。

・石城平野の四季、特に夏緑の田んぼと秋黄金の田んぼ
・自然を大切に季節が味わえるような土地になってほしい。
・自然を大切に、いろいろな草、木の花が咲いている町に。
・自然を大切にしてきれいにしたいです。
・自然を大切にしていつまでも心に残るふるさとにしたいです。
・自然を五感で感じるよう、残していきたい。
・自然環境が破壊されて、異常気象が続いている。自然にかえりたい。

れんげ畑

西予市（旧宇和町）のシンボルの花はレンゲである。しかし、農法の変化によってレンゲを見ることも少なくなった。かつてのようなピンク色に染まるレンゲ畑の風景を取り戻したい。レンゲは緑肥として、また種から油をとるなど、いろいろ活用していた。

・レンゲ祭りの時もレンゲが少なくなりました。もう一度一面のレンゲ畑を見たいものです。
・今はもう、ピンク色に染まるレンゲ田も少なくなった。昔、見た機関車も走っているが、あの風景を再度見たいと思う。再現できたなら。写真に収めようとする人達が集まってくるのではないかなぁー。

山、川

山や川で遊び、生きものと触れ合った体験は楽しい記憶として残っているので、そうした体験を今の子供たちにもしてもらいたい。人間が住みやすい環境整備と、いろいろな生き物がすむ環境の保全をバランスよく取り組むべきである。

・自然とのふれあいで言うと、小学生の頃の山や川で上級生と遊んだ記憶になる。今は川で遊ぶ子も見ないし、山へ虫捕りにもそんなに普段は行かないようなので、PTA 等の活動の中で自分が経験したことを、今の子どもたちにも経験させたいと思う。
・カブトムシなどが住める雑木林、メダカ、ナマズ、コイ、フナが住める川を残し、人間と動植物が共存できる里山を残したい。
・自然界の山や川にいる生きもの（小動物、魚、植物）に配慮した開発、保全を強く望む。人に都合よい環境づくりとバランスの取れるように。昔の味は一生忘れないこと。

風景・景観

現状の風景にある程度満足しており、これ以上、開発をして変わることがないようにしてほしい。

・石城平野の景観が変わることなく、新鮮な米、野菜が育ち、人も生き物もすべてが生き生きとしたまち！
・これからも石城盆地が春夏秋冬、今までの風景が残っていったら…。
・これ以上山の木を切ってソーラーパネルを作ったり、田んぼを埋め立てて住宅地にしたり

せず、宇和盆地の風景を大切に守ってほしい。

きれいな川

きれいな川を象徴するものとして、川遊びとホタルを挙げる声が多かった。きれいな川と言っても、見た目のきれいさ（景観美）と生きものが住める水質の良さが考えられている。

・近くの川に魚を捕りに行くこと
・川の水が少しきれいになると良い。川遊びができると子どもたちも楽しいだろう。
・今の子供たちはあまり川に行って魚を捕まえたりしなくなったけれど、嫌いではないと思う。場所と時間とチャンスがあれば、いつの時代の子供も夢中になれるものだと思います。
・今の川は、特に魚が減ってきています。昔みたいに、たくさんの魚が泳ぐ川にしていきたい。
・昔は小学生のころ川にはウナギも釣れていたが、川の改修により今では釣れない。昔は水量もあり、ハヤなどの魚もたくさんいた。ホタルも減ってきた。生きものがたくさんいる川にしたい。
・自然を大切にして、生きものがたくさんいる街にしていきたい。
・自然の中で子育てがしたいと選んでもらえるような街であってほしい。夏に宇和川沿いどこにもホタルが飛ぶようになってほしい。
・ホタルが減っていると思う。子供が川の生きものと触れ合える街にしたい。
・きれいな川であってほしいです。ホタルのいる川なら良いと思います。
・災害により、河川が壊れましたが、今年もホタルが飛びました。前年よりは少なかったですが。災害前のように多く飛ぶようになればよい。
・水がきれいでホタルが生息している。大切にしていきたい。
・川をきれいにされるのは応援します。忙しいとは思いますが、草を刈っていただくと嬉しいです。草が茂っていると、ごみを捨てる方がいて汚い。注意しましたが、堂々と知らぬ顔して捨てられました。
・川も改修され、道も整備され、生きものが減っている。自然をもっと大切にいろいろな生き物と一緒に生きていきたい。

人と自然のつながり

・自然や風景、人のつながり
・四季折々に移り変わる自然の輝きに触れらえる環境がないと、人が自然の一部であることを忘れ去り、人でなくなってしまうような気がします。そうではないと、単純に言って元気が出ない。

人と人とのつながり

自然を大切にし、近所のつながり。近所のつながりは、近年無くなっていくように思う。

・年々地域のなかに空き家が多くなりました。地域の人とのコミュニケーションが大切。高齢者が多くなり、話すことすら難しくなりつつある。

・子どもたちが祖父母と一緒に過ごし、昔からの行事を伝えてもらうこと。

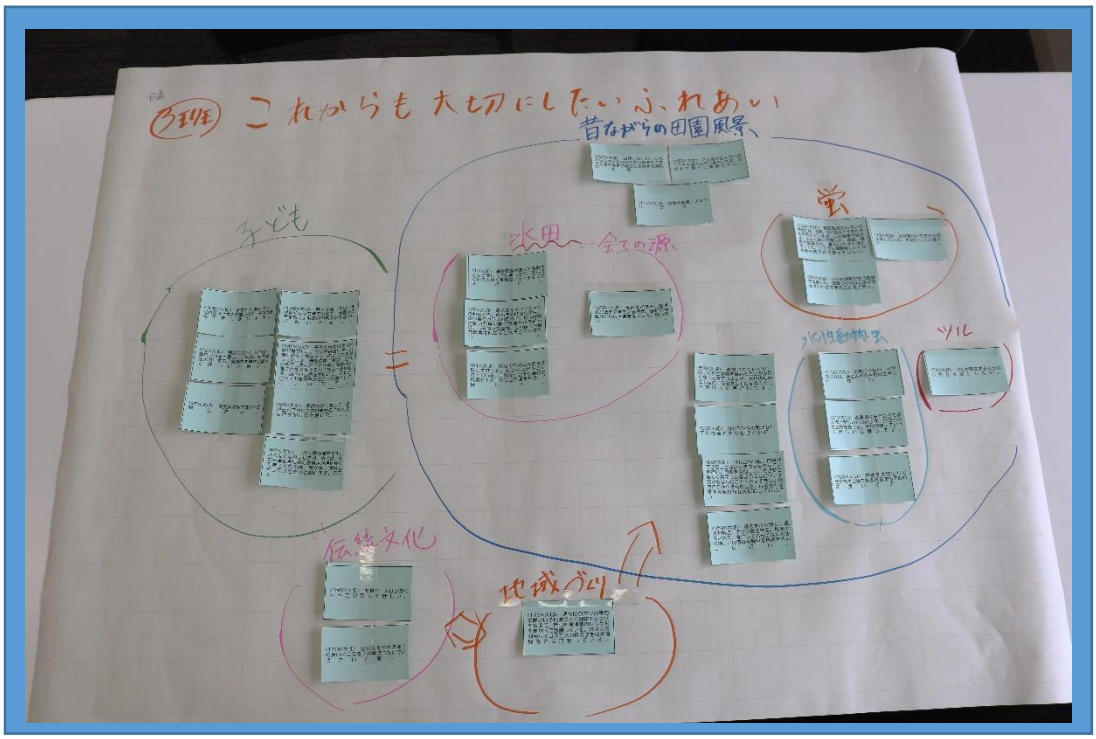
（２）まとめ

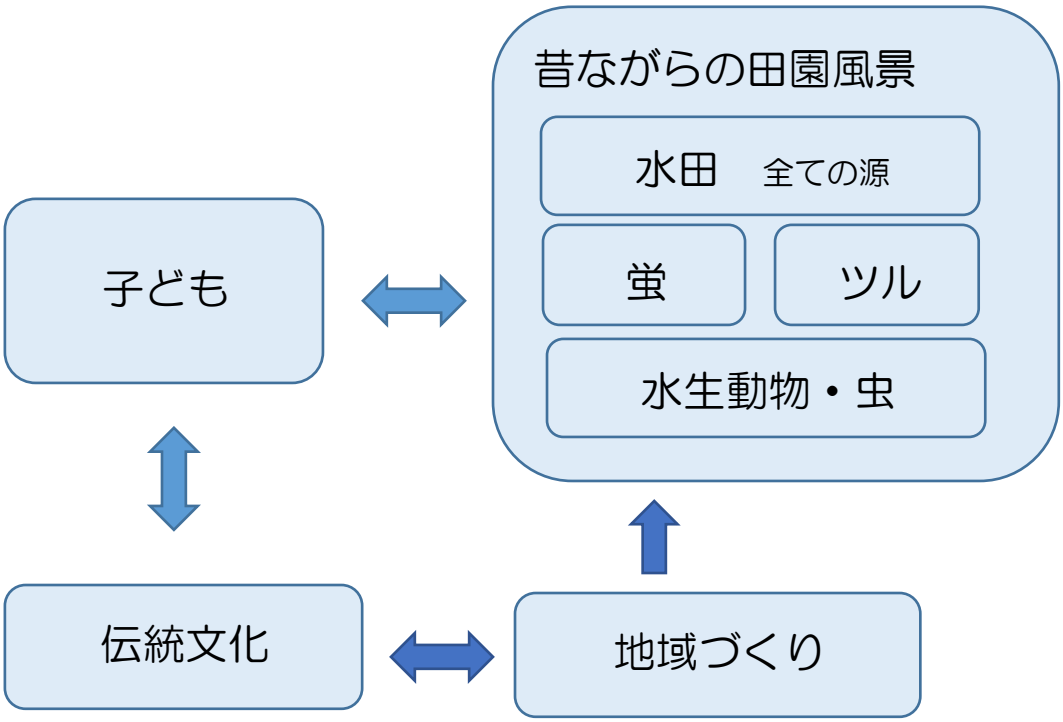
かつては一面のレンゲ畑が広がり、春にピンク色に染まっていたが、今ではレンゲも少なくなった。山や川で遊び、生きものと触れ合った体験は楽しい記憶として残っているので、そうした体験を今の子供たちにもしてもらいたい。特に、ホタルが舞うようなきれいな川は多くの人が望んでいる。人間が住みやすい環境整備と、いろいろな生き物がすむ環境の保全をバランスよく取り組むべきである。

そのためには、人間は自然の一部であることを思い出し、人と自然のつながりを取り戻していくこと、人と人とのつながりを大切にした地域づくりが重要である。

３班　これからも大切にしたいふれあい　Ａ

（１）　選んだ意見とグループわけ（カテゴリー）





昔ながらの田園風景

後に囲んだワード、「蛍」「水田」「水生生物」「ツル」「川」が複雑にからんで構成されている田園風景

・この町で住んでいることを大切にしていきたいです。生まれて育った場所だから。

・田園、川、山、これからもずっと守られていきそこに生きる色々な生き物たちと共存できればと思う。

・自然の風景、人のつながり。

蛍

ホタルは誰もが好きな生き物で、ホタルが生息できる環境を守っていきたい。

・現在私が住んでいる地域には、５月ごろになると今もホタルが飛んでいるが、この風景が絶えることなく続いてほしい。道路、建物が整備され、暮らしやすい街になっても、いつでも深呼吸したくなる緑のある街であってほしい。

・水がきれいでホタルが生息している。大切にしていきたい。

・ホタルが飛び交う環境が望ましい。環境づくりは私達が気を付ければできることだと思う。

ツル

ツルが飛来するような素晴らしい場所である。

・ツルが飛来するような自然を大切にしたい。

水生動物・虫

ホタル以外にも、水生生物や昆虫なども豊富にいました。

・川を汚さない。水が無ければほとんどの生物は生きられない。

・西予市は米どころで田んぼが美しいと思います。昆虫や水生生物も豊です。それが残っていってほしいと感じます。

・自然を大切にして色々な生き物であふれるまちであれば良いです。

川

川は生き物の拠点であり、遊ぶ場でもあった。これからきれいに残していきたい。

・改修されていく川、ゆっくり生き物を眺めることが少なくなってきていますが、後世のためにも昔の「ふるさと」になるように心がけていきたいです。

・川のヨシ等の処理をして川の流れを少しきれいに。

・川をきれいに、自分ができることを少しずつでもやっていきたい。自然を大切にし、生き物と楽しく共生できるまちにしたい。渓筋から学んだこと「みずすまし」の方たちから学んだこと、ふるさとを愛する気持ちを大切にしていきたい。

・森の木々を残し、温暖を防ぎ、オゾン層を守る。酸素の多い大気、食にしても安全な川の生き物、山の恵みを残せる自然を大切にしたい。

水田

今もなお残っている田園風景、わらぐろなどの文化、宇和のシンボルであるレンゲが多く咲いている風景を維持していきたい。

・高齢化が進み、空き家が増えてきている現状、田畑の荒廃がこれ以上進まないように願いたい。

・基盤整備は進んで風景はかなり変わってしまったが、田んぼが色々と続く景色はずっと後世に伝えたい。

・過去のイメージは多くのわらぐろ、田んぼの畦道の大豆、山へ帰るカラスの群れで、現状は緑の多い石城平野で整備された田んぼ。澄み切った空気・これほどの自然環境は他にはこれほど多くはない。

・わらぐろのある風景を残してほしい。レンゲ畑が少なくなっている。宇和文化会館の緞帳の風景をイメージできる場所を残してほしい。

子ども

子どもの数が減り、寂しくなっている。子どもが楽しく遊べるような自然を取り戻したい。

・昔とは違って少子化が多くなってきているが、緑豊かな西予市で子供達が自然の中で遊べれば良いと思う。

・子どもの頃は川や山が遊び場でした。今の子供達はゲーム機に遊んでもらっているような気がしています。自然の中で遊び、遊びの中で工夫したことや得た知識は生涯にわたる生きる力になると思います。西予の自然を大切にし、これからの子供達が豊かに遊べ

る場としてほしいです。

・子供の数は減っているが田んぼや川で遊びまわるにぎやかな声が聞けると良いな。

・子供の頃の風景はすっかりなくなりましたが、今では、稼先が一番、都会に出た子供達が時折帰ってきてくれる様、我が家、地域を守っていきたいと思います。元気で。

・子供にあれはダメ、これはダメと大人が言うな？子供は褒めて育てましょう。

・都会に比べたら自然に満ちていると思う。子供達にも自然を大切にする気持ちを養って欲しいと願う。

・子供達が外で遊ぶ声が聞きたい。

伝統文化

子どもの数、地域住民が減り、祭なども活気がなくなってきたが、維持したい。

・お祭り　人は少なくなったが残してほしい。

・昔の文化や生活様式の良いところを引き継いでいきたいと思う。

地域づくり

地域づくり組織が、休耕田を活用し、保育園児等の交流などを通じて地域を活性化させようとしている。

・現在はロマンの里応援隊という地域づくり団体でレンゲを植えて、無肥料無消毒のレンゲ米を作り皆で活動している。休耕田を利用してコスモスの種をまき保育園児等と交流をしている。

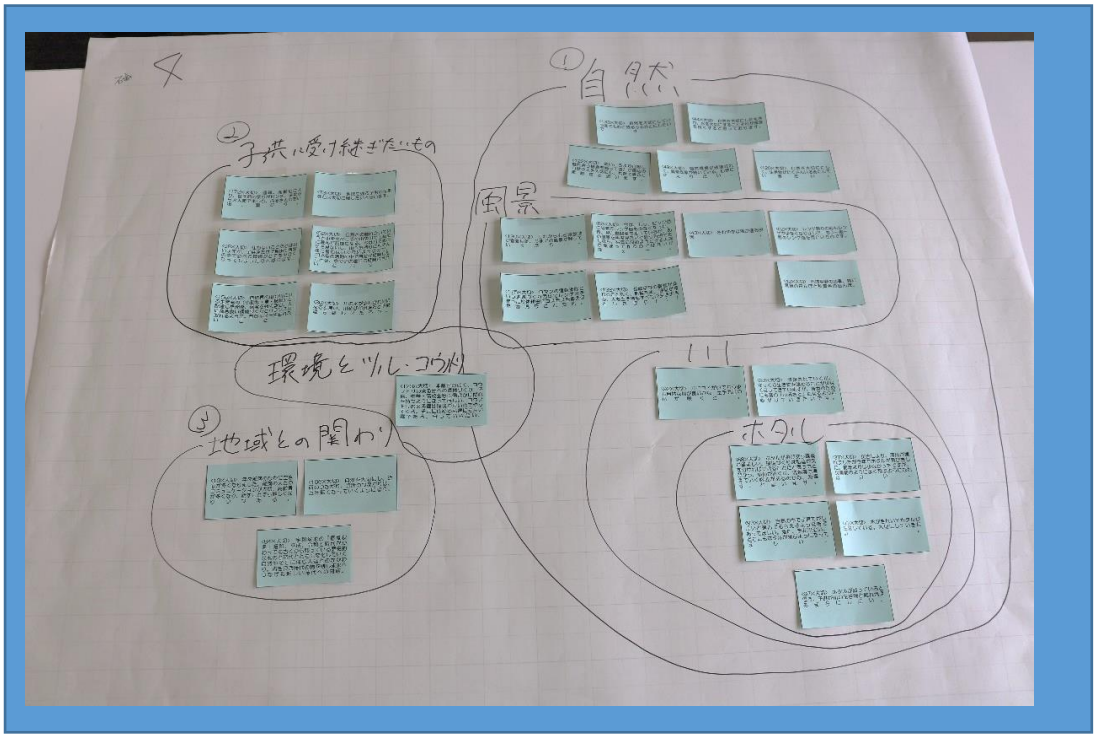
（2）まとめ

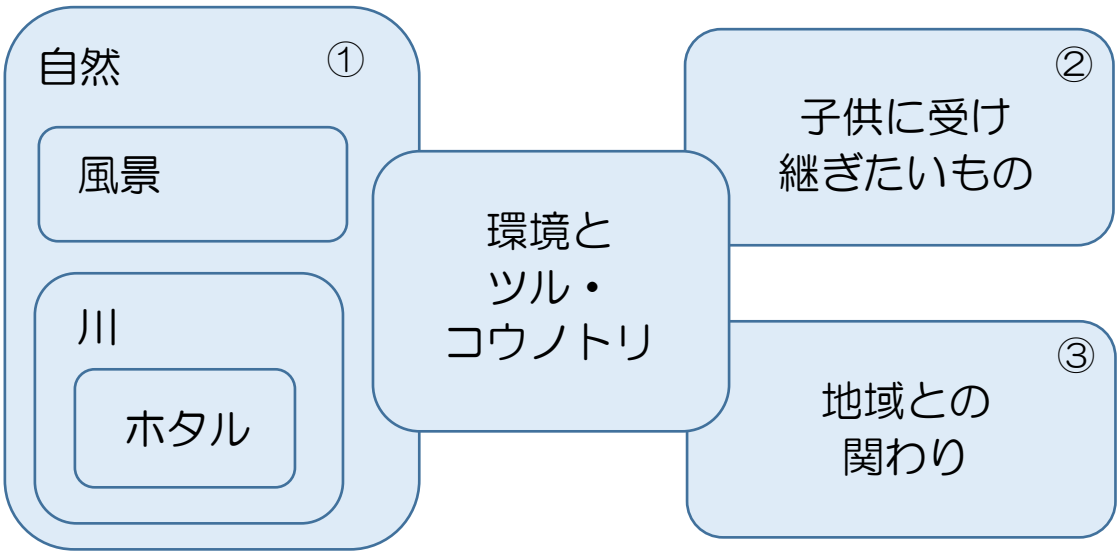
水田を守ることで、ホタルや水生生物、昆虫、ひいてはツルなどが生息しやすい環境に繋がる。川も同じである。それらは昔ながらの田園風景の重要な構成要因である。

子どもたちも、その豊かな自然環境の元、元気に遊んでもらいたい。田んぼ、川、生き物を守ることが昔ながらの田園風景を守ること、地域を守ることに繋がる。

４班　これからも大切にしたいふれあい　B

（１）　選んだ意見とグループわけ（カテゴリー）





丸数字は優先順位。

自然

自然を大切にしたい。自然を大切にすることで動植物が増え、環境も良くなると思う。

・自然を大切にしていつまでも心に残るふるさとにしたいです。

・自然を大切にした生き方。水を大切にすることそれが環境を良くすると思っています。

・幼いころより自然に触れ合う機会も減ってきたが周辺の自然や人を大切にし、共存できると素敵だと思います。

・自然環境が破壊されて、異常気象が続いている。自然にかえりたい。

・自然を大切にして、生き物がたくさんいる街にしていきたい。

風景

四季で変わっていく色の変化がうつくしい。ピンク色に染まる一面のレンゲ畑をもう一度見たい。

・これからも石城盆地が春夏秋冬、今までの風景が残っていったら…。

・今は、もうピンク色に染まるレンゲ田も少なくなった。昔、見た機関車も走っているが、あの風景をもう一度見たいと思う再現できたなら。写真に収めようとする人達が集まって作るのではないかなぁー。

・さわやかな風が通る田園。

・レンゲ祭りの時もレンゲが少なくなりました。もう一度一面のレンゲ畑を見たいものです。

・ロマンの里応援隊という地域づくり団体でレンゲ米を作ったり休耕田にコスモスを植え保育園児などと交流。

・石城平野の景観が変わることなく、新鮮な米、野菜が育ち、人も生き生きとしたまち！！！

・石城平野の四季。特に夏緑の田んぼと秋黄金の田んぼ。

川

河川改修により生き物が減った。ホタルに関する思い出が多い。

・川にコイがいてもう少し自然な川が良いかな。土手も昔の花が咲くと…。

・改修されていく川、ゆったり生き物を眺めることが少なくなってきていますが、後世のためにも昔の「ふるさと」になるように心がけていきたいです。

ホタル

ホタルが減った。昔の様にホタルがたくさん飛び交うようになってほしい。宇和川沿いのどこでも飛ぶようになってほしい。

・ホタルが飛び交う環境が望ましい。環境づくりは私達が気を付ければできることだと思う。ホタルが飛び交う、小魚が泳ぐ川、洗剤等も考えていく必要があるのかな。消毒等。

・災害により、河川が壊れましたが今年もホタルが飛びました。全年よりは少なかったですが、災害前のように多く飛ぶようになれば良い。

・自然の中で子育てがしたいと選んでもらえるような街であってほしい。夏に宇和川沿

い、どこにでもホタルが飛ぶようになってほしい。
・水がきれいでホタルが生息している。大切にしていきたい。
・ホタルが減っていると思う。子供が川の生きものと触れ合えるまちにしたい。

子供に受け継ぎたいもの

地域に残る行事がなくなりつつあるので残していきたい。昔の様に川で遊べるくらい綺麗な川にしたい。

・過疎。高齢化により、各季節の祭りがピンチ。子供から大人まで楽しむ。ふるさとの想い出、繋がり。
・地域に残る子供の行事などは大切に残したいと思います。
・仕方ないことだとは思いますが、子供達だけで自由に自然の中で遊べる環境がとても少なくなってしまったなと感じます。
・自然との触れ合いでいうと小学生のころの山や川で上級生と遊んだ記憶になる。今は川で遊ぶ子も見ないし、山へ虫捕りにもそんなに普段はいかないようなので、ＰＴＡ等の活動の中で自分が経験したことを、今の子達にも経験させたいと思う。
・自然界の山や川にいる生もの（小動物、魚、植物）に配慮した開発、保全を強く望む。人に都合の良い環境づくりとバランスの取れるように。昔の味は一生忘れないこと。
・川の水が少しきれいになると良い。川遊びが出来ると子供達も楽しいだろう。

地域との関わり

地域内でのコミュニケーションが減った。近所の繋がりがなくなりつつある。

・年々地域のなかに空き家が多くなりました。地域の人とのコミュニケーションが大切。高齢者が多くなり、話すことすら難しくなりつつある。
・自然を大切にし、近所とのつながり。近所のつながりは近年無くなっていくように思う。
・宇和盆地の「春夏秋冬」昭和、平成、令和と時代がかかわっても古くから残っている歴史的なものと時代とともに変化していく自然やそこに住む人達とのかかわり。古き良き時代の者を残し未来へつなげる新しい時代への対応。

環境とツル・コウノトリ

コウノトリが来るような環境づくり。いい環境を守っていきたい。

・本趣旨の如く、コウノトリの来る郷への環境づくり。子供、中学、高校生等に働きかけ関心を持つようになってほしい。コウノトリの来る郷は環境が良いのでやってくる。そこに住める私達にもいい郷である。守っていきたい。

（２）まとめ

自然・環境を守っていきたい。今では山や川で遊ぶ子供達が減ってしまった。子供たちが遊べるような自然にしたい。自分たちが経験した山や川遊びを今の子供たちにも体験してもらいたい。ホタルの数が昔と比べてかなり減った。昔の様にホタルがたくさん生息できる川に戻ってほしい。近所や地域での関わりが減り、地域とのつながりが薄れてきている。環境の保全や地域とのつながりを大事にしたい。

西予市ツル・コウノトリと共生するまちづくり計画座談会記録（市役所）

１　日　　時　　令和２年９月 30 日（水）13：30～16：00

２　場　　所　　西予市役所５階　大ホール

３　参 加 者　　市民（石城地区を除く宇和町在住）17 人

スタッフ（進行）	愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科	准教授	渡邉　敬逸
グループリーダー	日本野鳥の会愛媛	代表	松田　久司（1 班）
	（一社）ノヤマカンパニー	代表	加藤　雄也（2 班）
	西予市生活福祉部環境衛生課		源　　琢哉（3 班）
	西予市生活福祉部環境衛生課		兵頭　龍紀（4 班）

４　目　　的　　ふれあい調査の結果の共有、結果のまとめ

５　進め方（概要）

（１）　概要の説明

（２）　ワークショップ

１）ふれあい調査の結果から、共感する意見を各自で選ぶ（20 分）

【班分けと担当したテーマ】

1 班　　「舌になつかしい味」

2 班　　「目に浮かぶ風景」

3 班　　「耳に残る音」

4 班　　「肌によみがえる感触」

１、３班　「これからも大切にしたいふれあい」Ｂ

２、４班　「これからも大切にしたいふれあい」Ａ

２）選んだ意見をグルーピングし、意見交換（20 分）

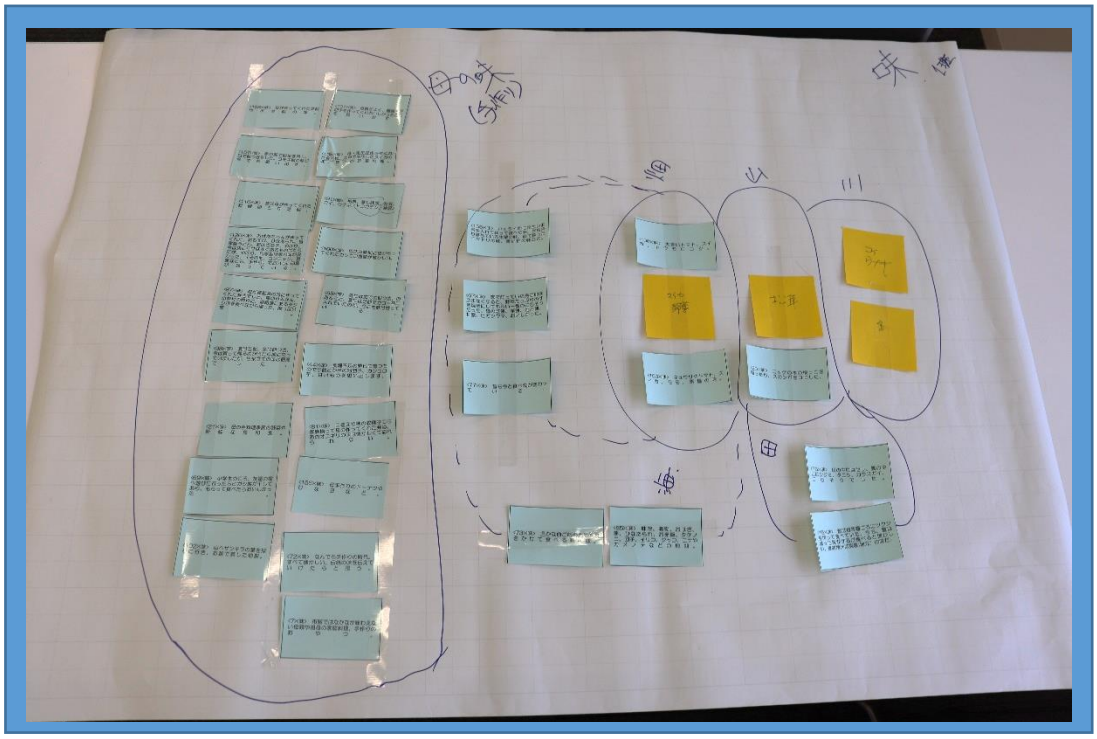
３）発表（10 分）

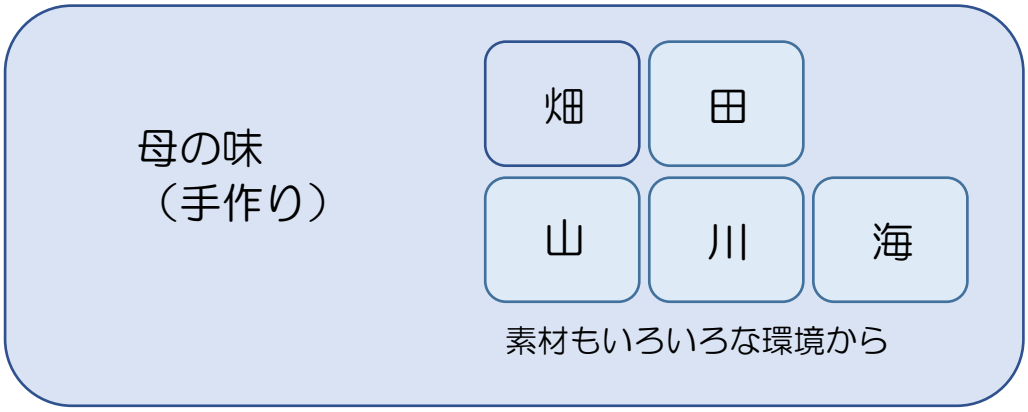
（３）　総括（10 分）

６　ワークショップの結果

１班　舌になつかしい味

（１）　選んだ意見とグループわけ（カテゴリー）





母の味（手作り）

158：芝餅、ボタ餅

157：餅つき、ヨモギ餅

116：手作りのお饅頭や芝餅

126：祖母が作ってくれた「おむすび」、ひなあられ、自家製うどん、おはぎ、他にコンニ

ャク、豆腐も
87：運動会の時の巻きずし、道端のタシツボ(イタドリ？)
98：芝餅、餅つき
21：母の手料理・季節の野菜・新鮮な魚和食
69：ヒガシ餅
102：さんきらの葉を採りに行き芝餅を作る
101：手作りの饅頭や団子
138：手作りの食べもの、スイカ、野菜料理
91：芝餅、蒸し饅頭、松茸、コイ、ウナギ、トコロテン、納豆
100：カンコロ饅頭
65：餅つき・芝餅
44：芋飴・芋の粉団子・カンコロ芋
81：農作業時のおにぎり
156：手作りドーナツ、ひな豆
72：手作りの食べもの
7：母親や祖母の家庭料理・手作りおやつ
67：芝餅、芋餅、牡丹餅、甘藷、ヒガシヤマ
85：味噌、漬物、おはぎ、餅、ひなあられ、お赤飯、タケノコ、団子、イリコ、ジャコ、ニナ、カメノテ
77：食べるものが昔と変わってきている

畑

106：トマト、スイカ、トウモロコシ
138：スイカ、野菜
153：キュウリやトマト、スイカ、モモ、そうめん
155：ハッタイ粉に冷たいお茶を入れて練ったもの、生栗、イタドリ，青い柿
67：鶏と野菜たっぷりのすき焼き

田

15：つくし・麦味噌汁

山

91：松茸
20：ニッケ、スカンポ

川

76：セリ、シジミ、タニシ、カラスガイ
91：コイ、ウナギ

海

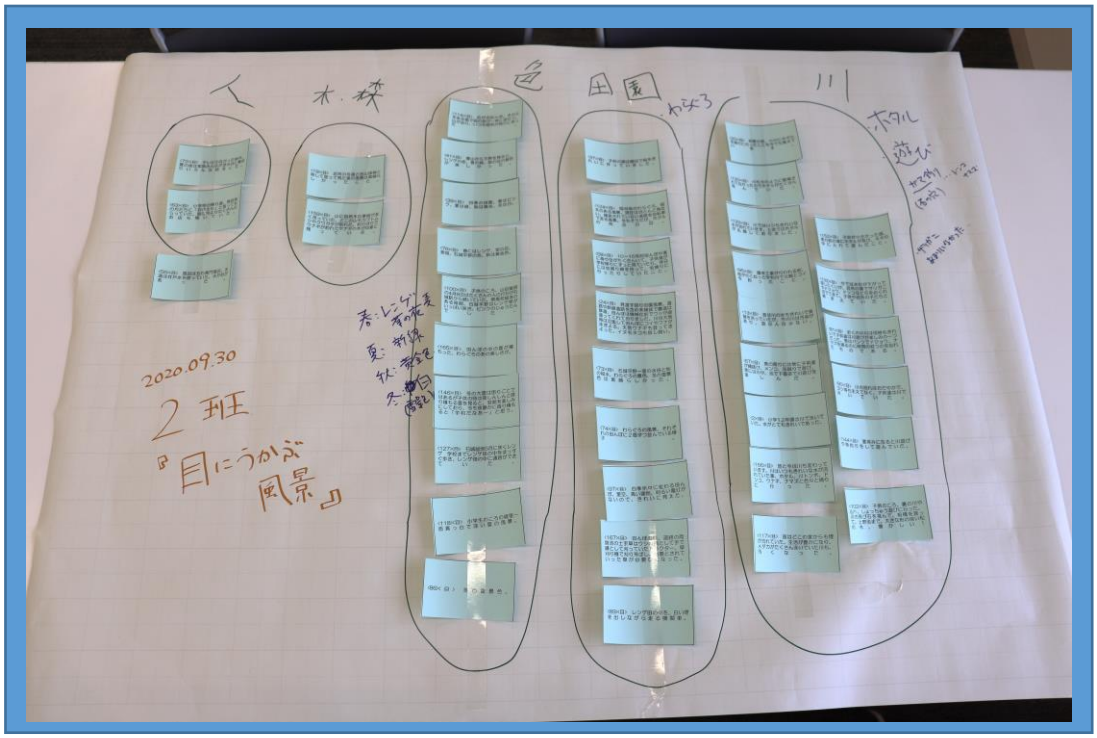
85：イリコ、ジャコ、ニナ、カメノテ

（2）まとめ

共感できると選ばれたものは、ほぼ母や祖母の手作りのものであった。しかしそこであがっている素材は、色々な環境からの恵みがあがっていた。

２班　目に浮かぶ風景

（1）　選んだ意見とグループわけ（カテゴリー）



田園風景

色

山・森

人

川

田園風景

田んぼにまつわる思い出。昔は山あいの狭い土地でも田んぼを作っていた。田んぼは生き物がいて、子供たちの遊び場だった。そしてわらぐろが田んぼに 2 個ずつ並んでいた。牛の餌などの需要がなくなったので、わらぐろは数が減った。

・子供のころは棚田で稲をきれいに作っていました。
・稲刈り後のわらぐろ、稲木のある風景。現在はほとんど見ない。舗装されていない道路を自転車で走る風景。今もそうだが、ホタルの飛ぶ川辺。
・10～15 年前田んぼや溝に魚や虫がたくさんいて、子供たちが学校帰りにずっと見ていたり、休日には虫捕り網を持って、虫捕りに行ったりしていたこと。
・見渡す限り田園風景。道路や幹線道路を含め未舗装で農道は草道、田んぼは機械化前で牛が頑張ってくれておりました。川は大雨時は氾濫して田んぼにコイやフナが泳ぎよる。天然ウナギも登ってきよった。犬や猫も放し飼い。
・石城平野一面の水田と秋の稲水、わらぐろの景色、冬の雪景色は素晴らしかった。
・わらぐろの風景、それぞれの田んぼに２個ずつ並んでいる様子。
・四季折々に変わる田んぼ、星空。高い建物、明るい電灯がないので、きれいに見えた。
・田んぼの畔、道路の両側、池の土手の草は、ウシの餌として手で鎌で刈っていた。今はトラクター、草刈り機で刈り飛ばし。必要とされていた草が必要なくなった。
・レンゲ田の中を、白い煙を出しながら走る機関車。

山、森

盆地の周囲の山にも遊びに行った。山は植林地ばかりでなく、広葉樹の森もあり、昆虫を捕った。山に登って見た星空が素晴らしかった。

・近所の友達と岩山探検と称して登って見た星の風景は素晴らしかったこと。
・山に自然木、広葉樹が多く茂っていた。どこの山もカブトムシやクワガタが取れた。釣り針でウナギが釣れたヤナギの木が印象に残っている。

川

川にまつわる思い出として、ホタルと遊びに関するものが多く挙がった。川の水がいつもきれいで、生きものも豊富だった。河川が改修される前の方が生きものは多かったという印象がある。

・初夏の夜、小川にホタルを捕りに行ったことを今でも覚えています。
・川も今のように整備されてなかったのでホタルがたくさん飛んでいた。
・川ではいつもきれいな水が流れています。上流ではホタルが乱舞しておりました。
・護岸工事が行われる前、曲がりくねった宇和川で父親とコイを釣ったこと。
・昔は川の水もきれいで食器を洗っていたが、今の川は汚染があり、遊ぶ人は少ない。
・家の周りには常に子供たちが縄跳び、メンコ、缶蹴りで遊び、夏には川や池で下着姿で川遊びを楽しんだ。
・小学１，２年頃は川で泳いでいた。水がとてもきれいであった。

・昔と今は川も変わっています。川はいつもきれいな水が流れていたこと。ホタル、川トンボ、ドンコ、ウナギ、ナマズと色々と捕りに行った。
・昔はどこの家からも煙が流れていた。生活が豊かになり、メダカがたくさん泳いでいた川も汚くなった。
・子どもが小さかった頃、家の前の溝にホタルが飛び、ネギの中に入れて遊んだこと。
・今では水位が下がって探しにくいが、近所の溝でザリガニやドジョウ、ドンコなど石をめくれば出てきて、子供や近所の子たちとつかまえていた。
・近くの小川は何時もきれいで子供たちは川遊びが楽しみの一つだった。男はパンツでドジョウ、ナマズを捕るのに時間が経つのを忘れたものである。
・川の流れはおだやかで、ヨシ等も生えてなく、子供たちは川で泳いでいた。
・夏休みになると川遊びや魚釣りをして遊んでいた。
・子供のころ、裏の川や山へしょっちゅう遊びに行った。川の飛び石を飛んで、板橋を渡って上の池まで。大きな形の良い松の木、懐かしい！

〇その他の意見

・川でガマ釣りが楽しかった。石の穴に手を突っ込んでドンコやナマズを捕った。
・ザリガニは昔はあまりいなかった。ザリガニ釣りをした思い出を持つのは、今の 40 代前半から下の世代ではないか。

色

石城盆地一帯の、四季の色の移り変わりは印象に残っている。春はレンゲや菜の花、麦、夏は新緑、秋は稲穂の黄金色、冬は雪景色の白、と色彩の豊かさがあった。

・広がる田んぼ、その上を走る風で稲の苗が一斉に波打つ。山が迫り、いつも緑色が周りにあった。
・春山から下界を見ると、レンゲの赤、夏の緑、菜の花の黄色が美しかった。
・四季の田園、春はピンク、夏は緑、秋は黄金、冬は白。
・春にはレンゲ、菜の花、麦畑、石城平野の色。秋は黄金色。
・子供のころ、山田薬師の 4 月 8 日はたくさんの人の行列が石城駅から続いていた。県高校総体のある時期、石城平野はレンゲソウがいっぱい咲き、ピンクのじゅうたんでした。
・田んぼの中の雪が積もった、わらぐろのあの美しさが。
・冬の大雪は困りごとではあるが、子供のときは夜しんしんと降り積もる雪を見ると、翌朝を楽しみにしており、今も夜静かに降り積もると「宇和だなぁ～」と思う。
・石城盆地 5 月に咲くレンゲ。学校までレンゲ田の中をまっすぐ歩き、レンゲ畑の中に通路ができていた。
・小学生の頃の綾里一面　真っ白で深い雪の風景
・冬の雪景色

人

家族との思い出や、地域の人から声をかけてもらった記憶、五右衛門風呂など。今はなくなってしまった風景。

・テレビのなかった時代、夏の夜は家族みんなが涼み台に集まりいろんな話をした。
・小学校の帰り道、商店街の方たちに「おかえり」と言ってもらっていた。昔は今よりたくさんのお店も開いていた。
・風呂は五右衛門風呂。水道は井戸水を使っていた。水がめがあった。

（2）まとめ

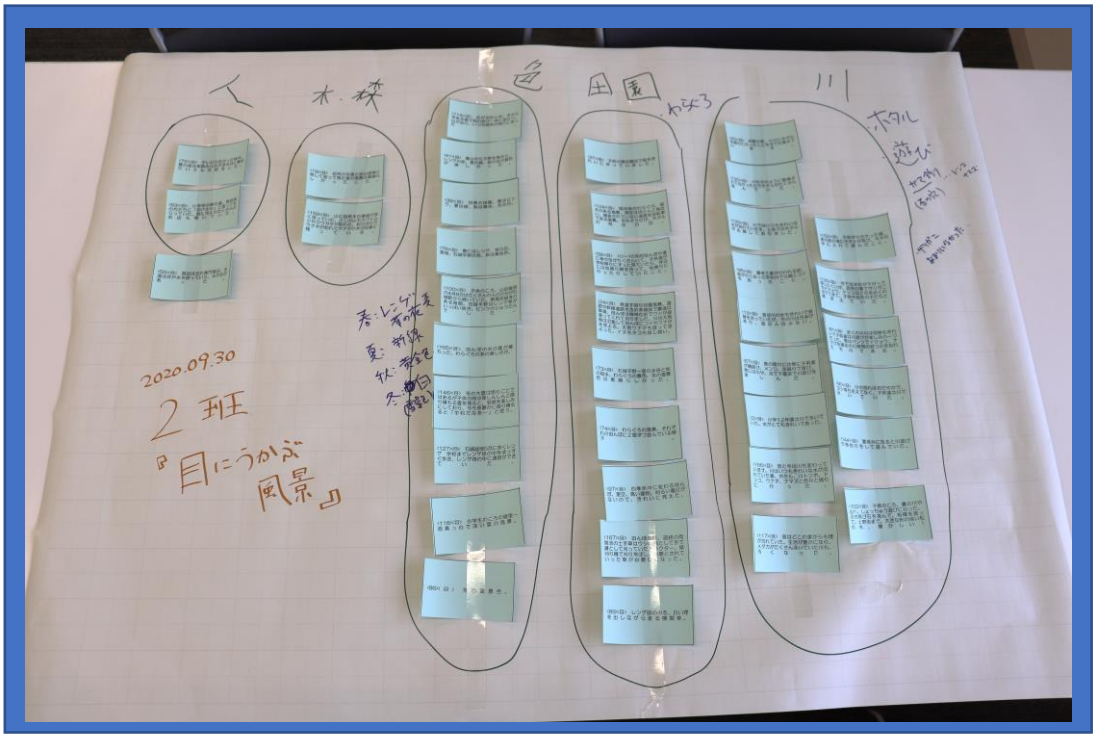
昔は山あいの狭い土地でも田んぼを作っていた。田んぼは生き物がいて、子供たちの遊び場だった。そしてわらぐろの数は今よりもずっと多く、田んぼに 2 個ずつ並んでいた。田園風景の四季折々の色の移り変わりも印象に残っている。春はレンゲ（ピンク）や菜の花（黄色）、麦（淡い緑）、夏は新緑、秋は稲穂の黄金色、冬は雪景色の白、と色彩の豊かさがあった。

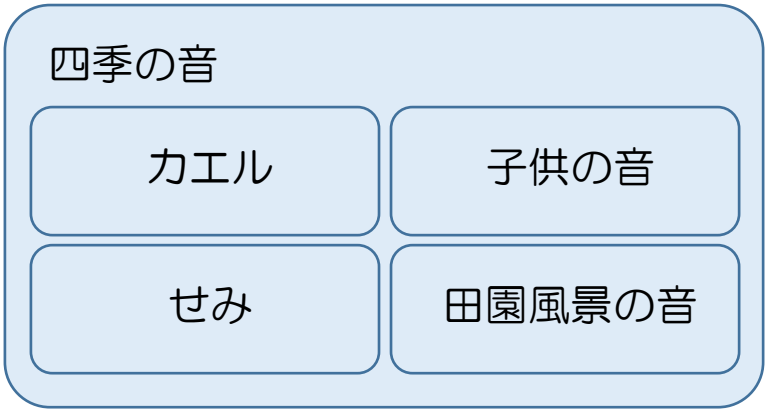
田んぼの間を流れる川にまつわる思い出として、ホタルと遊びに関するものが多く挙がった。川の水がいつもきれいで、生きものも豊富だった。河川が改修される前の方が生きものは多かったという印象がある。盆地の周囲の山も遊び場だった。山は植林地ばかりでなく、広葉樹の森もあり、昆虫を捕った。山に登って見た星空が素晴らしかった。

生活様式の変化や人口減少によって、暮らしの風景も変わってきた。家族同士のコミュニケーションや地域の方とのふれ合いは昔に比べて少なくなっていて、寂しく感じる。

３班　耳に残る音

（１）　選んだ意見とグループわけ（カテゴリー）





四季の音

　後に囲んだワード、「カエル」「子供の声」「せみ」「田園風景の音」が複雑にからんで構成されている四季の音

・ウシ、鳥、カエル、セミなどの鳴き声。

・田園地帯を散歩していると、周囲からはウグイス、セミ、カエルなど様々な鳴き声が聞こえ、それが季節によって違っているから四季を感じている。
・春にネコヤナギが咲いていた。溝に流れる水音、虫の音、魚売りの声、ニワトリ、ヤギの鳴き声

カエル

カエルの鳴き声は、故郷の音として耳に残っている。

・カエルの鳴き声が喧しいくらいでした。
・カエル
・初夏のカエルの夜の音声

子供の声

昔は子供の声が良く聞こえていました。

・子供も多くどの家からも声が聞こえていた。
・子供が多くて、みんなで遊ぶ声が毎日していました。今はそれもないですね。

せみ

時期によって違う色々なセミの声が聞こえる。

・夏のセミの声、秋のスズムシの鳴き声など生き物が季節を感じさせてくれたこと。
・とってもうるさいくらいのゲロゲロというカエルの無き声ミンミンとセミの声
・夏休みは、セミの声がなつかしく感じます。
・夏はニイニイゼミの鳴き声から始まりひぐらしの声で夏を終えた。
・せみの鳴き声
・セミやヒグラシの音で夏という季節を感じられる。
・嫁いだころから春にはウグイスが、夏はセミ、季節の移ろいを感ずる。

田園風景の音

田んぼを渡る風の音、草刈りをしている音、虫の声や、用水路の水の流れる音、様々な音が田園風景の音

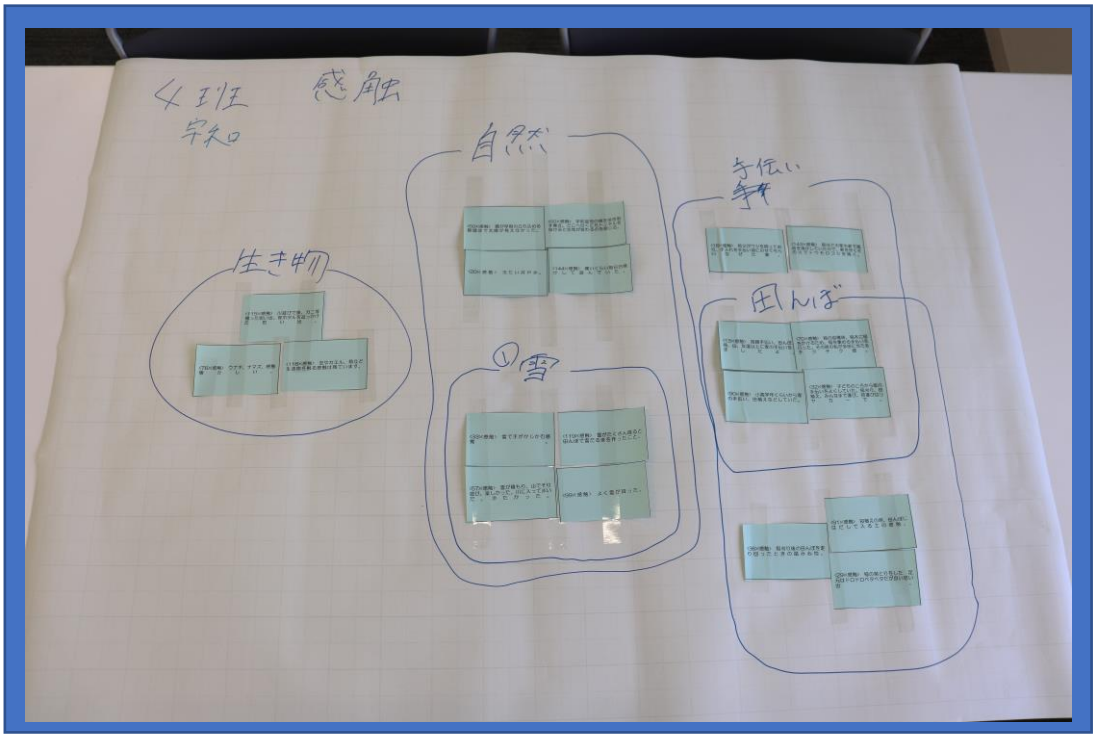
・田んぼを渡る風と稲の揺れる音。西予らしい音だと思います。
・草刈りしている音、スズムシやセミの鳴いている音、水の流れる川や田んぼの音
・夏のけたたましいセミの声。コンバインで稲刈りとるとき、束ねられた稲がガタンガタンと一つずつ束ねられる音
・田んぼの畦道を歩いているときの、用水路の水の流れる音、川のせせらぎ

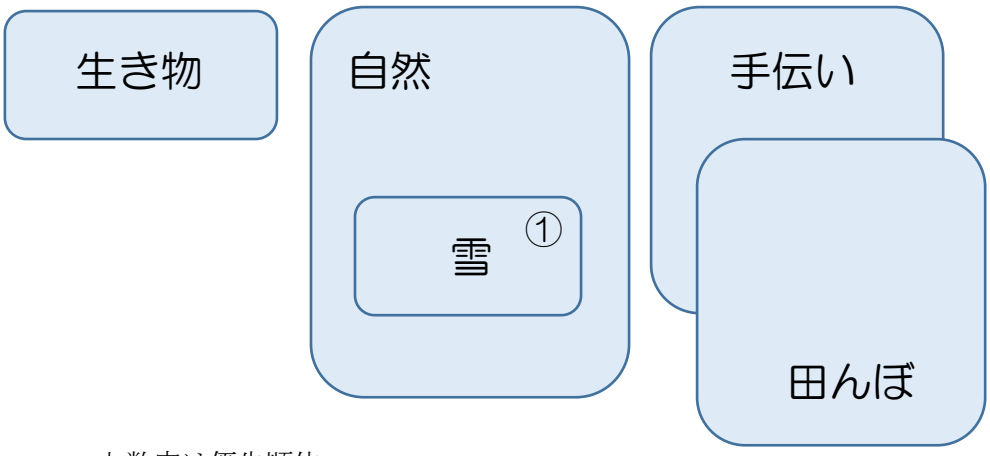
（2）まとめ

耳に残る音は、カエル、セミの鳴き声や、子供の声、田園風景の音などが挙げられています。それらは四季によって変化する音であり、豊かな自然環境によって醸し出されているものです。

４班　肌によみがえる感触

（１）　選んだ意見とグループわけ（カテゴリー）





丸数字は優先順位。

自然

冬はとても寒かった。雪の降り積もる中、登下校していた。自然とのたくさんのふれあいがあった。

・霧が早朝立ち込め、昼頃まで太陽が見えなかった。
・宇和盆地の頬を突き刺す寒さ。どこへ行くにもトンネルを抜けると空気が変わるのを感じた。
・冷たい井戸水
・痛いくらい毎日日焼けして遊んでいた。
・雪で手がかじかむ感覚
・雪がたくさん降ると田んぼで雪だるまをたくさん作ったこと。
・雪が積もり、山でそり遊び。楽しかった。川に入って泳いだ。冷たかった。
・よく雪が降った。

手伝い

手伝いすることが当たり前。田んぼの手伝いは印象が強い。風呂を沸かすために薪割りをしていた。

・祖父がウシを飼っており、手入れを手伝い背にのせてもらいなぜた事。
・昔はどの家も蒔で風呂を沸かしていたので、薪を焚くその火でトウモロコシを焼く。
・両親の手伝い、田んぼ、畑、山、友達以上に家の手伝いをしましたよ。
・稲の収穫時、稲木に稲をかけるため、稲を集める手伝いを行った。その時の私が多田に当たるチクチク感。
・小高学年くらいから家の手伝い、田植えなどをしていた。
・子どものころから家の手伝いをよくしていた。稲刈り、田植え、みんな手で運び、荷運びはリヤカーで。

田んぼ

手伝いをよくしていた。田植えの泥、稲刈りのチクチクした感触はよく覚えている。

・両親の手伝い、田んぼ、畑、山、友達以上に家の手伝いをしましたよ。
・稲の収穫時、稲木に稲をかけるため、稲を集める手伝いを行った。その時の肌に当たるチクチク感
・小高学年くらいから家の手伝い、田植えなどをしていた。
・子どものころから家の手伝いをよくしていた。稲刈り、田植え、みんな手で運び、荷運びはリヤカーで。
・稲刈り後の田んぼを走り回ったときの踏み心地
・田植えの時、田んぼにはだしで入る土の感触
・稲の苗とりをした。足元はドロドロベタベタだが良い思い出

生き物

川で魚やカニを仕掛けや素手で捕まえたりしていた。生き物を素手で触る感触。

・川遊びで魚、カニ等取った思い出。夜ホタルを追っかけた思い出

・ウナギ、ナマズ、感触懐かしい。

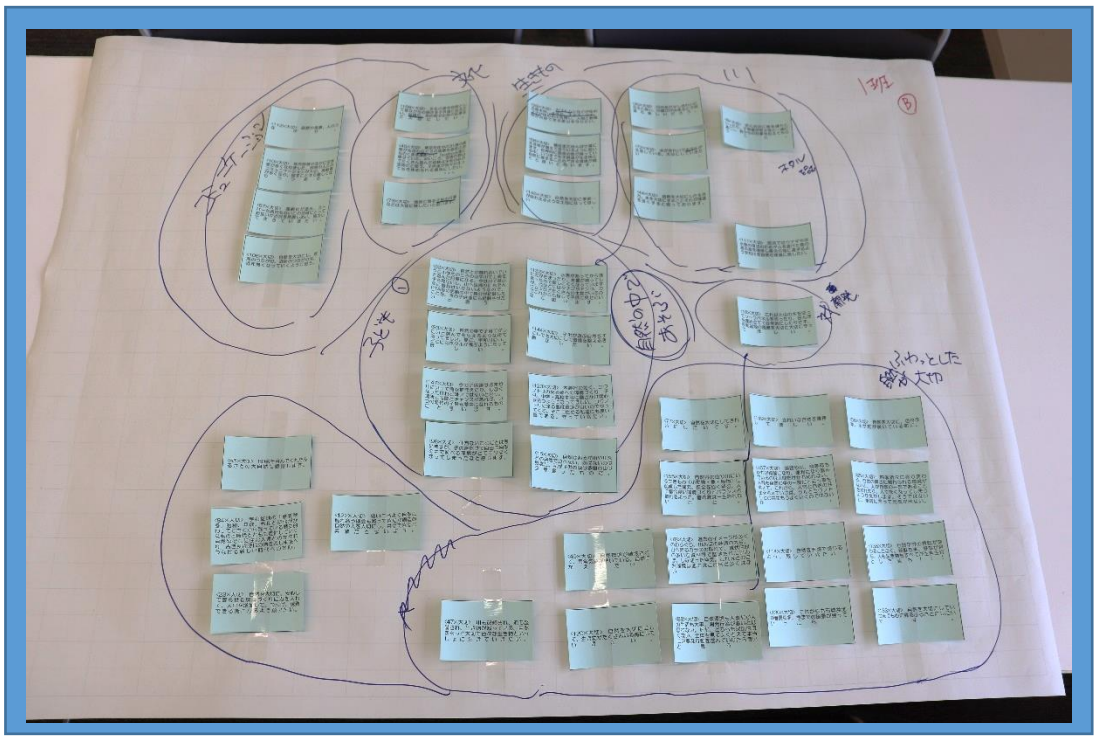
・虫やカエル、魚など生き物を触る感触は残っています。

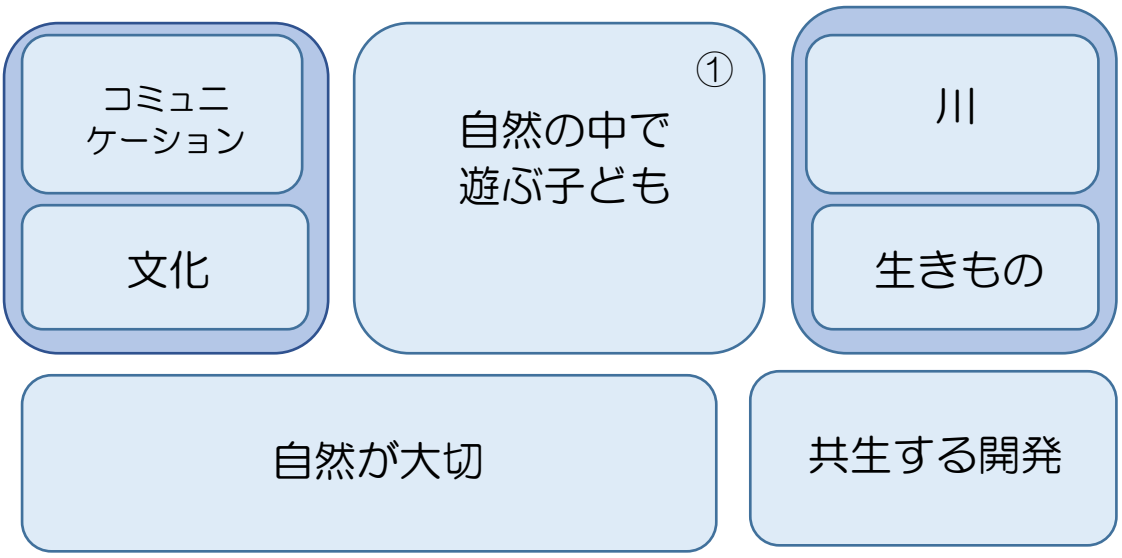
（２）まとめ

宇和盆地の寒くて肌に突き刺さるような感触。昔と比べ雪の量や積もる回数は減った。大雪の中、登下校しており、足が雪で痛くなる感触。冷たい川で泳いだ感触。田んぼについては、田植えの時の泥の感触や稲刈りのチクチクした感触という意見が多かった。山や川で生き物を捕まえた。素手で捕まえていた。自然に関する感触が多い。子供の頃に触れたものの感触は今でも覚えている。自然や生き物とのふれあいを大事にしてほしい。

１班　これからも大切にしたいふれあい　B

（１）選んだ意見とグループわけ（カテゴリー）





丸数字は優先順位。

コミュニケーション

10：コミュニケーションが大切
112：自然や風景、人のつながり
67：地域でお互い協力する
106：自然を大切にし、近所のつながり

文化

158：文化の里宇和町として子供達に伝えたい
45：わらぐろ、幼いころの野山で遊んだ経験
73：子供の行事は大切に残す

川(ホタルを含む)

30：水がきれいになって、子供達が川遊びできるように
72：ホタル
44：自然を大切にした生き方
8：川で魚とり、祖父母から子供達へ昔からの行事の伝承
111：ウナギやその他淡水魚の復活

生きもの

39：カブトムシのいる雑木林、メダカ・ナマズ・コイ・フナがすめる川、人間と動植物が共生する里山
58：いつまでも子供達が生きものと自然に接することのできる環境
145：自然を大切にし、季節を味わえる

自然が大切

56：色々な草、木が花が咲いている町に

85：自然に触れられる環境、人も自然の一部

138：新鮮な米・野菜が育ち、人も生きものも生き生きしたまち

133：心に残る故郷にしたい

149：きれいな自然を維持

167：人間も自然の中の一部だと考え、人間と自然の共生

114：自然を五感で感じ、残していきたい

130：春夏秋冬、今までの風景が残っていってほしい

77：自然を大切に

155：生きものに配慮した開発・保全。人に都合のいい環境づくりとのバランス、昔の味

78：わらぐろ、畔での大豆、カラス類のねぐら入り、石城平野の田んぼ、澄んだ空気

88：自然も人の生活も大切

49：自然に帰りたい

120：生きものがたくさんいる街

47：自然を大切にし、色々な生きものといっしょに生きていく

122：周辺の自然や人を大切にし、共存できると素敵

55：大自然に感謝

84：古き良き時代を残し、未来へつなげる新しい時代への対応

23：自然を大切に、安心して暮らせる環境づくり

共生する開発

18：山のソーラーパネルや田んぼの宅地化をせず、宇和盆地の風景を大切に

子ども

52：PTA 等の活動で子供達に自然との触れあい体験をしてほしい

93：子育てしたいと思える街に、ホタル

147：子供達が自然と触れ合えるチャンス

98：子供達だけで自然の中で遊べる環境

132：タナゴ・ドンコ・カワムツなどたくさんの生きものを子供たちに見せたい

144：子供が遊ぶ自然を残こす

123：コウノトリの来る郷づくり、生徒学生に働きかけ関心を持ってほしい、コウノトリが来る郷は環境がいいところ

15：山や川などで遊べない

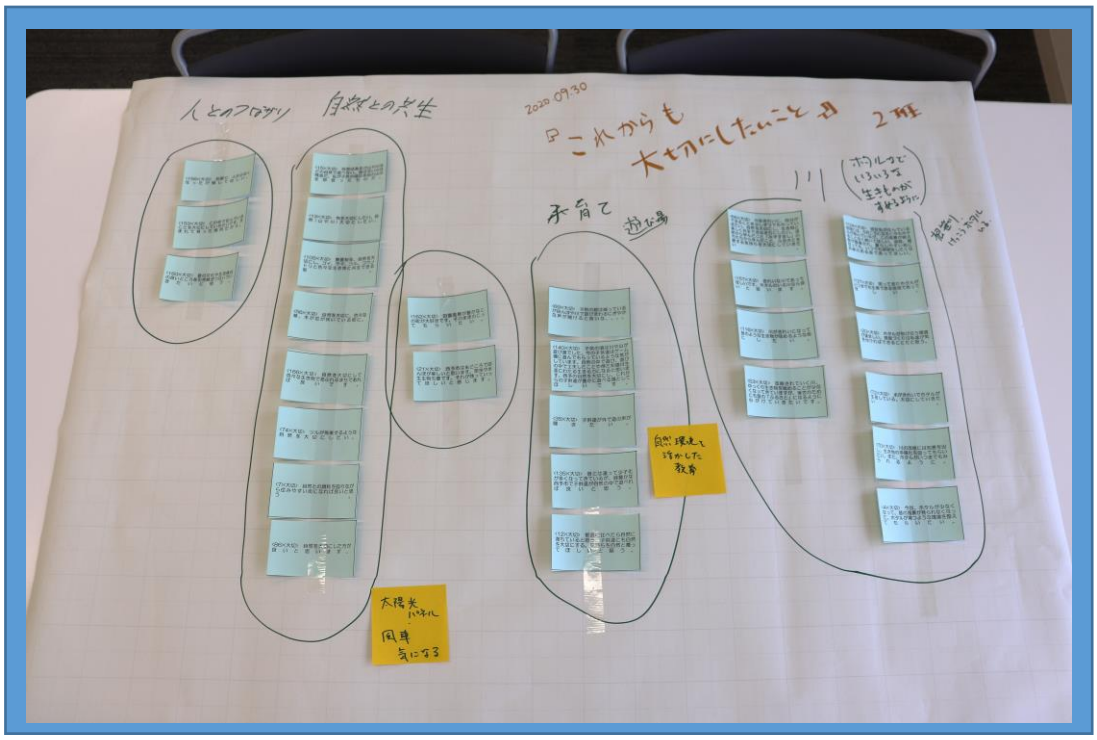
（2）まとめ

地域のコミュニケーションのためにも伝承文化を大切にし、これまで共生してきた身近

な自然や生きものを大切にして、開発行為もそれらと共生できるものにして、自然のなかで子どもたちが生き生きと遊べる環境を残していく。

２班　これからも大切にしたいふれあい　A

（１）　選んだ意見とグループわけ（カテゴリー）



川

子育て・遊び場

自然との共生

人とのつながり

川

ホタルなどいろいろな生き物が住めるような川を望んでいる。今もホタルが飛ぶところがあるが、昔に比べると数が少なくなった。

・川をきれいに、自分ができることを少しずつでもやっていきたい。自然を大切にし、生き物と楽しく共生できるまちにしたい。渓筋から学んだこと「みずすまし」の方たちから学んだこと、ふるさとを愛する気持ちを大切にしていきたい。
・きれいな川であってほしいです。ホタルのいる川なら良いと思います。
・川がきれいになって昔のような生きものが住めるような街にしたい。
・改修されていく川、ゆっくり生き物を眺めることが少なくなってきていますが、後世のためにも昔の「ふるさと」になるように心がけていきたいです。
・現在私が住んでいる地域には、5月ごろになると今もホタルが飛んでいるが、この風景が絶えることなく続いてほしい。道路、建物が整備され、暮らしやすい街になっても、いつでも深呼吸したくなる緑のある街であってほしい。
・戻ってきたホタルがいつまでも生育できる地域であってほしい。
・ホタルが飛び交う環境が望ましい。環境づくりは私たちが気を付ければできることだと思う。
・水がきれいでホタルが生息している。大切にしていきたい。
・川の改修には知恵を出し、生き物の多様化を図ってもらいたい。また、ホタルがいつまでも見られるように。
・今はホタルが少なくなって、昔の風景が見られなくなった。ホタルが育つような環境を整えてもらいたい。

〇その他の意見

・根笹川は今も結構ホタルがいる。

子育て、遊び場

子供達にはもっと自然の中で遊んでほしい。そのために、子どもたちが自然の中でのびのびと遊べる環境を残したい。自然の中で遊ぶことによって、自然を大切にする気持ちが次世代に受け継がれる。

・子供の数は減っているが田んぼや川で遊びまわるにぎやかな声が聞けると良いな…
・子供の頃は川や山が遊び場でした。今の子供達はゲーム機に遊んでもらっているような気がしています。自然の中で遊び、遊びの中で工夫したことや得た知識は生涯にわたる生きる力になると思います。西予の自然を大切にし、これからの子供達が豊かに遊べる場としてほしいです。
・子供達が外で遊ぶ声が聞きたい。
・昔とは違って少子化が多くなってきているが、緑豊かな西予市で子供達が自然の中で遊べれば良いと思う。

・都会に比べたら自然に満ちていると思う。子供達にも自然を大切にする気持ちを自然と養ってほしいと願う。

〇その他の意見

・自然環境を生かした教育を西予市はもっとするべきだ。

自然との共生

自然を大切に、いろいろな生き物が住めるまちにしていきたい。田園風景を大切にしていきたい。

・自然はあるが山や川などの自然で遊べない、遊ばないのは残念だ。私が子供の頃はただの山は全部登ったものだ。

・物を大切にしたい。自然（山や川）大切にしたい。

・春夏秋冬、自然を大切にし、コイ、サギ、ツル、コウノトリと色々な生き物と共生できる街。

・自然を大切に、色々な草、木の花が咲いている町に。

・自然を大切にして色々な生き物であふれるまちであればよいです。

・ツルが飛来するような自然を大切にしたい。

・自然との調和を図りながら住みやすい街になればよいと思う。

・自然を大切にした方が良いと思います。

・田園風景が豊かなこの町が大好きです。そのまま残ってもらいたい。

・西予市は米どころで田んぼが美しいと思います。昆虫や水生生物も豊かです。それが残っていってほしいと感じます。

〇その他の意見

・太陽光パネルの増加や風力発電の風車が気になっている。

人とのつながり

ふるさとの文化や生活様式の良いところを守っていきたい。

・お祭り。人は少なくなったが残してほしい。

・この町で住んでいることを大切にしていきたいです。生まれて育った場所だから。

・昔の文化や生活様式の良いところを引き継ぎつないでいきたいと思う。

（2）まとめ

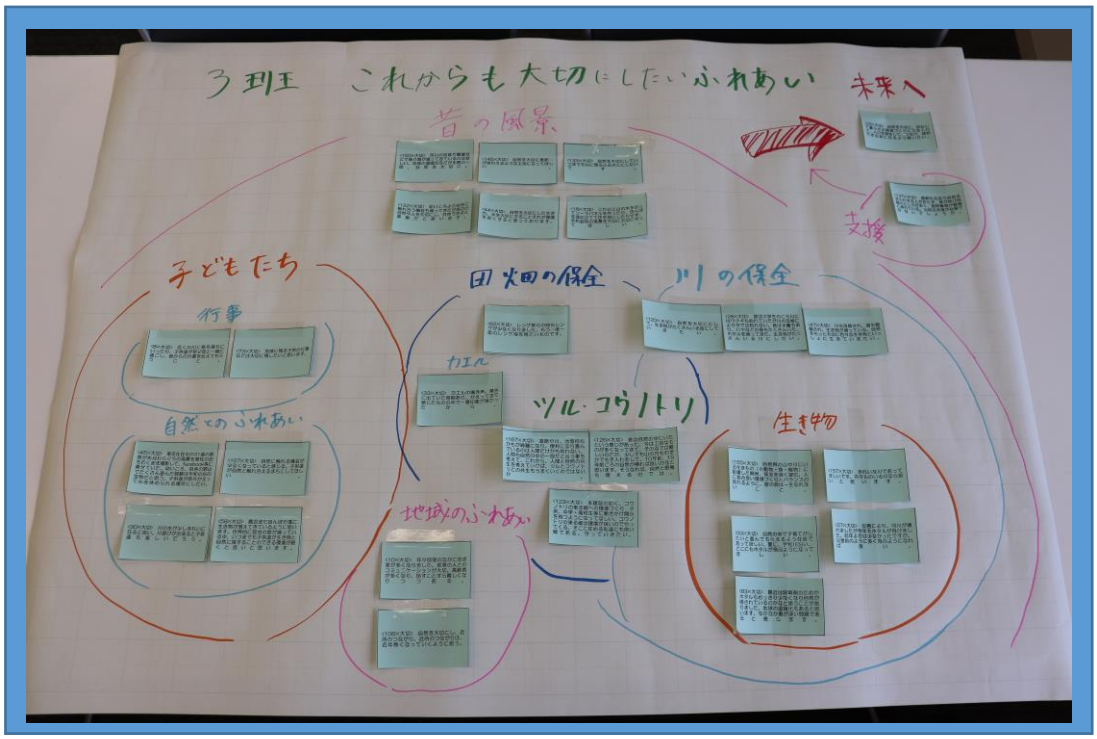
自然を大切に、いろいろな生き物が住めるまちにしていきたい。田園風景を大切にしていきたい。その柱となるのが川の保全。ホタルなどいろいろな生き物が住めるような川を望んでいる。今もホタルが飛ぶところがあるが、昔に比べると数が少なくなった。ツルやコウノトリを水辺の環境保全のシンボルとして守っていってはどうか。

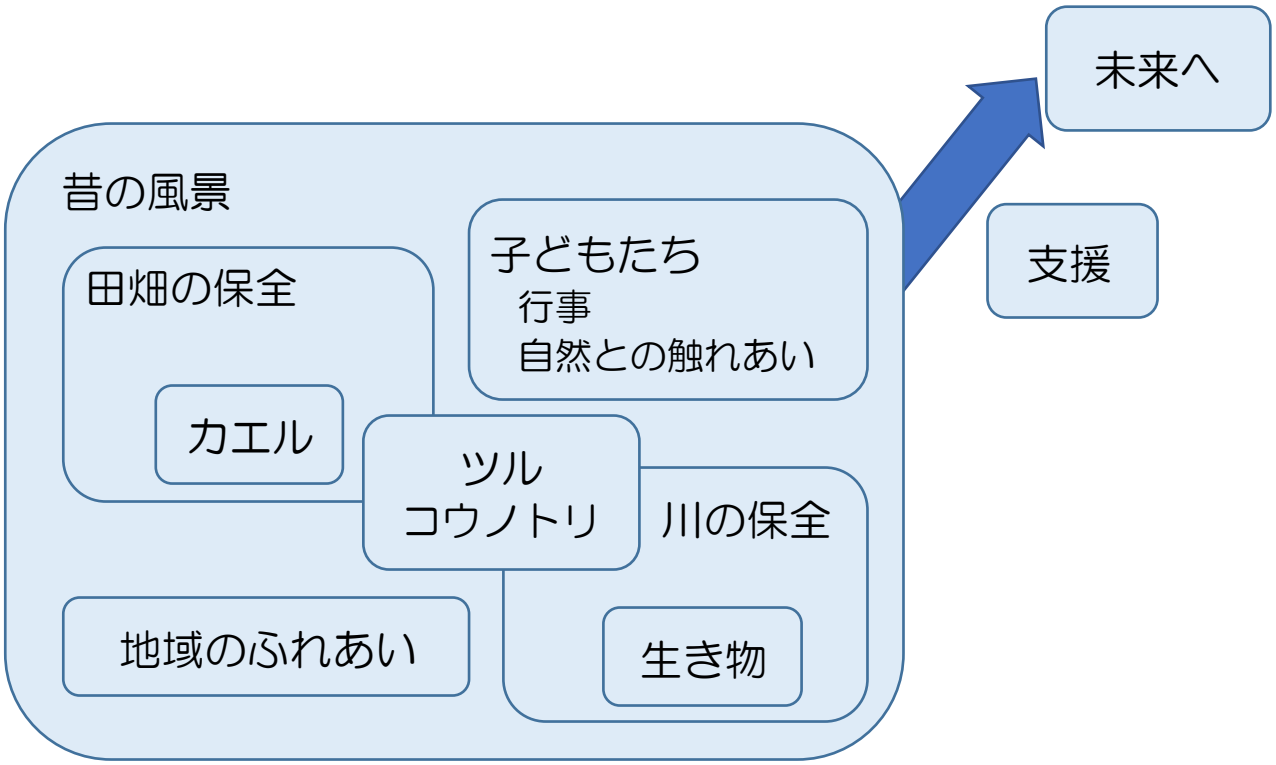
自然を守る目的としては、子供達の遊び場、育ちの場としての環境を保つという意味合いも強い。子供達にはもっと自然の中で遊び、生きる力を育んでほしい。そのために、子どもたちが自然の中でのびのびと遊べる環境を残したい。豊かな自然の中で遊びながら、

ふるさとの自然や文化を大切にする気持ちを次世代に受け継いでいきたい。

３班　これからも大切にしたいふれあい　B

（１）　選んだ意見とグループわけ（カテゴリー）





昔の風景

後に囲んだワード、「子どもたち」「田畑の保全」「川の保全」「ツル・コウノトリ」「カエル」「生き物」「地域のふれあい」が複雑にからんで構成されている風景

・河川の改修や農薬などで魚介類が減ってきているのは寂しい。地球の温暖化などが水害の一因、自然を大切に。

・自然を大切に季節…が味わえるような土地になってほしい。

・自然を大切にしていつまでも心に残るふるさとにしたいです。

・幼いころより自然に触れ合う機会も減ってきたが周辺の自然や人を大切にし、共存できると素敵だと思います。

・自然を大切にした生き方。水を大切にすることそれが環境を良くすると思っております。

・これ以上山の木を切ってソーラーパネルを作ったり、田んぼを埋め立てて住宅地にしたりせず、宇和盆地の風景を大切に守ってほしい。

川の保全

川は色々な生き物の生息場所であり、それらは大切にしていきたい。

・自然を大切にして、生き物がたくさんいる街にしていきたい。

・昔は小学生のころ川にはウナギもつれていたが川の改修により今では釣れない。昔は水量もあり、ハヤなどの魚もたくさんいた。ホタルも減ってきた。生き物がたくさんいる川にしたい。

・川も改修され、道も整備され、生き物が減ってきている。自然をもっと大切に色々な生き物といっしょに生きていきたい。

生き物

ホタル、魚、小動物、植物など様々な生き物が多くいるようになってほしい。

・自然界の山や川にいる生きもの（小動物・魚・植物）に配慮した開発、保全を強く望む。人に都合の良い環境づくりとバランスの取れるように。昔の味は一生忘れないこと。

・きれいな川であってほしいです。ホタルのいる川なら良いと思います。

・自然の中で子育てがしたいと選んでもらえるような街であってほしい。夏に、宇和川沿い、どこにもホタルが飛ぶようになってほしい。

・災害により、河川が壊れましたが今年おホタルが飛びました。前年よりは少なかったですが。災害前のように多く飛ぶようになればよい。

・最近は除草剤のためかホタルもめっきり少なくなり自然が侵されているのかなと思うことがありました。地球の温暖化もあると思います。なかなか奥が深い問題であると感じます。

田畑の保全

レンゲの花も少なくなってきた。

・レンゲ祭りの時もレンゲが少なくなりました。もう一度一面のレンゲ畑を見たいものです。

カエル

カエルの鳴き声が印象に残っている。

・カエルの鳴き声。県外に出ていた時期があり、帰ってきて感じたものの中で一番印象が強かったから。

ツル・コウノトリ

ツル・コウノトリが飛来する環境は人間にも良い環境である。

・道路や川。池等何もかもがきれいになり、便利になり喜んでいるのは人間だけかもしれない。人間も自然の中の一部だと云う事も考えて、これから、人間と自然の共生を考えていけば、ツルとコウノトリとの共生もうまくいくのではないか。

・昔は自然の中にいたという感じがあった。今は人工的なものが多くなってきて、その点では厳しいのだが、少しでも山の方もわずかでも手入れをして、10 年前、15 年前ごろの自然が帰ればよいかなと思います。そうなれば、自然と野鳥も増えるので

・本趣旨のごとく、コウノトリの来る里への環境づくり、子供、中学・高校生等に働きかけ関心を持つようになってほしい。コウノトリの来る郷は環境が良いのでやってくる。そこに住める私達にも良い郷である。守っていきたい。

子どもたち（行事）

子どもたちの昔からの行事は残していきたい。

・近くの川に魚を捕りにいったり、子供達が祖父母と一緒に過ごしたり、昔からの行事を伝えてもらうこと。

・地域に残る子供の行事などは大切に残したいと思います。

子どもたち（自然とのふれあい）

子どもたちが自然とふれあえるように環境にしたい。

・東京在住の３１歳の長男が先月わらぐろの風景を感性のおもむくまま撮影して、facebook 等に載せていた。幼いころ、田舎の野山でさくさん遊んだ経験は宇和の心の宝物だと思う。子供達が時々帰って心を休められる場所にしたい。

・自然に触れる機会が少なくなっていると感じる。子供達が自然と触れ合えるまちにしてほしい。

・川の水が少しきれいになると良い。川遊びが出来ると子供達も楽しいだろう。

・最近まだ田んぼや溝に生き物が増えてきているように思います。世界的に昆虫の数が減っている中、いつまでも子供達が生き物と自然に接することのできる環境が続くと良いと思います。

地域のふれあい

空き家が増え、地域とのつながりも薄くなってきている。

・年々地域の中に空き家が多くなりました。地域の人とのコミュニケーションが大切。高齢者が多くなり、話すことすら難しくなりつつある。
・自然を大切にし、近所のつながり。近所のつながりは、近年無くなっていくように思う。

支援

公的な支援

・高齢化社会で自然を手入れする人がおらず、草が伸び放題のところが多く、限界集落が顕著に表れている。公的な支援が必要ではないでしょうか。

未来へ

自然を大切にすることで地域のコミュニティーの継続を目指したい。

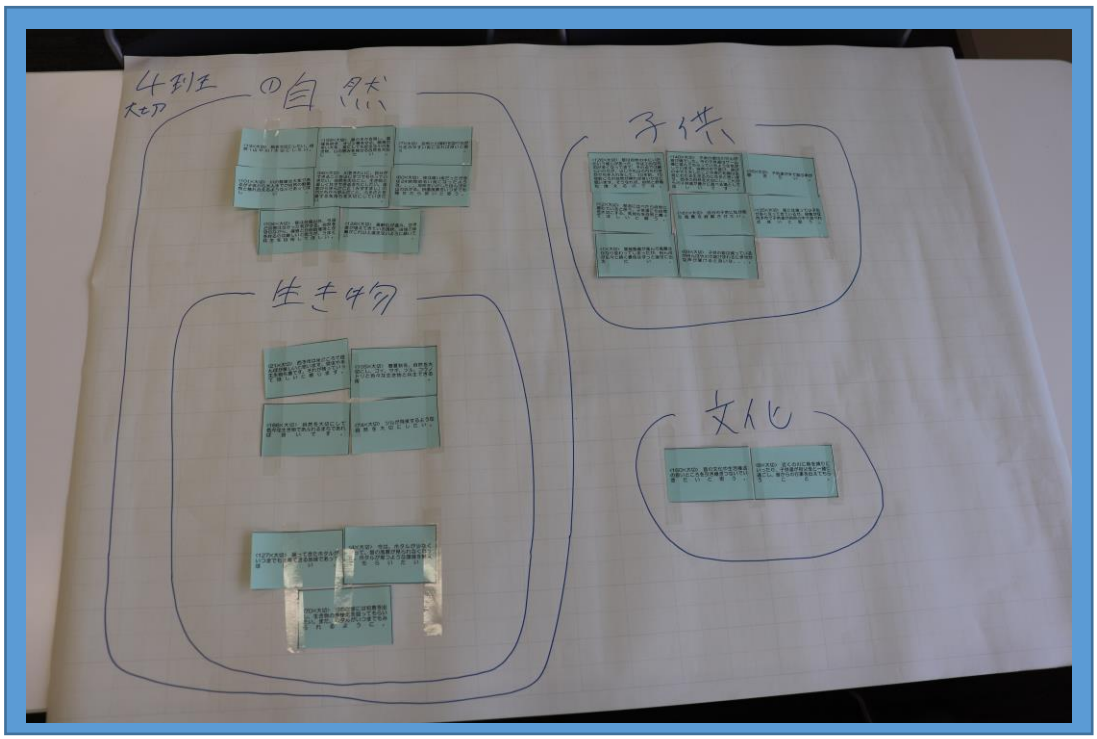
・自然を大切に、安心して暮らせる環境づくりに力を入れて、人口を増加して、つなげ、誘致できる街になるよう願いたい。

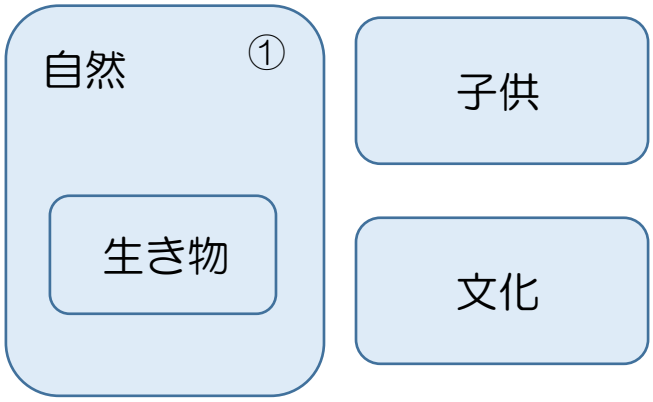
（2）まとめ

田畑、河川を保全することにより、多くの生き物やツル・コウノトリが飛来するようになる。子どもたちも自然とふれあう生活があり、行事も継続できるようにしたい。そのためには、地域のふれあいや行政の支援が必要であり、それらが融合して昔の風景を取り戻しながら未来へ地域コミュニティーを残していけるようになる。

４班　これからも大切にしたいふれあい　A

（1）　選んだ意見とグループわけ（カテゴリー）





丸数字は優先順位。

自然

自然を大切にしていきたい。きれいな川。異常気象や災害が多発にしているので環境が良くなればいい。多様な生き物や安全な食物が育つ自然にしたい。

・物を大切にしたい。自然（山や川）大切にしたい。

・森の木々を残し、温暖化を防ぎ、オゾン層を守る。酸素の多い大気、食にしても安全な川の生き物、山の恵みを残せる自然を大切にしたい。

・自然との調和を図りながら住みやすい街になれば良いと思う。

・川の整備は大変であるが子供から大人までが自然の動植物と触れ合えるような川であってほしい。

・川をきれいに、自分ができることを少しずつでもやっていきたい。自然を大切にし、生き物と楽しく共生できるまちにしたい。渓筋から学んだこと「みずすまし」から学んだこと、ふるさとを愛する気持ちを大切にしていきたい。

・夜は暗い街だったが今は 24 時間明るい街になったような…。地形をいかした田んぼや山の広がる田園風景をいつまでも残せたら良いと思う。

・昔は台風以外、今ほど災害はなかった気がする。自然を守りながら、擁壁とか砂防堰堤とかを作るのは難しいと思うが、うまく共生を目指してほしい。

・高齢化が進み、空き家が増えてきている現状、田畑の後輩がこれ以上進まないように願いたい。

生き物

昔のようにホタルがたくさん飛び交うようになってほしい。昔のようなホタルが飛び交う景色を見たい。ツル・コウノトリなどたくさんの生き物が生息できる地域でいてほしい。

・西予市は米どころで田んぼが美しいと思います。昆虫や水生生物も豊です。それが残っ

ていってほしいと思います。
・春夏秋冬、自然を大切にし、コイ、サギ、ツル、コウノトリと色々な生き物と共生できる街。
・自然を大切にして色々な生き物であふれるまちであれば良いです。
・ツルが飛来するような自然を大切にしたい。
・戻ってきたホタルがいつまでも生息できる地域であってほしい。
・今は、ホタルが少なくなって、昔の風景が見られなくなった。ホタルが育つような環境を整えてもらいたい。
・川の回収には知恵を出し、生き物の多様化を図ってもらいたいたい。また、ホタルがいつまでもみられるように。
〇その場の意見
・河川改修により生き物が減ったという意見もあるが、農薬の量が減ったことにより、場所によっては生き物が増えていると思う。
・外来種（オオクチバス、ブルーギル）により河川に生息する魚や水生生物が減っている。

子供

子供の頃は山や川など自然の中で遊ぶことが当たり前だった。今の子供たちにも自然の中で遊んでもらいたい。これからの子供たちが豊かに遊べる場を残したい。
・昔は自然の中にいたという感じがあった。今は工的なものが多くなってきて、その点では厳しいものだが、少しでも山の方もわずかでも手入れをして、10 年前、15 年前ごろの自然が帰ればいいかなと思います。そうなれば、自然と野鳥も増えるのでは。
・子供の頃は川や山が遊び場でした。今の子供達はゲーム機に遊んでもらっているような気がしています。自然の中で遊び、遊びの中で工夫していたことや得た知識は生涯にわたる生きる力になると思います。西予の自然を大切にし、これからの子供達が豊かに遊べる場としてほしいです。
・子供達が外で遊ぶ声が聞きたい。
・都会に比べたら自然に満ちていると思う。子供達にも自然を大切にする気持ちを自然と養ってほしいと願う。
・自分の子供にも私が見た風景を経験させたい。
・昔と違って少子化が多くなってきているが、緑豊かな西予市で子供達が自然の中で遊べれば良いと思う。
・基盤整備が進んで風景はかなり変わってしまったが、田んぼが広々と続く景色はずっと後世に伝えたい。
・子どもの数は減っているが田んぼや川で遊びまわるにぎやかな声が聞けるといいな…。
〇その場の意見
・最近の子供たちはゲームばかりして外で遊ばないということを聞くが、近所（明間）の

子供たちは毎日のように外で遊んでいて、元気な声が聞こえてくる。

文化

昔の文化や行事、生活様式の良いところを引き継いでいきたい。

・昔の文化や生活様式の良いところを引き継いでいきたいと思う。

・近くの川に魚を獲りにいったり、子供達が祖父母と一緒に過ごし、昔からの行事を伝えてもらうこと。

（2）まとめ

自然を大切にして住みやすいまちづくり。子供から大人までがたくさんの自然と触れ合える環境づくり。様々な水生生物が生息できる河川環境。昔のようにたくさんのホタルが見られる河川になってほしい。自然を守りながら河川改修や減災対策をしてほしい。ツル・コウノトリなどと共生できるまちになればいい。子供たちが安心して遊べる場を残し、自然を大切にする気持ちを養ってもらいたい。現在、昔からの文化や行事はなくなったり、継続していくことで精一杯の状況だったりするところが多い。自然だけでなく、昔の文化や行事、生活様式の良いところを引き継いでいきたい。

資料６．農家アンケートの実施

農家の方の意見を計画に反映させるため、2021 年度にアンケート（調査）を実施しました。その結果のキーとなる言語、関連などを図式化しました。

農家アンケートの概要

- **目的**
  - 本計画の重要な利害関係者である農業者の営農状況やツル・コウノトリとの共生するうえでの課題を明らかにする。
- **実施時期**
  - 2021年8月～10月
- **主な質問項目（自由回答）**
  - 営農上の重要事項・将来の意向・営農上の課題・ツルやコウノトリの飛来に関わる営農上の期待や課題
- **対象者（回答者：112名　回収率：44.4%）**
  - 伊賀上・小原・山田・西山田・岩木・郷内・永長・小野田の80歳未満農業者（経営面積＋貸付≧4,000㎡：231名）および80歳以上農業者（同≧20,000㎡：23名）

回答者の概要

表：農家類型別稲作の有無

		専業農家	兼業農家 第１種	兼業農家 第2種	自給的農家	土地持非農家	総計
稲作有		18	7	20	10	7	62
作物種数内訳	1	9	4	12	4	5	34
	2	3	1	5	5	1	15
	3	3	1	2	1	1	8
	4	2					2
	5	1	1	1			3
稲作無		2	1	2	8	1	14
作物種数内訳	1	2		1	5	1	9
	2		1	1	1		3
	3				1		1
	4				1		1
作付無						36	36
総計		20	8	23	18	44	112

表：農家類型別の作付け農作物

作付農作物	専業農家	兼業農家	自給的農家	非農家	総計
食用米	18 | 90.0	25 | 83.3	10 | 55.6	7 | 15.9	60 | 53.6
蔬菜類	8 | 40.0	9 | 30.0	14 | 77.8	1 | 2.3	32 | 28.6
マメ類	5 | 25.0	4 | 13.3	2 | 11.1	1 | 2.3	12 | 10.7
飼料米	8 | 40.0	4 | 13.3			12 | 10.7
ムギ類	5 | 25.0	4 | 13.3		1 | 2.3	10 | 8.9
果実類	1 | 5.0	3 | 10.0	4 | 22.2		8 | 7.1
イモ類	1 | 5.0	3 | 10.0	1 | 5.6		5 | 4.5
花卉類		1 | 3.3		1 | 2.3	2 | 1.8
ソバ類	1 | 5.0				1 | 0.9
飼料稲	1 | 5.0				1 | 0.9
薬草類		1 | 3.3			1 | 0.9

「｜」の右側数値は農家類型別の割合

回答者の多くが稲作（食用米・飼料米・飼料イネ）を中心とする稲作複合経営

専業農家も兼業農家も食用米が中心であるが、専業農家の作物数は約３であり、複合的農業経営を行う傾向にある。自給的農家は自家消費用の蔬菜類の作付けが中心。

表：農家類型別農地貸付の有無

農地貸付	専業農家	兼業農家 第１種	兼業農家 第2種	自給的農家	土地持非農家	総計
有	2	2	1	5	42	52
無	18	6	21	13	2	60
総計	20	8	23	18	44	112

農地の貸付先はおおむね宇和地区内

全質問における頻出単語

順位	抽出語	回数	順位	抽出語	回数	順位	抽出語	回数	順位	抽出語	回数	順位	抽出語	回数
1	農地	51	22	保全	9	44	困難	5	58	若者	4	80	水	3
2	後継者	32	24	自分	8		使用	5		取り組む	4		水路	3
3	農家	30		地域	8		守る	5		収入	4		続く	3
4	管理	25	26	確保	7		整備	5		状態	4		続ける	3
5	維持	24		期待	7		生活	5		推進	4		体力	3
6	環境	18		行う	7		増える	5		西予市	4		大事	3
7	耕作放棄地	17		高齢	7		息子	5		増やす	4		土	3
8	田んぼ	15		栽培	7		大切	5		対応	4		土地	3
9	高齢化	14		地元	7		農業機械	5		大変	4		農作物	3
	農業	14		野菜	7		農薬	5		池	4		農道	3
11	自然	13		来る	7		被害	5		農作業	4		畑	3
	出来る	13	34	気	6		不安	5		圃場整備	4		伴う	3
	心配	13		継続	6		迷惑	5		方針	4		販売	3
	人	13		減少	6	58	シンポル	4	80	拡大	3		範囲	3
	不足	13		耕作	6		餌	4		協力	3		飛来地	3
16	草刈り	12		作付け	6		害虫	4		見る	3		付加価値	3
	飛来	12		作物	6		活動	4		荒れる	3		分かる	3
18	共生	11		除草	6		活用	4		高額	3		補助金	3
19	営農	10		進む	6		減る	4		集落	3		理解	3
	作る	10		進める	6		現状維持	4		出る	3			
	豊か	10		担い手	6		考え	4		上げる	3			
22	必要	9	44	育成	5		荒らす	4		人口	3			

これは、全質問において記載されていた単語の数を集計し、順位を出したものです。

順位によって、アンケートを受けた方がどのようなことを注視、期待、問題としているのか、その傾向が分かります。

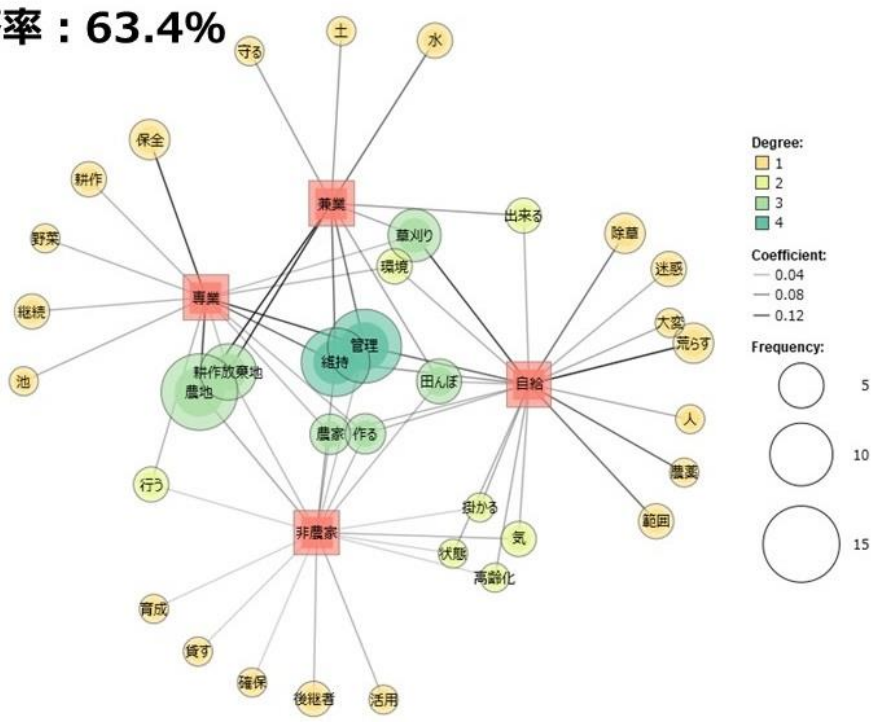
上位の単語を見てみますと、農地、後継者、農家、管理、維持、環境などとなっており、農地を維持すること、後継者を確保することなどが特に気になっているのではないかと考えられます。

また、環境についても上位にあるため、現状の環境に満足しているのか、昔と比べて悪化していると感じているのか、これからも守っていきたいと考えているのか、いずれにせよアンケートの回答に多く使われているため、農家の方に大きく影響しているものと推測されます。

細かい分析は次頁以降、質問毎に説明いたします。

Q1営農において最も重要視していること

回答率：63.4%



これは、他の質問でも共通しますが、図右側の表記にて図の見方を説明しています。質問におけるキーとなる言語の数によって丸の大きさを変えています。

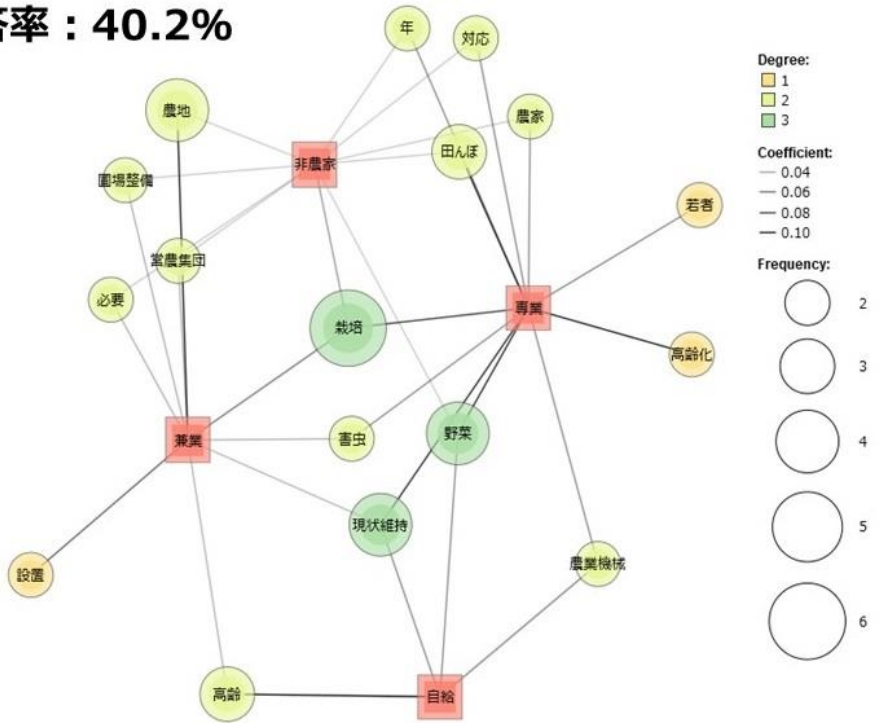
また、この質問の場合、専業、兼業、自給分だけ作っている方、非農家に分けて繋がりを図式化しており、それらに繋がる数によって色分けしています。

そして、繋がるところが集中する場合は、線が太くなります。

今回の質問を分析しますと、専業、兼業、自給者、非農家どの方も管理、維持について懸念していることが分かります。丸の大きさからもその度合いが大きく、荒らさないよう、農地の維持、管理していくことを重要視しているものと考えられます。

Q2営農においてこれからやってみたい取組

回答率：40.2%

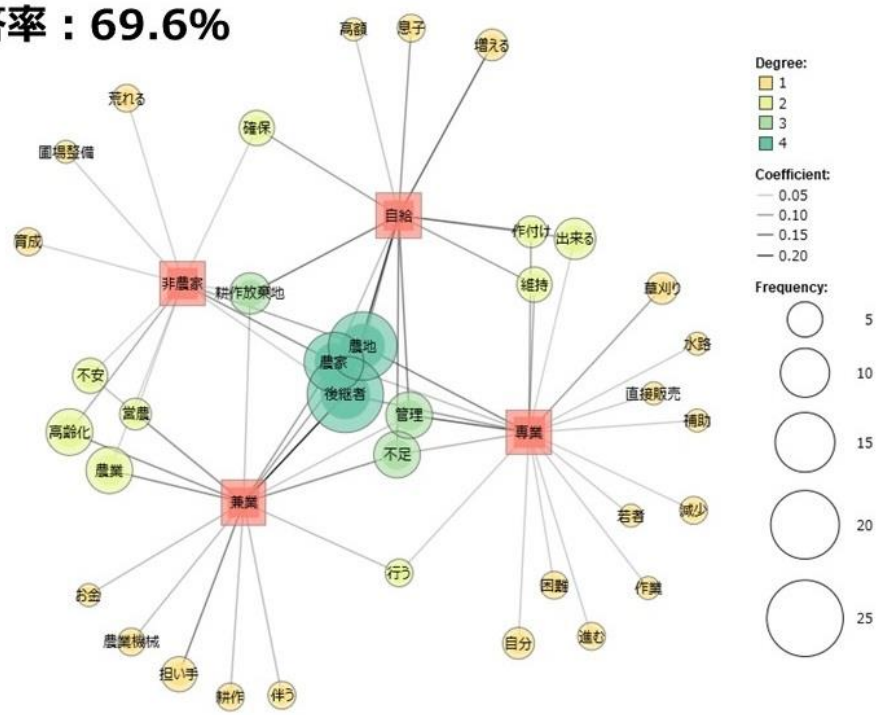


回答率が低いことからも分かるように、これからやってみたいことが特に無い人が多くいました。これは、高齢化によって現状維持していくのがやっとという人が多いからかもしれません。農業法人のような農業集団によって集約していくことが必要という意見もありました。

その中でも、稲作以外の野菜作りをやってみたいという前向きな回答がやや見られました。

Q3営農における現在および将来の課題

回答率：69.6%



先ほどの質問と比べると回答率が約 70%とかなり高く、この質問は回答者の関心が高いことが見受けられます。

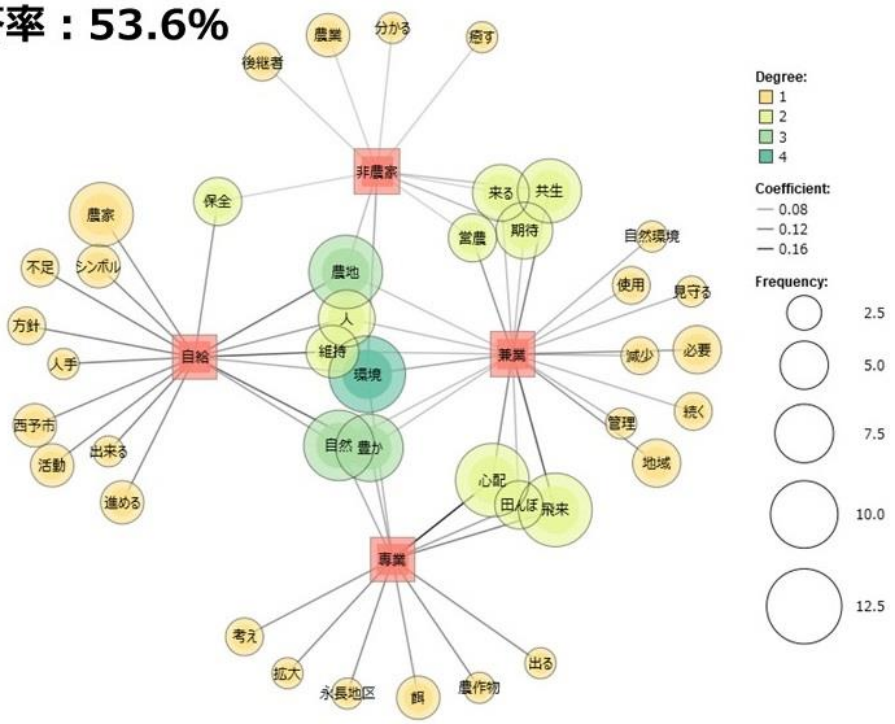
農作物を直接販売していて、その販路を拡大したいというような将来の目標がある方がいる一方、現在、将来の課題で大きく占めているのは、やはり農地を維持すること、そして後継者がいないことです。

補助金頼みの農業でなく、単独で十分な収益があげられるようにしていきたいという意見もありました。

高齢化や、若者の農業離れなど、農家の減少が進む中、将来に不安を持っている方が多くいる現状をよく表しています。

Q4ツル類の保全に関する営農上の期待・懸念

回答率：53.6%



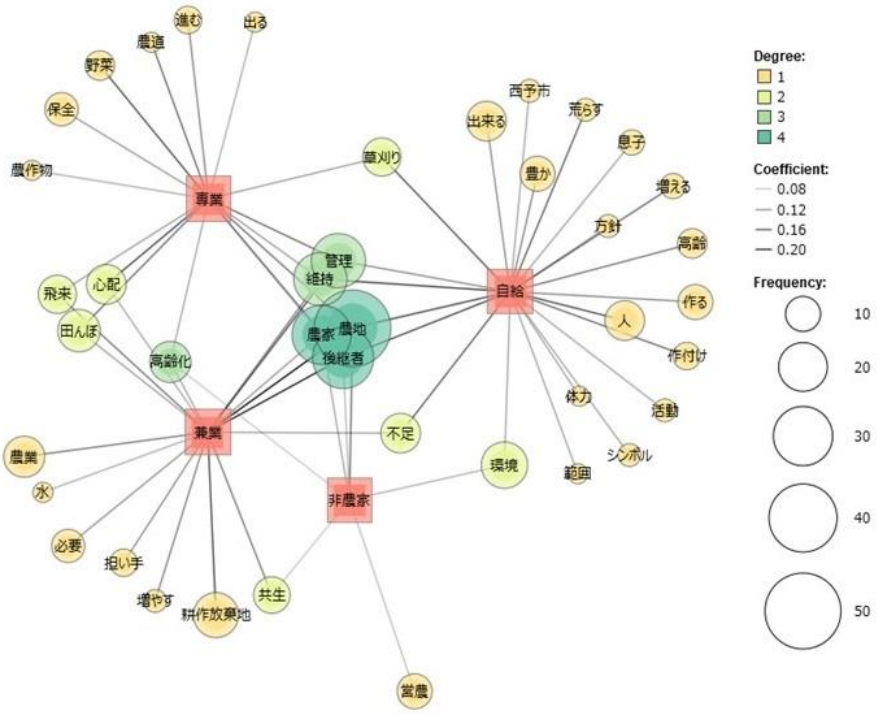
豊かな環境、自然を守っていくことには賛成意見が多いようですが、それらを維持するための手間に対して利益が少なく感じているようです。

農業被害についての心配な声もありましたが、その一方では、農産物の付加価値の向上を期待する声がありました。

その他として、「自分の田んぼに行くのに気を遣って行っている」と、ツルを見守っている人の営農者への行き過ぎた対応について疑問を持っている方もおられました。

また、営農目的であっても、大規模な市外の業者による営農活動で農地を維持するのでなく、地域住民によって守り伝えていきたいという意見もありました。

全項目の総合



全ての質問を合わせました。農地の維持、後継者の確保が専業、兼業、自給者、非農家全てにおいて共通の大きな懸念事項となっています。

また、非農家、兼業農家は豊かな自然環境、農村風景を維持していきたいと考えている人が多いですが、専業、兼業ではそこまで多くなく、農業をする上で環境に配慮する程、心の余裕が無いのではないでしょうか。

その他、農業の専業の後継者でなくとも、兼業で市外にいる息子に帰ってきて欲しいという意見がありました。そのためには農業以外の仕事が必要です。農業・農地の維持のためには、農業だけでなく、その他の様々な生活環境を向上させ、多様な選択ができる社会が必要かもしれません。